인 끼리도 한국어로 이야기 하지 않았다.「코리언 이라는 시점에서 조금 위에서 내려다 보는 시선」이라는 것이 있었다. 온천에서도 한국어로 이야기 하면, 「조선인, 나가」라는 분위기 였기에, 한국어로는 말하지 않았다.

하지만 이렇던 것이 군복무가 끝나고, 복학을 해서 거리에 나갔더니, 「전과 다르다」라는 느낌이였다. 이것은, 일본인 자체가 외국인에 대한 의식을 바꾸었다는 것도 있지만, 원인으로는 인터넷등의 메디어의 발달로 정보가 들어 오게 된 것이기도 하다고 본다. 그러나 무엇 보다도, 이러한 변화에는 한국의 외교력이 높아진 것이 가장 큰 요인이라고 생각한다. 지금의 정권으로 되면서, 한국인이 해외에서 살기가 좋아졌다고 본다.

2001년의 외교력과 현재의 외교력에는 역시 차이가 있다고 생각한다.

외교 정책에는, 「최대의 이점을 노리던지, 최소의 손실을 노리던지 」 어느쪽을 택하는가 라는 문제가 있지만, 기본적으로는 최소의 손실을 노리는 편이 좋다. 하지만, 비판하고 있는 사람들은, 최대의 이점을 노리고 있다. 이러한 관점에서 이명박 대통령을 비판하는 사람도 있지만, 그 사람들에게「2001년의 일본에서 살아봐」라고 말하고 싶을 정도로, 일본에서의 삶에는 실감할 정도의 차이가 있다고 말한다.

◇ 일본사회와 한국 사회에 대하여 ◇

일본의 생활중에 만족하는 부분은, 안정된 상태에서 행동 할수 있다는 것이다. 한국처럼 성급하지 않고, 「서두르지 않고, 화내지 않는」여유를 가지고 무언가를 할수 있다. 불편한 면은, 우선 IT 환경이 나쁜 것을 들수있다. 한가지 더는, 서류 수속이 길다는 점이다. 지키지 않으면 안되는 수속이 너무 많아서, 매뉴얼대로 진행하는 것도 좋지만, 처리 속도가 너무 느리다고 생각한다.

앞으로 일본사회도 한국사회도 개혁이 필요하다. 일본의 「규칙을 지키자」라는 의식은 좋은 점이지만, 지나친 점도 있다고 생각한다.

반면, 한국은「너무 지키지 않는 점」이다. 일본은 지나치게 잘 지키기 때문에 경제 위기에의 대응도 느리다. 한국은 유연하게 어느 정도는 대응 하지만, 항상 준비해 두는 자세가 아직 정립되어 있지 않다. 두 사회에서, 일본의「규율 지키기 」의식, 한국의 유연한 자세를 서로 배울 필요가 있다고 생각한다.

「일본인의 국민성과 한국인의 국민성을 반씩 더한다면, 가장 좋겠죠」라고 말한다.

＜インタビュー　７６＞
チョンさん（20 代・女性）「日本人と外国人が明確な日本社会」

2011 年 10 月 5 日、慶尚南道出身、学部 2 年
日本滞在暦 1 年 7 ヶ月
インタービュー担当：崔佳英

◇ 留学先としての日本 ◇

チョンさんは、大学でメディア関連の勉強をしている。マスメディアに興味を持ち始めたのは、高校生のとき始めて日本のコマーシャルを見たことがきっかけで、そのときはまだ漠然としてではあったがマスメディアに関する仕事に就きたいと思ったという。しかし、大学受験のときにマスメディア関連の学部に出願したが、合格には至らず滑り止めとして願書を出したシステム工学科に進むことになった。高校まで文系で大学から理系に転換し 1 年生のときには大変だったが、大学で始めて勉強の楽しさをわかるようになる。全く興味がなかった分野での勉強であったにもかかわらず勉強の楽しさを知ることで、「じゃあ、自分が本当にやりたい勉強をするとどうだろうと。だから留学を決めたんです」と語る。

韓国の学校ではなく留学を決めた理由は、より広い視野を持ちたいという想いからだった。留学を考え始めるようになった大学 3 年生のとき、日本での滞在の経験がある叔母に今の大学を進められホームページを調べたところ、ちょうど勉強したいコースを見つけ今の学科のカリキュラムに興味をもち、そこから留学先として日本に行くことを決めた。アメリカへの留学も考えていたが、当時、日本という国がものすごい魅力的に感じた。知らない国だから自分にとっては未知の世界で、チャレンジしてみたいと思った。

◇ 家族の反対、日本での自立 ◇

しかし、日本への留学に対し、周りは猛反対だった。「アメリカじゃなくて、日本？！」という反応だった。両親も留学することは賛成だったが、専門を変えて新たに学部に入りなおすこと、アメリカではなく日本に行くことを理由に反対された。

当時は全く日本語がわからなかったので無謀な発想だと思われた。そのうちあきらめるだろうと思われたと思う。その後、一人で日本語の勉強をし、卒業後は4ヶ月間ソウルで日本の大学に行くための予備校に通い、今の大学に志願することができた。しかし、父親は日本に来るまで反対し、今も反対している。

日本での学費は両親から出してもらっているが、生活費の仕送りは無しというのが日本への留学の条件だった。半年に1回の奨学金とバイトでまかなっている。今は、韓国語の講師と、韓国語の個人レッスン（3人）、スーパーのレジのバイトをして月 16 万の収入を得ている。スーパーでのバイトは週6回午前中に入ることで、朝の時間を有効に使っている。韓国語の個人レッスンは、仲介サイトを通じ仕事を始めるようになり、一時期は 5 人を請け負ったこともあるが、スケジュールの調整が難しく、今の3人に個人レッスンをしている。3 人は全員男性で、かれらが韓国語を習う理由とは、韓国映画が好きな人、韓国の伝統文化に興味がある人、ビジネスのために学ぶ人と様々である。

◇　今後の計画　◇

日本での暮らしは、自分には生活リズムが合っていると思う。「私にとってすごい住みやすいとこなんです。ここは」と語るように、何よりも町の雰囲気や、個人主義が強いところが暮らしやすいと感じている。オープンにしているんだけど、割と余計なこと言わない。韓国の人は、国民性を考えると、自分と関係ない人にも余計なこと言う。韓国では、それが自分に取っては迷惑と感じていた。しかし、日本での生活のなかで、住みづらい点を挙げるとしたら、区役所の手続きのスピードが遅いくらいだ。日本での生活は実際は外国だけど、今自分が外国で生活してるという感覚は少ない。

最初は、留学後韓国に戻る計画だったが、今は日本で就職し定住することも考えている。これからは、インターンシップなどの経験を経て、広告関連の会社に就きたい。日本での就職も自分なりのチャレンジだからだ。

◇　日本社会に対する考え　◇

日本社会のいいところは、「外国人が多い」ところだと思う。日本には（日本で）、留学生や、働いている外国人が多いことをみると、割と日本社会は外国人を受け入れ、外国人に対しオープンだと思う。一方で、「悪いとこは、それなんです。オープンしているのに、完全にオープンではない」、日本に外国人が来てもいいけど日本人は外国人に対し「私たちとは違うから！受け入れるけど違う」というはっきりとした区別が存在している。

＜インタビュー　７７＞

朴さん（20 代・女性）「日本人でもない、韓国人でもない」

2011 年 10 月 5 日、釜山出身
博士課程 1 年目、日本滞在暦 10 年
インタビュー担当：崔佳英

朴さんが始めて日本に来たのは、13 年前（1998 年）の中学 2 年生のときである。韓国で中学に入学したあと、友人関係や学校の教育システムに対する不満から、「とにかく、韓国から出たい」という気持ちが強かった時期に、ちょうど父親が仕事で日本での 2 年間の勤務が決まり、朴さんを含め家族 4 人で来日することとなったいう。

◇　中学校時代の来日と、再びの留学として　◇

中学 2 年生のときに始めて日本に来たときは、2 年の滞在予定だったが、2 年後、県内にあるインターナショナル・スクールへの進学のため帰国を遅らせた。朴さんと弟に日本でもっと教育を受けさせるため、母親が日本で働いていたところで母親の滞在資格を申請し、母、朴さん、弟の 3 人は日本の滞在を 1 年間延長した。インターナショナル・スクールは英語の勉強が可能という利点のためであった。しかし、日本で高校を卒業するつもりはなかった。韓国で卒業証書をもらい、日本の大学に留学生枠として出願するという教育戦略として、一旦韓国に帰国した。しかし、帰国後、予定していた国際学校は定員制限のため編入できず、一般高校（人文系高等学校）に編入するが、「韓国の学校」になじめず、1 人で日本に戻りインターナショナル・スクールに通った。その後、韓国の国際高校に通っていたときに、弟の留学のため母と弟が渡英するが、父が体調を崩したことをきっかけに母は韓国に戻ることになり、高校 3 年生だった朴さんが一人でいる弟のためにイギリスに行くこととなった。語学学校での 10 ヶ月の英語の勉強では、イギリスでの大学進学のレベル

までは到達できなかった。もうその時期には韓国の修学能力試験[2]も終わっていたため韓国での大学進学もできなかった。そして探したのが日本のN大学で、イギリスから願書を出し日本にきて面接を受け、進学することになった。N大学での留学生同士でのトラブルもあり、3年生から2年半はdual degreeのコースを選択し、アメリカで勉強した。その後はまた日本で修士課程に進学し、現在は博士課程1年生に在学中である。

◇　韓国人女性の国際結婚と市民権　◇

修士論文では、日本人男性と結婚したニューカマーの韓国人女性を対象に、帰化や永住権の取得、あるいは両方とも選択しないというものに分類し、その選択にあたっての家族や周りからの影響、また、その選択による自分の生活や人生観への影響を研究した。研究対象を日本で自分の仕事を持って10年以上滞在している韓国人女性に絞って分析した。彼女たちは、「自立している人たち」、「自分で選択ができる立場である女性たち」であり、結婚ビザでの来日した女性の場合は、自分の選択というものがすごく弱く、「家族の、あの、圧力とか、その周りの影響によって、その帰化なり、その市民権を選ぶ」からである。研究の対象になっていた女性たちの、帰化や永住権の選択後の周りの変化をみてみると、国籍取得を望んでいた家族も「実際取ってからは別に何も変わらなかった」という結果が出たという。

国際結婚を研究テーマにしたのは、政治学専攻の学部時代、女性の人権問題に関心があり、まず修士課程ではかれらのライフスタイルをわかった上で、階層問題を研究しようと思ったからである。まだはっきりとは決めていないが、今後、博士課程では、日本における韓国と中国、フィリピンの国際結婚をした女性にまで研究対象を広げ研究するつもりである。

◇　日本での就職　◇

周りの韓国人の友達はみんな一発で就職ができた。そこまで難しく就職活動をした子はいなかった。友達というのは、中学と高校のときに日本に来た子たちのことである。「私の友達は、半日本、半韓国って感じの雰囲気がしてるんです」。かれらは子どものときに来日したため、日本語の問題もなく、国際経験もありながら、日本での学歴も高く、その上、母国語（韓国語）も話せるからだと思う。しかし、大学の時に知り合った韓国人は留学生が多く、かれらは、「生活言語と面接言語とかやっぱりその、その場に合う言葉」の面や、日本の学生の就職のプロセスについていけなかった点が問題で就職が難しいと思う。かれらは情報力も足りなく、韓国人だけで結束しているため日本人学生の就職の情報が入っていかない。その上、就職にあたって留学生というのもマイナスに働いていると思う。

◇　日本に来る前の「日本」、中高生時代の「日本」、そして今の「日本」　◇

朴さんが13年前の中学のとき来日してから、韓国での高校生活、イギリスでの滞在、アメリカでの留学を除いても、日本での生活は今年で10年になる。初めて日本に来る前は、「日本の人たちとすごい会うチャンスがあったので、すぐ仲良くなれるって思ってたんですよね。（…）全然その、日本人と韓国人の違いはない、って思ってたんですよ。ながーい間。」だけど、中学校のときはそういうことを考える余裕がなかった。言葉はまず通じてなかったし、学校でのいじめもひどかったので、日本人がこういう考えをするとか、日本に対して何かを考えることもなかった。

高校のときは、日本にいたけど、日本とはなれた。インターナショナル・スクールに通っていたので、「日本」と離れていた空間だった。そして、日本の大学に入って、やっと気付いたのが「日本人は、外国人に偏見が強すぎる」ということだった。「完全に外国人はそとの人間で」これは外国人も自分たちで感じると思う。「自分は外の人間だから内の人間にはなりにくいから、もうバウンダリーをお互いに切っている」。大学に入りこれがあまりにもはっきりしているところで驚いた。もう一つは、人と接するスタイルが丁寧すぎて、これは友人関係でも存在することで、未だに慣れないときがある。最初の4年間は韓国とあまり変わらないと思ったのに、時間が経つにつれ、日本と韓国はだいぶ違うなっていうのを今も感じている途中だと語る。

◇　どちらでもない自分　◇

日本と韓国の違いを感じるようになることで、今度は「じゃあ、自分はどこにもうちょっと近い

[2] 日本のセンター試験に当たる

んだろうと思ったときに、そこで悩みが出てくるの。わかんない。自分も。」だから、一番気持ちが楽だったのはアメリカにいる時期だった。完全に外国にいるって思えたからであって、日本ではそう思えない。しかも、韓国に行っても日本に帰らなきゃいけないかなとか、日本にいても、いつか韓国行かなきゃいけないかなと思ってしまう。「もう、どっちもどっちもでもない」これは、私の中学からの韓国人の友だちもみんな同じようなことを言っていた。今後「私みたいな人たちは増えるんですよ。ニューカマーの子どもたちが多いから、絶対私みたいな人たちが増えてくる」と語っていた。

◇　自分の経験と今のニューカマーの子どもの経験　◇

現在、10 人位の人を対象に家庭教師をしているが、中学生から大学生まで様々な生徒がいて、国籍も韓国人、日本人、アメリカ人と多様である。その中には、ニューカマーの子どもたちもいる。3 歳、4 歳のときに来て日本での滞在が長い子どもたちには韓国語と英語、最近来日した子どもたちには日本語と英語を教えている。来日したばかりの子どもたちは、すぐに「日本の学校」に入らず、まずは韓国人学校に通う。その他の子どもたちは殆ど「日本の学校」に通っている。かれらはもうすでに日本語が完璧な状況で「日本の学校」に入るので、学校での困難はあまりない。さらに、自分が昔中学に通っていた時期とは全く環境が違う。福岡には外国人が少ない地域であり、学校では自分が初めての外国人であったため学校側も生徒側もどう接すればいいかわからない状況だった。政府からの制度的支援も、学校での支援も全くなかった。

しかし、私が教えている子どもたちはみな新宿区に住んでいる子どもたちなので、小学校では一クラスに 5 人は韓国人がいて、中学校でも 3 人は必ずいるらしい。だから問題が起きても「韓国人として戦っていくってのは、1 人じゃないから」と戦っていける。新宿区だけを考えると、学校の体制も変わりつつあると思う。学校で自分たちの国のことを紹介したり、運動会で韓国の伝統的な文化を披露するなどの交流も増えている。新宿区のこのような試みは良い変化だと思う。これに加え、自分がいた頃と今は、韓流の前と後っていうことでも全然違う。韓流が入ってきてからは、韓国人が日本で生活しやすくなったと思う。今の子どもたちの間では、韓国のことを全く知らない子が馬鹿にされる位だ。

このように自分の経験と、今の子どもたちの経験には、まちも環境も全く違うので比べることができない。自分が日本の中学校で経験したいじめの問題を、今の子どものお母さんたちに話すと、「なんで？」みたいな反応が返ってくる。新宿区は情報量が多いので、親は子どものいじめ問題を心配し、いきなり子どもを日本の学校に行かせたりしない。言葉ができるのと、全くできないのとはかなり違う。言葉ができると自分の意見や感情を発することができるので状況は全く違うと思う。

◇　今後のこと　◇

生活をする上で、慣れている地域は、英語圏と日本である。韓国は、韓国を出たときから、2 年に 1 度程度しか帰国しておらず、両親の方が会いに来ることが多い。韓国に帰ってない時間の方が長過ぎて、韓国の変化のスピードについていこうともしてないし、ついていこうとしていないのが長すぎて、韓国は慣れない。「やろうと思えば、そりゃ韓国人だからできると思うんですけど。多分いまんとこやろうと思う気持ちがないと思う。自分の中で」。今後、どこに住むことになるかはまだわからない。今、博士課程に入ったばかりなのでいつ卒業できるかにもよるが、とりあえずあと 5 年は日本に滞在するとつもりだ。もし、日本とかかわりがある男性と出会って結婚するとしたら、日本を自分の舞台としてやっていくと思う。保守的かもしれないが、女性だからやっぱり結婚した相手にすごく影響されると思う。男性がちゃんとしていられるところで住みたい。自分はパソコンさえあれば勉強はどこでもできるし、言葉の面でもどこに行ってもやっていけるくらいの言葉まではがんばってやってきたので、男性がどこに行くとしてもやっていけると思う。このまま続ければ、将来は大学か研究所で働くことになると思うが、とくにどこの国で先生になりたいなどは決めていない。出会う男性のことを考えなくても、正直どこでもやっていけるし、「どこでもやっていける自信がある。楽しく」と語っていた。

◇　外国人にとっての日本、日本にとっての外国人　◇

日本は、安全で、近くにものが揃っているとい

う便利性の面では外国人が住みやすいところだと思う。この2つが一番大切なことだと思う。もちろん、自分も生活の面では、住みやすいと思う。しかし、日本は例えば、「電話をして、ぴたっと会って、友達とこう、ご飯を食べに行ったりとか、そういう韓国人で情というのが、日本には、やっぱり欠けているので。欠けてるっていうか、そういう文化がないと思う」。これを考えると少しさみしいところだと思う。

日本は国際社会と唱えているが、国際社会には全然至っていないと思う。外国人と接する人が、あまりにも少なすぎる。「外国人はただこの国に、遊びに来ている、ちょっとこう、寄って、いつか帰る人だっていうイメージが強すぎてその人との人間としてその関わりを、すごい面倒くさいと言うか、あまりやろうとする気持ちがまずないと思う」。外国人をビジターとして考えるのではなく、社会の一員としてみる認識の変化が必要と思う。

<인터뷰　７７>

박모씨 (20대・여성)「일본인도 아니고, 한국인도 아니다」

2011년10월5일, 부산 출신
박사과정 1학년, 일본체제 10년째
인터뷰 담당： 최 가영

박모씨가 처음 일본에 온 것은, 13년 전 (1998년) 의 중학교 2학년 때 이다. 한국에서 중학교에 입학한 후, 친구관계와 학교의 교육시스템에 대한 불만으로, 「어쨌든, 한국에서 나가고 싶다」라는 마음이 강했던 시기에, 때마침 아버지가 일 관계로 일본으로 2년간 근무하게 되는 것이 결정되고, 박씨를 포함한 가족 4명이 일본으로 오게 되었다고 한다.

◇ 중학교 시절 일본에 오게 되고, 다시금 유학생으로 ◇

중학교 2학년때, 처음으로 일본에 왔을때는, 2년동안 체제할 예정이였다. 하지만, 2년이 지난 후, 현내에 있는 인터내셔널 스쿨에 진학하게 되면서 귀국을 늦추게 된다. 두 자녀에게 일본에서 좀더 교육을 받게 하기 위해, 어머니가 일하고 계시던 직장에서 체류자격을 신청해서 어머니와 본인, 그리고 남동생, 이렇게 세명 만이 일본에서 일년간 더 비자를 연장해서 있게 된다. 인터내셔널 스쿨에서 영어 공부를 할수 있다는 이점은 있었지만, 일본에서 고교를 졸업할 생각은 없었다. 한국에서 졸업증서를 받아, 일본의 대학에 유학생으로 입학하고자 하는 교육전략이 있었기에 일단 한국으로 귀국했다.

하지만, 귀국후, 예정했던 국제학교는 정원제한이 있어 편입 할수 없었고, 일반 인문계 고등학교로 편입하게 된다. 그러나, 한국의 학교에 적응하지 못한 체, 혼자 일본으로 돌아와서 인터내셔널 스쿨에 다녔다. 그 뒤, 한국의 국제고교에 다니던 동생이 엄마와 함께 영국으로 유학하게 된다. 하지만, 아버지의 건강문제로 인해, 어머니는 한국으로 돌아가시고, 고교 3학년이였던 박모씨가 혼자있는 남동생을 위해 영국으로 가게 된다. 어학교에서의 10개월 영어 공부로는 영국의 대학진학 수준에는 미치지 못했다. 또한 이미 그 시기에는 한국의 수학능력시험이 끝났기에, 한국의 대학에도 진학은 불가능했다.

그래서 찾게 된 것이 일본의 N대학 이고, 영국에서 원서를 내고, 일본에 와서 면접을 보고, 진학하게 되었다. N대학에서는 유학생들끼리 트러블도 있어, 3학년 부터 2년반은 국제학위과정 (dual degree)을 선택해서, 미국에서 공부했다. 그 뒤는 또다시 일본에서 석사과정으로 진학했고, 현재는 박사과정 1학년에 재학중이다.

◇ 한국인 여성의 국제결혼과 시민권 ◇

석사논문은, 일본인 남성과 결혼한 뉴커머 한국인 여성을 대상으로, 귀화나 영주권을 취득, 혹은 양쪽다 선택하지 않는 것으로 분류해서, 그 선택에 있어서 가족이나 주위의 영향, 또는 그 선택에 의한 자신의 생활이나 인생관에 미치는 영향에 관해서 연구했다.

연구대상으로는, 일본에서 자신의 일을 가진 10년이상 체제한 한국인 여성에 한정하고 분석했다. 그녀들은 「자립하고 있는 사람들」「스스로 선택할수 있는 입장의 여성들」이다. 결혼 비자로 일본에 오는 여성의 경우, 대부부은 자신이 선택하는 부분이 아주 적고, 「가족의 압력이나 주위의 영향에 의해 귀화 또는 시민권을 선택」하기 때문이다.

연구대상이 된 여성들의, 귀화나 영주권의 선택 후의 주위의 변화를 살펴보면, 국적취득을 희망하고 있던 가족도 「실제로 취득하고 난 뒤에는 별로 아무것도 바뀌지 않았다」라는 결과가 나왔다고 한다.

국제결혼을 연구테마로 한 것은, 정치학을 전공하던 학부시절, 여성의 인권문제에 관심이 많았고, 우선 석사과정에서는 그들의 라이프 스타일을 살핀 후, 계층문제를 연구 하려고 생각했기 때문이다.

아직, 명확하게 결정하지 않았지만, 앞으로 박사과정에서는, 일본에 있어서의 한국, 중국, 필리핀 출신의 국제결혼을 한 여성에게 까지 연구대상을 넓혀서 연구를 할 계획이라고 덧붙였다.

◇ 일본에서의 취직 ◇

박모씨 주위의 한국인 친구들은 전부 한번에 취직이 되었다. 그렇게 어렵게 취직활동을 한 친구는 없었다. 여기서 말하는 친구는, 중학교와 고등학교때 일본에 온 친구들을 말한다.「저의 친구는, 반은 일본, 반은 한국이라는 느낌의 분위기다. 」

즉, 그들은 어릴때에 일본에 왔기에 일본어도 문제 없고, 국제 경험도 있으며, 일본에서의 학력도 높으며, 게다가 모국어(한국어)도 할 수 있기 때문이라고 생각한다.

하지만, 대학시절 알게 된 한국인은 유학생이 많고, 그들은,「생활언어와 면접언어에 있어서 역시나 조금, 그 장소에 맞는 언어」라는 면에서, 일본의 학생들의 취직 과정에 따라갈수 없었던 점등이 문제로, 취직하기 어렵지 않나 라고 추측해 본다. 그들은 정보력도 부족하고, 한국인들끼리 결속되어 있어서 일본인 학생들의 취직정보가 잘 들어가지 않는다. 게다가, 취직하는데에 있어서 유학생이라는 점 또한 마이너스로 작용한다고 생각된다고 말한다.

◇ 일본에 오기전의 「일본」, 중・고교시절의 「일본」, 그리고 지금의「일본」 ◇

박모씨는 13년전 중학교 시절 일본에 와서, 한국에서의 고교생활, 영국에서의 체제, 미국에서의 유학을 제외하고도, 일본에서의 생활은 올해로 10년이 된다.

처음, 일본에 오기 전에는,「일본의 친구들을 많이 만날 기회가 있었기 때문에, 곧바로 사이좋게 지낼거라 생각했어요. (…) 전혀 뭐랄까, 일본인과 한국인의 차이는 없다 라고 생각했죠. 오랬동안.」

하지만, 막상 중학교 때는 그런것들을 생각할 여유가 없었다. 우선 언어가 통하지 않았고, 학교에서는 이지메도 심했기에, 일본인은 이런 생각을 한다 라던지, 일본에 관해서 무언가를 생각조차 하지 못했다.

고교시절은, 일본에 있었지만, 일본과는 멀어졌다. 인터내셔널 스쿨에 다녔기 때문에,「일본」과 떨어져 있는 공간이였다.

그리고, 일본의 대학에 들어가서, 겨우 느낄 수 있었던 것이,「일본인은, 외국인에게 너무 편견이 많다」라는 것이였다.「완전히 외국인은 외부사람으로」. 이것은 외국인도 스스로 느끼는 점이라 생각된다.「자신은 외부사람이라서 내부인은 되기 어렵기 때문에, 이미 서로 간에 경계를 짓고 있다」. 대학에 들어가서 이런것들이 너무 확실하게 구분되어져 있는 것에 놀랐다.

한가지 더, 사람을 대하는 스타일이 너무 정중해서, 이것은 친구 관계 에서도 존재하는 것으로, 아직도 익숙하지 않을 때가 있다. 처음의 4년간은 한국과 별반 다르지 않다고 생각했는데, 시간이 흐를수록, 일본과 한국은 상당히 다르다는 것을 지금도 느끼고 있는 중 이라고 말한다.

◇ 어느쪽도 아닌 자신 ◇

일본과 한국의 차이를 느끼게 되면서, 이번에는「그러면 자신은 어느쪽에 좀더 가까운가 라고 생각했을때에, 그 시점에서 고민이 시작된다. 모르겠다. 나 자신도.」. 하지만, 가장 편안하게 느꼈던 곳은 미국에서의 시절이였다. 완전히 외국에 있다고 생각했기 때문인데, 일본에서는 그렇게는 생각 할 수가 없다.

더욱이, 한국에 가도 일본으로 돌아가야만 하나 라던지, 일본에 있어도 언젠가는 한국에 돌아가야만 하는걸까 라고 생각하게 된다.「이미, 어느쪽도, 어느쪽이라고도 할수 없다」. 이것은, 본인의 중학교시절 부터의 친구들도 전부 비슷한 말을 한다고 한다. 앞으로 「저 같은 사람들이 많아져요. 뉴커머의 자녀들이 많기 때문에, 절대적으로 저 같은 사람들이 많아질 거예요.」라고 덧붙였다.

◇ 자신의 경험과 지금의 뉴커머의 자녀들의 경험 ◇

현재, 10명정도 아이들의 가정교사를 하고 있지만, 중학생부터 대학생까지 여러 생도들이 있다. 국적도 한국인, 일본인, 미국인으로 다양하다. 그 중에는, 뉴커머의 어린이들도 있다. 3세

、4세때에 와서 일본에서 장기간 체제한 어린이들에게 있어서는 한국어와 영어, 최근에 일본에 온 어린이에게는 일본어와 영어를 가르치고 있다.

일본에 온지 얼마되지 않은 어린이들은, 금방「일본의 학교」에 들어가지 않고, 우선은 한국인 학교에 다닌다. 그 외의 어린이들은 대부분「일본의 학교」에 다니고 있다. 그들은 이미 일본어가 완벽한 상태에서「일본의 학교」에 있기에, 학교에서 곤란한 점은 별로없다. 더욱이, 자신이 옛날에 중학교를 다니던 시절과는 환경이 전혀 다르다. 후쿠오카에는 외국인이 적은 지역으로, 학교에서는 자신이 첫 외국인이였기에, 학교 측도 학생들 측도 어떻게 접해야 할지 모르는 상태였다. 정부에서의 제도적 지원도 학교에서의 지원도 전혀 없었다.

하지만, 제가 현재 가르치고 있는 아이들은 전부 신쥬쿠구에 살고 있는 어린이들로, 소학교에서는 학급당 5명 정도는 한국인이며, 중학교에서도 3명정도는 있다고 한다. 그래서 문제가 생겨도「한국인으로서 부딪혀 나가야 하는것은 혼자가 아니니까」라며 부딪혀 나갈수 있다.

신쥬쿠 만을 보더라도, 학교의 체제도 변해가고 있다고 생각한다. 학교에서는 자신들의 나라에 대해서 소개한다든지, 운동회에서 한국 전통문화를 보여주는 등의 교류가 늘어가고 있다. 신쥬쿠의 이러한 시도들은 좋은 변화라고 생각한다. 여기에 더하여, 자신이 지내왔던 시절과 지금은, 한류붐의 전과 뒤 라는 것도 있기에 전혀 다르다. 한류붐이 들어서면서, 한국인이 일본에서 생활하기 쉬워졌다고 생각한다. 지금의 아이들 세계에서는 한국의 것을 전혀 모르는 애가 바보 취급 당할 정도이다.

이렇게 자신의 경험과 현재의 아이들의 경험에는, 도시도, 환경도 전혀 다르므로 비교 할수는 없다. 자신이 일본의 중학교에서 경험했던 이지메 문제를 지금의 아이들 엄마에게 이야기하면,「어째서？」라는 반응이 돌아온다.

신쥬쿠구는 정보량이 많아서, 부모들은 자녀들의 이지메 문제를 걱정해서, 바로 자녀들을 일본의 학교로 보내거나 하지는 않는다. 언어가 되는것과 전혀 되지 않는 것은 상당히 다르다. 언어를 말할수 있으면, 자신의 의견이나 감정을 표현할수 있기에 상황은 전혀 다를거라고 생각한다.

◇ 앞으로의 계획 ◇

생활하는 데 있어서, 익숙한 지역은, 영어권과 일본이다. 한국은, 한국을 떠나 오면서부터2년에 한번 정도 밖에 귀국 하지 않아서, 부모님께서 만나러 오실 때가 많다.

한국에 돌아 가지 않은 시간이 너무 길어서, 한국의 변화 하는 속도에 따라 갈려고도 하지 않을 뿐더러, 너무 오랜시간이 지나서 한국은 익숙지가 않다.「할려고 하면, 당연히 한국인이기에 가능하다고 생각 되지만, 아마도 지금은 할려고 하는 마음이 없는 것이라고 생각 된다, 내안에서.」

앞으로, 어디에서 살게 될지는 아직 모른다. 이제 박사과정에 입학한 상태이기에 언제 졸업할 수 있을지에도 달렸지만, 우선은 5년정도 일본에 체제 할 생각이다. 만약, 일본과 연관된 남자와 만나서 결혼하게 된다면, 일본을 자신의 무대로 열심히 해나갈 생각이다. 보수적인 생각일지는 모르지만, 여성이기에 역시 결혼한 상대에 따라 많이 영향을 받을거라고 생각된다. 남성이 제대로 활동 할 수 있는 곳에서 살고 싶다.

제 자신은 컴퓨터만 있으면 공부는 어디에서도 가능하고, 언어면에 있어서도 어디에 가더라도 해 낼수 있을 정도의 언어까지는 열심히 해왔기 때문에, 남자가 어디로 가든지 헤쳐 나갈수 있다고 생각한다.

이대로 계속 지내면, 장래는 대학이나 연구소에 취직할거라 생각되지만, 특히 어느 나라의 선생님이 되고 싶다고 정하지는 않았다. 앞으로 만날 남자에 대해 생각하지 않더라도, 솔직히 어디에서라도 해 나갈수 있고,「어디서라도 해나갈수 있는 자신감이 있다. 즐겁게」라고 덧붙였다.

◇ 외국인에게 있어서의 일본, 일본에 있어서의 외국인 ◇

일본은 완벽하고, 가까이에 모든것이 잘 갖추어져 있는 편리성의 면에 있어서 외국인이 살기 쉽다고 생각된다. 이 두가지가 가장 중요한 것이라 여겨진다. 물론, 자신도 생활면에 있어서는 살기 쉽다고 생각한다.

하지만, 일본은 예를 들면,「전화를 해서, 우연히 마주쳐서, 친구랑 뭐랄까, 밥을 먹으러 간다던지, 그런 한국인이 말하는 정이라는 것이, 일본에서는 좀 부족한것 같다. 결여되어 있다고

할까, 그런 문화자체가 없는것 같다」. 이런것들을 생각하면, 좀 외로운 곳인것 같다.

일본은 국제사회라고 말하지만, 국제사회로는 전혀 도달해 있지 않은 것 같다. 외국인과 접하는 사람이, 너무도 적다. 「외국인은 단지 이 나라에, 놀러온다. 조금 들러서, 언젠가는 돌아갈 사람들이라는 이미지가 너무 강해서, 그 사람과 인간적인 관계를 맺는 것을, 좀 불편해한다 라고나 할까, 별로 할려고 하는 마음이 우선 없는 것 같다」.

외국인을 방문자로서 생각하는 것이 아니라, 사회의 한 구성원으로 보는 인식의 변화가 필요하다고 생각한다.

＜インタビュー　７８＞

HJ さん（20 代・女性）「建築士として社会福祉にも力になりたい」

2011 年 10 月 7 日　光州出身
2 級建築士、日本滞在 8 年
インタビューア：呉 世蓮

◇　略歴　◇

HJ さんは高校卒業と同時に来日して、今年で 8 年目になる。日本語学校と専門学校の卒業後に銀座にある 1 級建築士事務所で、2 級建築士として働いている。仕事を始めて 5 年目になる HJ さんの主な仕事は、クライアントから仕事をうけて設計や色々な手続きを行うことだという。現在は、叔母さんと日本人の叔父さんと一緒に江東区に住んでいる。

◇　来日したきっかけ　◇

もともと HJ さんは日本の社会福祉について勉強したくて、来日したのである。日本には叔母さんと叔父さんが住んでいたため、彼らを頼りにして来日したとも言えると HJ さんはいう。

「今、やっている仕事と全然違いますが、日本の社会福祉について勉強をしたかったのです。社会福祉関係の大学に入りたかったのですが、なかなかうまくいかず、入試を失敗しました。福祉関係の学校を色々調べてみたんですが、そこで、目に入ったのが、『福祉住環境コーディネーター』という資格で、その資格が取れる専門学校がありまして、『福祉住環境コーディネーター』がとれるという学科が建築学科でした」。この時、彼女における人生転機を迎えたとも思える。「元々物作りに興味があって、最初はやってみようかなという気持ちで入ってみたら、すごい面白さを感じて、ずっと今までやって来れたと思います」という。

◇　人間関係　◇

HJ さんは日本語学校以外の専門学校の友達や会社の人達はみんな、日本人だという。周りのほとんどの人が日本人だが、彼らにいつも優しくされて、人間関係に関しては苦労したことがない。会社の人々のみならず、専門学校も外国人が HJ さんしかいなかったが、「普通にみんなと仲良くて、今も飲みにいったり、遊びに行ったりしています」と微笑みながら語る。敢えて、一つ日本人と韓国人の違いを挙げると、「やっぱり、接し方？ですかね。韓国人の友達は他人に対して、特に友達に気遣う意味で、ちょっかいを出す、おせっかいをする場合が多いですが、日本人の友達はあまりそういうのがなくて、ある程度の距離を保ちながら、仲良くやりつつ、みたいな？（笑）」。HJ さんは日本人の付き合い方が合うようで、日本に来てから変わったのではなく、もともと日本に来る前からだという。

また、今一緒に暮らしている叔母さんと叔父さんの話をしてくれた。「叔父さんが日本人だからか、どうかそれはわからないですけど、おそらく日本人だからだと思います。もちろん私のこと、家族だと思っていると思いますが…」。韓国では親戚と一緒に住んだことがないので、最初、よくわからないところがあったという。「例えば、韓国の場合、叔父さんにとって私は姪にあたるのですが、私の常識的には、私は姪ですので、とくに一緒に住んでいる時は、私を叱ったりするのはあり得ると思います。でも、私の叔父の場合は、直接叱るのではなく、私の叔母を通して話をするのです。私には直接、言わないのです。なぜなら『お前の姪っ子だから』というのです。そういう部分は、たまにびっくりします。」HJ さんの叔父さんは普段、彼女のことを本当の家族のように心配してくれるし、優しいけど、このような時に、HJ さんはたまに文化の違いを感じるという。HJ さんが思うには、日本語と韓国語の違いからだという。韓国語には「私」を指す時に「我々（ウリ）」という言葉をよく使うが、日本語にはあまり使われていないため、言葉の文化が普段の生活にも出るのではないかと思われる。

◇　新宿区との関わり　◇

HJ さんは来日して 1 年間、新宿にある日本語学校に通っていた。その頃はよく新宿で遊んだりしたという。その後、「専門学校に進学してからも、専門学校の友達と一緒に買い物に行ったりしましたが、最近はやっぱり、仕事であまり行かなくなったんです」。

しかし、最近は、新大久保の方によく行くという。「新大久保とかは、前はあまり行かなかったのですが、最近、すごいブームじゃないですか？それがなんか気になって行き始めたんです（笑）」。特に、1 年前からお付き合いしている彼氏に出会ってから、一緒に新大久保に行くようになったが、最初のきっかけは、彼氏から韓国料理を食べに行こうと誘ってくれたからだという。

今まで、韓国料理が食べたいとか、新大久保に行きたいという気がおこらなかった。なぜなら、「その他に楽しいことがいっぱいあったから？ですかね…」。叔父さんが日本人なので、家では日本の生活が中心になっている。これに対してあまり違和感はなかったようだ。

HJ さんは新大久保のみならず、最近は自転車で飯田橋や神楽坂によく遊びに行くという。「私、カフェ巡るのが大好きなので、美味しいもの食べに行ったりします。あと、そこの雰囲気が大好きです。なんか、日本っぽくはないけど、日本っぽいところもありますし、なんか、洋風っぽいところもあるんじゃないですか。そういう雰囲気が好きなのかな。あと、私自転車乗るのが大好きですが、先週も行きました。神楽坂に」。

◇　建築士の魅力と将来の夢　◇

HJ さんは、2 級建築士の資格を持っているが、現在、1 級建築士の資格をとるために勉強に励んでいる。今の仕事の魅力について語ってくれた。「普段、パソコンの前でずっと平面上で書いているものが、実際に立体的に出来上がるというのをみる度に感動です。そして楽しいし、何十億ものお金をもらって、自分で人の住む家を建てるわけですから、そういう仕事ってめったにないんじゃないですか（笑）。すごい楽しくやっているので、将来もずっとやり続けると思います」。

建築士として生きていきながら、福祉に関する仕事にも携わっていきたいという。例えば、「福祉もいろんな意味があるのですが、子どもの時から、ずっと身体の不自由な方とか、あまり裕福じゃない家庭で育った人を助けたいという気持ちは現在も変わらないです」。今の仕事と福祉の仕事を結び付けて、同時にやっていきたい目標があるという。「まずは、今も仕事でやっているんですが、福祉施設だったりとか、医療施設だったりとか。いま、仕事でやっていることをさらに自分の身に付けて、生活に不自由な人たちが良い生活が送れるように、力になりたいです。あとは、日本と韓国だけではなく、カンボジアや東南アジアの子どもたちが安心して、勉強ができるような学校などを自分の力で、建ててあげればいいなと思っています」。社会福祉の勉強のために来日したものの、試練を超えて今現在、自分らしくいられる建築士という仕事に出会ってなおかつ、建築士として社会福祉にも力を注ぎたいという HJ さんから熱いパワーと輝きを感じることができた。

＜인터뷰　７９＞

YR씨 (20대・여성)「국제 교류를 더욱 넓혀 가고 싶다」

2011年10月8日, 서울출신
대학원생, 일본체재 5년째
인터뷰어 : 오 세연

◇　약력　◇

YR씨는 일본에 온지 5년째이며,현재 대학원 1학년에 재학중이다. 학부때는 국제 관계학,문화학에 대해서 공부를 했으며, 졸업논문의 테마는 광고에 관한 한일비교 연구를 했다. “한국과 일본의 광고가 비슷한 점이 많다고 생각을 했는데 조사를 하면서 차이점이 많이 있다는 것을 느끼게 되었고 그것을 계기로 대학원에 가서 더 구체적으로 공부를 해 보고 싶다고 생각했어요.” 현재는 일본 사회에 있어서 미디어,커뮤니케이션에 대해서 공부를 하고 있다.

◇　일본 유학을 오게 된 동기　◇

평소에 일본에 관심이 많았던 YR씨는 고등학교 2학년때, 일본의 대학교로 진학을 할려고 결심했다. “고등학교때 수학여행을 일본으로 오게 되었는데요, 수학여행을 교토 ,오사카로 오게 되었어요. 3박4일로 짧게 오긴 했는데 그때 일본에 처음 오고 한번 더 와 보고 싶다, 알고 싶다라고 생각하게 되어서 관심을 가지고 있을때,

친구한테 w대학교에 이런 학부가있다고 소개를 받아서...” 일본에 있는 대학교를 다니면서 일본어도 공부하고 일본의 실제 생활를 배우고 싶었다고 한다. 그리고 YR씨가 입학한 대학교의 학부는 다른 학부와 틀려서 영어로 수업을 하며, 외국인 유학생이 많다는 부분에 끌렸다고 한다.

“여러나라 사람, 다양한 배경을 가지고 있는 사람들과 교류를 할수있다는게 매력적이었어요. 학부생활은 일본 내에서도 다양한 백그라운드를 가지고 굉장히 여러나라에서 온 친구들과 얘기를 하고 함께 공부 할 수 있는 기회가 있어서 저에게는 많은 자극제가 되었다고 할까요.”

◇ 인간관계 ◇

YR씨가 대학원 시험을 준비 했을 당시에는 학부 안에 대학원이 없었다고 한다.

그래서YR씨가 다니던 학부 연구실이 아닌, 다른 연구실의 대학원으로 진학 해야만 했다고 한다. 때마침, YR씨가 공부 하고 싶었던 연구실을 찾았고, 그 대학원 연구실를 들어 가기 위해서 입시준비를 했다고 한다.

학부 때와 지금 대학원의 차이점과 특히 교우관계와 출신지에 대해서 물어 봤다.

“학부 다닐때는 아무래도 저희 학부에는 한국인들이 많아서...한국인이 조금 더 많았던 것 같아요. 그리고 그 다음에 일본인 친구들이 많았어요.” 지금 다니는 대학원은 일본사람들이 더 많다고 한다. “저의 연구실같은 경우는 전체 15명 정도 되는데 한국인은 2명정도 있어요.” 그리고 학부 때와 지금 대학원의 전체적으로 분위기가 다르다고 한다.“학부 때 다니던 학교는 아무래도 학생수가 많아서 그런지 모르겠는데 활기가 있다고 해야하나요, 국제교류가 활발히 이뤄지는데, 대학원의 학교는 학문 쪽에 더 포커스를 맞추고 있는것 같아요.” 라고 이야기를 들려 주는YR씨는 현재 대학원에 적응을 해서 열심히 하고 있다고 한다. 학부때와 대학원의 큰 차이는 학교가 틀린 것과YR씨가 다니던 학부가 일본 대학교 안에서도 특징을 가지고 있기 때문이라고 생각 되어진다.

그리고 한국인 친구들과 일본인 친구들의 틀린 점에 대해서 물어 봤다.

“조금 틀린 점이라고 한다면, 처음에 친해 질 때의 교류 방법이 다르다고 할까요..한국인 친구들은 직설적으로 얘기를 하는데 일본인 친구들은 똑같은 표현을 해도 간접적으로 표현을 한다고 할까요...” YR씨가 지금까지 여러 나라 친구들과 교류를 하면서 특히 한국인과 일본인 친구들 사이에서 느낀 점이라고 한다.

◇ 일본 생활에 대해서 ◇

일본에 오기 전에는 깔끔하고 질서를 잘 지킨다는 이미지가 있었다고 한다. 그리고 직접 일본에 온 후에도 변함없이 인프라도 안정이 되어 있고 실제 생활에서도 질서 의식이 강하다는 것을 느끼고 있다고 한다.

일본 생활하면서 힘든 점을 말 한다면, “아무래도 외국인으로서 재일 자격을 가지고 생활하다 보니깐 집을 구할때나 그럴때 보증을 서주는 사람, 보증인 제도 라는게 힘들었어요.” 현재YR씨는 혼자서 자취를 하고 있는데, 학교에서 보증인 제도가 있었기 때문에 많이 힘들지는 않았다고 한다. 그리고 대학원의 지인 소개로 한국어를 가르치고 있다. “대학원생 일본인이에요.일주일에 한번 정도 하고 시간은 한시간에서 두시간정도요.” 한국어가 모국어라서 지금까지 잘 못 느꼈지만 한국어를 가르치면서 한국어가‘이렇게 어렵구나’ 라는 것을 새삼스럽게 느끼게 되었으며 또한 한국문화에 대해서 역으로 다시 관심을 가지게 되었다고 한다.

◇ 장래에 대해서 ◇

앞으로 장래에는 한국에서 살지, 일본에서 살지 고민 중인YR씨는, 일본에서 공부를 더 하고 싶기 때문에 가까운 미래에는 일본에서 생활 하지만, 장기적으로 볼때는 다시 한국에 돌아가서 일하고 싶다는 생각도 든다고 한다.

YR씨의 목표는 지금 하고 있는 문화미디어를 심층적으로 연구를 하고 싶다고 한다. 그렇기 때문에 박사과정에도 진학 할 예정이다.

“지금 현재 생각하고 있는 것은 텔레비전 문화, 특히 한국과 일본, 가능하다면 다른 유럽이나 미국쪽으로 영상같은 것을 비교하는 것을 해보고 싶습니다.”

또한 YR씨는 장소가 한국이든 일본이든 기회만 주어진다면 대학교 아니면 연구기관에서 일을 하고 싶다고 한다.

◇ 일본 사회에 바라는 점 ◇

일본에서 생활 하면서 굉장히 외국인들이 살기 쉬운 환경이 조성 되어 있다고 한다. 하지만, 개선 되면 좋겠다는 점이 있다고 한다. “행정적

인 면에서 예를 들자면 외국인 등록증을 만들때 절차 관계나 방금 전에 말한 듯이 집을 구할 때의 절차가 복잡하거나 외국인이라서 집을 구하기 힘들다거나 그런 점을 느낀 적이 있어요. 그런 점에 있어서 조금 더 외국인들도 쉽게 간단한 절차로 바꼈으면 하는 바램은 있네요."

그리고YR씨는 일본에 살고 있는 외국인들이 조금 더 교류를 할 수 있는 커뮤니티나 장이 많아졌으면 좋겠다고 한다. "민간.학교라던가, 누구나 자유롭게 참여를 해서 자기 나라의 문화를 소개를 한다던가, 예를 들자면 음식을 소개하거나 자기나라 전통 문화를 소개한다는 이벤트를 만들어서 자유롭게 참여 할 수 있는 장이 활성화 됐으면 좋겠다고 생각합니다." 라고 이야기를 하면서YR씨도 이러한 커뮤니티에 적극적으로 참여를 해야겠다고 강한 의지를 보이면서 인터뷰를 마쳤다.

＜インタビュー　７９＞

YR さん（20 代・女性）「国際交流をもっと広めていきたい」

2011 年 10 月 8 日、ソウル出身
大学院生、日本滞在 5 年目
インタビューア：呉 世蓮

◇　略歴　◇

YR さんは日本に来て 5 年目であり、現在、大学院 1 年生に在学中だ。学部は国際関係学、文化学について勉強をし、卒業論文のテーマは、広告に関する日韓比較研究だった。「韓国と日本の広告が似ている点が多いと思いましたが、調査をしながら、相違点がたくさんあることに気付きました。それをきっかけに、大学院に進み、より具体的に勉強をしてみたいと思いました」。現在は、日本社会におけるメディア、コミュニケーションについての勉強をしている。

◇　日本への留学を来るようになった動機　◇

普段から日本に興味関心のあった YR さんは、高校 2 年生の時、日本の大学への進学をしようと決心した。「高校の時、修学旅行で日本に来たんです。修学旅行に京都、大阪へ行きました。その時、初めて日本に来ていたので、もう一度と見たい、知りたいと思うようになりました。このように関心を持っている時、友人たちに W 大学にこういう学部があると紹介をされて…」。日本の大学に通いながら、日本語も勉強出来て、日本の実際の生活を学びたいと思ったという。そして、YR さんが入学した大学の学部は他学部と違って、英語で授業を行い、外国人留学生が多いというところに魅かれたのである。

「いろいろな国の人々、多様なバックグラウンドを持っている人々との交流が出来るのが魅力的でした。大学生活は、日本国内でも様々なバックグラウンドを持っていて、あと色々な国から来た仲間と話をして、一緒に勉強のできる機会は、私にとって大きな刺激になると思っていました」。

◇　人間関係　◇

YR さんが大学院の試験を準備した際には、学部内に大学院がなかったという。

そこで YR さんが通っていた学部の研究室ではなく、他の研究室の大学院に進学しなければならなかったという。YR さんは、勉強したかった研究室を見付けて、その大学院の研究室に入るために、入試の準備を進めたという。

学部の時と今の大学院の違いや、特に交友関係や出身地について聞いてみた。

「私たちの学部には、韓国人が多くて韓国人の友達が少し多かったです。そしてその次に日本人の友達が多かったんです」。今、通っている大学院は、日本人の方が多いという。「私の研究室のような場合は、全体的に 15 人ぐらいいますが、韓国人は 2 名くらいです」。そして学部の時と今の大学院の全体的に雰囲気が違うという。「学部の時に通っていた学校はどうしても人数が多かったためか、分からないのですが、活気があるいいますか…、国際交流が活発に行われていましたが、大学院の学校は、学問の方が中心になっていると思います」。と話を聞かせてくれる YR さんは現在、大学院の生活に慣れてきて、学業に専念しているという。学部と大学院の大きな違いは、学校が違うことと、YR さんが通っていた学部は、日本の大学の中でも特徴のある大学だったからとも考えられる。

そして、韓国人の友人たちと日本人の友人たちの違う点について聞いてみた。

「ちょっと違う点といえば、最初に、仲良くなりかけた頃の付き合い方が違うというか…、韓国人の友達は、ストレートに話をするのですが、日本人の友達は、同じ表現をしても間接的に表現を

するというか…」。YR さんがこれまでの様々な国の友達と交流をしながら、特に韓国人と日本人の友達の間で感じた点だという。

◇　日本での生活について　◇

日本に来る前の日本のイメージは、きちんとした秩序をよく守るというイメージがあったという。そして、いざ、来日した後も、変わることなく、インフラも安定しており、実際の生活でも、秩序意識が強いことを感じているという。

日本の生活の中で大変な点を言うなら、「どうしても外国人として、在日の資格を持って生活していますので、部屋探しや、そのようなときの保証人制度と言うのが大変でした」。現在の YR さんは一人で自炊をしているが、学校で保証人制度があったので、あまり苦労はしなかったという。そして、大学院の知人の紹介で韓国語を教えている。「学生は、大学院生の日本人です。一週間に一回程度、時間は一時間から二時間くらいです」。韓国語が母語なので、今まであまり感じなかったが、韓国語を教えながら、韓国語が、「このように難しいんだ」ということを改めて感じるようになった。また韓国の文化についても、逆に興味関心を持つようになったという。

◇　将来について　◇

これからの将来は、韓国に住むか、日本に住むかについて悩んでいる YR さんは、日本で勉強をしたいので、近い将来には日本で生活をするが、長期的にみる時は、再び韓国に戻って仕事をしたいという。

YR さんの目標は、今勉強している文化、メディアをより、掘り下げて研究をしたいという。そのため、博士課程にも進学する予定だ。

「今現在、考えているのはテレビの文化、特に韓国と日本、可能であれば他のヨーロッパやアメリカの方の、映像のようなことを比較してみたいと思います」。

また、YR さんは場所が、韓国でも、日本でも機会さえ与えられるならば、大学あるいは研究機関で仕事をしたいという。

◇　日本社会に望む点　◇

日本で生活しながらとても外国人が暮らしやすい環境が造成されているという。しかし、改善されれば良いという点があるという。「行政的な面で例を挙げると、外国人登録証を作るときの手順の関係や、先ほど述べたように、家を探す際の手続きが複雑な場合や、外国人なので、部屋を探すのが難しかったり、そのような点が不便だと感じた事がある。その点において、もう少し外国人にも簡単な手続きに変わって欲しいです」。

そして、YR さんは日本に住んでいる外国人たちがより、交流をすることができるコミュニティやそういった場が多くなって欲しいという。「民間の学校とか、誰でも自由に参加し、自分の国の文化を紹介するとか、例えば、食べ物を紹介したり、自国の伝統文化を紹介するというイベントをつくり、自由に参加することができる場が活性化されて欲しいと思います」。と話をしながら、YR さんもこのようなコミュニティに、自分自身も積極的に参加しなければならないとの強い意志をみせながらインタビューを終えた。

＜인터뷰　８０＞
WJ씨 (20대・여성)「앞으로 더욱 더 일본 생활에 충실 할 것이다」

2011年10月13日, 대구출신
대학생, 일본체재 1년6개월째
인터뷰어 : 오 세연

◇　약력　◇

WJ씨는 일본에 온지 1년반 정도 되었으며, 현재 신주쿠에 있는 대학교 2학년생이다.

현재는 경제와 미디어에 관심이 많아서 이 두 분야를 중심으로 수업을 듣고 있으며, 3학년에 세미나를 정해야 하는데 아마도 경제학을 전공하신 교수님 세미나로 들어 갈 것 같다고 한다.

◇　일본에 온 계기　◇

처음 부터 일본에 올려고 한 것은 아니었다. 외국어 고등학교를 들어 가게 되면서 일본어를 전공하게 되었다. 그러면서 차츰 일본에 대해서 관심을 가지게 되었다.

“고등학교 선배들 중에서 일본 대학교에 들어가서 열심히 공부 하는 모습을 보고 저도 좀 더 넓은 곳에서 공부를 하고 싶다는 생각으로 일본 유학을 결심했어요.”

일본 안에도 여러 대학교가 있지만, 왜 신주쿠에 있는 이 대학교에 지원을 했는지 질문을 했다. WJ씨는 처음 부터 전공이 정해 져 있지

않는 이 학부에서 많은 공부를 한 후에 정말 자기 자신에게 맞는 분야에 대해서 공부를 하고 싶었다고 한다. 현재 WJ씨는 경제학의 재미를 알게 되었고 이 학부에 들어 오지 않았다면 깨닫지 못 했을 거라고 한다.

◇ 일본 생활 ◇

일본에 오기 전, 일본이라는 나라는 매우 친절 할 것 같다는 이미지가 있었다고 한다. 왜냐하면WJ씨의 고등학교에 원어민 일본어 선생님이 계셨는데 너무나도 친절하고 상냥했다고 한다. 하지만 막상 일본에 온 후에 직접 느낀 이미지는 조금 달랐다고 한다. "오고 나서 외국인이니깐 조금 불편하다고 해야하나...그래도 좀. 이방인 같은 느낌..그런거 있는거 같아요. 아무리 친절하지만.." 일본 사람들뿐만 아니라 일본 사회의 전체적인 분위기가 그렇게 느껴졌다고 한다. "안 그럴때도 있는데, 아직 일본어가 서툴기 때문에 일본어가 막히면,일본어 못하냐 라는 식으로 볼 때도 있는 것같아요." 처음 일본에 와서 통장을 개설 하러 은행에 갔을 때 느꼈다고 한다. 솔직히 정확한 기억은 없다고 한다. 직접적으로 무시를 당한 거는 아니지만 말로 표현 할 수 없을 만큼의 불편함을 느꼈다고 한다. 또한 현재는 엔고 현상으로 인해 유학생이 생활하기에는 많이 힘들다고 한다.

현재 대학교 생활에 대해서 물어 봤다.

"생각했던 것 만큼은 아닌 것 같아요. 오기 전에는 공부를 더 많이 할 것 같았는데 친구들하고 많이 보내고 친하게 지내는 시간이 더 많은것 같아요."라고 이야기를 하면서 외국인이 많은 WJ씨의 학부 친구들에 대한 질문을 했다.

"공부를 더 할 줄 알았어요. 일본 학생들은 공부를 그렇게 많이 신경 쓰지 않는 것 같았어요. 수업을 잘 안 듣는다는 것 보다...한국인이나 중국인이 저희 학부에 많은데, 유학생들 보다 별로 안하는 것 같아요."

유학생들이 많다는 WJ씨의 학부는 한국인 유학생들도 많다고 한다. WJ씨는 한국인 친구들과 보내는 시간이 많다고 한다. 현재 WJ씨는 같은 학부 친구랑 함께 살고 있다. 원래는 토코로자와에 있는 기숙사에서 살다가 지금 룸메이트랑(같은 학부 친구) 함께 나와서 학교 근처에 있는 집을 빌려서 자취를 한다고 한다.

일본인 친구, 다른 외국인 친구랑 있을 때 보다 역시 한국인 친구랑 지내는 것이 가장 편하다고 한다. 왜냐하면 언어 부분에서 같은 모국어를 사용한다는 것이 가장 큰 이유라고 생각되어진다. 모국어 뿐만 아니라, 대학교 오기 전까지 한국에서 계속 생활 했기 때문에 이러한 공통적인 부분에서는 편한함을 느낀다고 한다.

◇ 자주 가는 곳 신주쿠구 ◇

늘 가는 곳은 신주쿠구에 있는 대학교다고 말하는 WJ씨는, 늘 대학교 근처에서 친구들과 시간을 보낸다고 한다. 학교 근처에서 시간을 보내는 시간이 많이 있지만, 일본인 친구들하고 종종 신오오쿠보에 한국 음식을 먹으러 간다고 한다.

"신오오쿠보는 일본 친구들하고 더 많이 가는 것 같아요. 일본 친구들이 같이 한국 음식 먹고 싶다 해서 일본 친구들이랑 같이 가서 먹은 적 있어요."

한국에 관심이 많은 일본 친구들과 신오오쿠보 이야기를 하면 "저번에 갔다 왔다.", "머 먹어 봤다."라고 자주 듣는다고 한다.

◇ 앞으로의 계획 ◇

지금 현재 대학교 2학년인 WJ씨는 진로에 대해서 확실하게 정해 놓지는 않았다. 지금의 학부는 학과가 없기때문에 대학원에 진학해서 더 공부를 하고 싶은 마음도 있지만 회사에 취직할 가능성도 있다고 한다. 만약 대학원에 진학을 한다면 경제학이나 마케팅에 대한 공부를 하고 싶다고 한다. 구체적인 연구 내용은 앞으로 공부를 하면서 결정 해 나가고 싶다고 한다.

"잘 모르겠어요. 공부도 하고 싶고 취직도 하고싶고..."라고 말하는 WJ씨는 현재 일본 생활, 특히 대학교 생활에 충실하게 보내면서 무엇을 더 공부를 하고 싶은지 계획을 세워 갈 예정이다.

◇ 일본사회에 바라는 점 ◇

일본사회는 규칙을 잘 지키고 국민들에게 있어서 질서 의식이 몸에 베어 있는 것은 배울 점이라고 한다. 하지만 그거에 대해서 "조금 더 융통성이 있더라면..."이라고 말하는WJ씨. "규칙을 중요시하는 것 같아요. 룰도 잘 지키고 어떻게 보면 조금 융통성이 없어 보일수도 있고,그런 것 같아요.이런 점이 고쳐 졌으면 좋겠다고 생각해요."

◇ 내 자신과 앞으로의 일본 유학 생활 ◇

한국 대학교가 아닌, 일본 대학교로 결정 한 것은 정말 잘한 일 같다고 한다.

“부모님은 교대 이런데 가기를 원했는데...가기싫어서 안 갔는데, 전 잘 한것 같아요. 나중에 뭐 할지에 대해서 생각 할 기회가 더 많아졌다 해야하나....”

앞으로 장래에는 일본에서 살지, 한국에서 살지 많이 고민스럽지만, 조금 더 시간을 두고 결정 하고 싶다 한다. 하지만, 지금은 한국이 더 편하다는WJ씨. 가족도 있고, 친구들도 한국에 더 많이 있기 때문이다. 하지만 대학원을 가게 된다면 일본에서 대학원을 다니고 싶다 한다.

WJ씨는 마지막으로, 2년 반 정도 남은 학부 생활에 대한 포부를 들려 줬다.

“학교에 한국인들이 많아서 계속 한국인 친구들하고만 어울리는 친구들도 있는데, 저는 그러고 싶지는 않아요. 많은 나라 사람들하고 친해지고 싶고 특히 일본에서 사니깐 일본 친구들하고 친해지고 싶고....그래서 그럴려고 노력할려구요.”

지금까지의 일본 생활에서 부족 했던 점은, 일본인 친구들과의 교류가 적었다는 것 이다. 이러한 점을 개선하기 위해서 앞으로, 새로운 자세로 일본 유학 생활에 임하고 싶다는 이야기를 하면서 인터뷰를 마쳤다.

＜インタビュー　８０＞

WJ さん（20 代・女性）「これから今よりもっと、日本の生活を充実させたい」

2011 年 10 月 13 日、大邱出身
大学生、日本滞在 1 年 6 カ月目
インタビュアー：呉 世蓮

◇ 略歴 ◇

WJ さんは日本に来て 1 年半くらいになり、現在、新宿にある大学の 2 年生だ。現在は、経済とメディアに興味と関心があって、この二つの分野を中心に授業を受けており、3 年生になると、ゼミを決めなければならないが、おそらく経済学に関わっているゼミに入る予定だという。

◇ 来日したきっかけ ◇

初めから日本に来ようとしたわけではない。外国語高校に入学してから、日本語を専攻するようになった。それとともに徐々に日本に関心を持つようになった。

「高等学校の先輩たちの中で、日本の大学に入って、一生懸命に勉強をしている姿を見て、私も、もう少し広いところで勉強をしたいという気持ちで、日本への留学を決心しました」。

日本には他の大学もあるが、なぜ新宿にあるこの大学に留学をしようと思ったのかについて質問をした。 WJ さんは最初から、専攻が決まっていないこの学部で、多くの勉強をした後に、本当に自分に合った分野について勉強をしたかったという。現在、WJ さんは経済学の面白さを知り、この学部に入ってこない限り、気付かされなかったという。

◇ 日本の生活 ◇

日本に来る前、日本という国は親切で、優しいというイメージがあったという。なぜなら、WJ さんの高校には、ネイティブスピーカーの日本語の先生がおられたが、とても親切で優しかったという。しかし、実際に日本に来た後、感じた印象は少し違ったという。「来てから、外国人だからちょっといろいろ、落ち着かなくて、不便だといいますか...それでもちょっと。異邦人のような感じ...そのような気がします。いくら親切だとはいえ...」。日本の人々だけではなく、日本社会の全体的な雰囲気がそのように感じられるという。「そうではない時もありますが、まだ日本語が上手じゃないですので、日本語が詰まれば、『日本語できないのか』というふうにみられる時もあります」。日本に来て初めて、口座を開設しに銀行へ行ったときに、感じたという。正直なところ、正確な記憶はないという。直接的に無視をされたわけではないが、言葉で表現できないほどの不便さを感じたという。また、現在は円高により、留学生が生活するにはとても大変だという。

現在の大学生活について聞いてみた。

「思ったほどではないと思います。日本に来る前には、みんな、勉強をもっとするだろうと思いましたが、友達と楽しく過ごす時間の方が、多いと思います」と話をしながら、外国人の留学生が多い WJ さんの学部の友人たちについて質問をした。

「勉強をもっとすると思っていました。日本の学生たちは勉強をそんなに気にしないようです。授業をよく受けないということよりも...韓国人や

中国人の留学生が、私の学部には多いですが、留学生よりも、あまりしないようです」。

留学生が多いという WJ さんの学部は、韓国人留学生も多いという。 WJ さんは韓国人の友達と過ごす時間が多いという。現在、WJ さんは同じ学部の友達と一緒に暮らしている。もともとは所沢にある寮に住み、今のルームメート（同じ学部の友達）と一緒に出てきて、学校の近くにある家を借りて、自炊をしているという。

日本人の友達、他の外国人の友達といるときよりも、韓国人の友達と過ごすのが一番、気が楽だという。なぜなら、言語の部分からみると、同じ母語を使っているからだというのが最大の理由だと考えられる。母語だけでなく、日本の大学に入る前までは、韓国でずっと生活をしていたという共通部分からも落ち着きを感じることができるという。

◇　よく行くところの新宿区　◇

いつも行く所は新宿区にある大学だと言う WJ さんは、いつも大学の近くで友達との時間を過ごしているという。大学の近くで時間を過ごすことが多いが、日本人の友達と頻繁に新大久保にある韓国料理を食べに行くという。

「新大久保は、日本人の友達と一緒によく行くのです。日本人の友達の方から、一緒に韓国料理を食べに行きたいと言いますし、そのため、日本人の友達と一緒に行って、食べたこともあります」。

韓国に興味のある日本人の友達と、新大久保の話をすると「この前に行って来たよ」、「それ、食べたことある」。などよくいわれるそうだ。

◇　今後の予定　◇

現在、大学 2 年生の WJ さんは、進路についてまだ、はっきりと決めていない。今の学部は学科がないので、大学院に進学して、もっと勉強をしたいという気持ちもあるが、会社に就職する可能性もあるという。もし大学院に進学するなら、経済学やマーケティングについて勉強をしたいという。具体的な研究内容は、今後、勉強をしながら決めていきたいという。

「よく分からないです。勉強もしてみたいと思うし、就職もしてみたいし…」と話す WJ さんは、現在の日本での生活、特に大学生活を充実させながら、何についてもっと勉強をしたいのか、計画を立てていく予定だ。

◇　日本社会に望む点　◇

日本社会は、ルールを守って、国民にとって、秩序意識が身に付いているのは、学ぶ点だという。しかし、それについて「もう少し柔軟性があれば…」と言う WJ 氏。「ルールを重要視しているようです。ルールもよく守ってどのようにみるかによって、少し柔軟性がないように見えることもあり、そのようです。このような点が直ったらいいなと思います」。

◇　自分とこれからの日本の留学生活　◇

韓国の大学ではなく、日本の大学に決めたのは、本当によかったという。「両親は私が、教育大学に行って欲しかったのですが…行きたくなかったので、行かなくてよかったです。将来、何をするかについて考える機会が多くなったといいますか…」。

これから将来は日本に住むか、韓国に住むか、いろいろ悩ましいことだが、もう少し時間をかけて決めたいという。しかし、今は韓国の方が楽だという WJ さん。家族もいて、友達も韓国にたくさんいるからである。しかし、大学院に進学するなら、日本で大学院に通いたいという。

あと 2 年半くらい残っている学部生活と、自分自身のこれからの抱負について聞かせてくれた。

「大学に韓国人が多くて、ずっと韓国人の友達とだけ付き合っている友達もいますが、私はそうしたくはありません。様々な国からきた友達とも親しくなりたいと思います。特に日本に住んでいますから、日本人の友達とも仲良くなりたいし…。なので、そのように、なれるように頑張ります」。

これまでの日本の生活で足りなかった点は、日本人の友達との交流が少なかったということだ。このような点を改善するために、今後、新たな姿勢で、日本の留学生活に臨みたいという話をしながらインタビューを終えた。

＜インタビュー　８１＞

R さん（20 代・女性）「外国人留学生へ差別はないものの、寂しさを感じつつ…」

2011 年 10 月 13 日、忠清道出身
大学在学中、日本滞在 2 年 6 カ月目
インタビュー担当：李 坪鉉

◇　アメリカ交換留学　◇

高校の時、自分の進路について悩んでいた。周りで見える韓国の大学生たちの姿をみると高校までは一生懸命に勉強しているが、受験が終わり大学に入ると遊んでばかりの生活を見ると韓国の大学には入りたくないという気持ちになった。その時に海外留学を手助けする会社を経営している親戚と、ちょうどアメリカの留学から帰った親戚の姉さんから、よき相談者として多くの情報を得た。両親とも相談し、本当にしたい勉強をするために、その分野の学問が進んでいる日本に進学することを決めて、準備を始めた。

その最中、親戚のお姉さんから、アメリカに国費交換留学生としていくとホームステイや学費などいろいろと金銭的に負担が軽くなるとの情報をもらった。幼い時から英語も楽しかったこともあり、高校 2 年の時にアメリカに留学することになった。

アメリカ中部の地方都市での留学生活では良い経験を積んだ。語学の勉強のみならず、様々な文化体験もできた。韓国人がほとんどいない小さな都市で、プロテスタント関連の学校で、ホームステイ先もクリスチャン家庭であった。良い環境で上品な言語を習うことができた。

韓国の高校とは違い一クラス 15 名の生徒で、ディスカッションを中心とした参加型学習をしていて、先生とも互いにフィードバックを通して考える力を養うことができた。

幼い頃から良い教育環境を与えようと頑張る親の教育熱心さによって、何度も引越しを重ねた。内気な性格であるRさんは引っ越す度に新しい環境と友だちに慣れるために努力しなければならなかったし、それは、大変で、辛くて、嫌な経験だったという。しかし、このような経験がアメリカや日本への留学を選択する意志を養ってくれるなど、知らないうちに新しい環境への適応力を身につけてくれたようだ。

◇　日本での大学進学　◇

アメリカで高校に通いながら会計学に興味を持つようになる。両親からの仕送りで勉強する立場だったので為替に敏感になり、経済新聞とニュースによく接していたことが会計学に興味を持つきっかけとなった。

日本での大学進学は韓国の高校から決めていたことで、アメリカへの交換留学を通じて英語の勉強もでき、夢にもみていた日本への留学が始まったが、いざ東京に着いて様々なことに戸惑いを感じた。

アメリカでの初めての外国生活は、元々英語も好きだったし、親戚のお姉さんからも現実と向き合って語学勉強に励みなさいとアドバイスをもらったことで、R さん自身も覚悟を決めて生活を始めたので環境に順応するスピードも速かったし、失望感も少なかった。

しかし、長年多くの歴史を共にしてきた日本だから、顔立ちも似ているし、韓国とはさほど違いがないだろうと思いながら、到着した日本は、言語についても準備が足りなかったし、抱いていた日本に対するイメージとの大きなギャップものり越えなければならなかった。特に人に迷惑をかけないように行動することが、逆に R さんには他人に対する冷たさとして感じられた。

電車ではみんなが静かにしていて、学校での友達との交流、友達のあいだでも必要なとき以外にはあまり連絡を取り合わないこと、新学期に友達を作るために自分を表に積極的に出す努力なども、なれるのに難しいことであった。

大学に合格し、入学を待っていた頃、3 月 11 日に起きた東日本大地震の経験は戸惑いを隠しきれなかった。韓国にいる両親もとても心配していたため、一時帰国で安心させる必要があった。大地震は今後の大学生活にも影響を及ぼしかねなかった。入学前のことでもあり、どうにか韓国への編入入学の道はないのか、また他の国にいって留学を続けるべきかいろいろだが、日本での留学意思を固めて両親を説得することができた。

自立したいという意思もあり、また問題となっている放射能の危害は様々な情報を自分なりに分析した結果、今後日本で生活しても体への危害はそれほど深刻ではないと判断したので理性的な対応ができたと話す。

◇　新宿の魅力　◇

新宿は最初日本に来た時に生活し始めたところだ。多くのニューカマーたちにと同じく、知人からの紹介だった。日本語が下手でも母語でコミュニケーションが取れたので意外とすんなり始まった外国生活だった。

新宿はコリアタウンがあり、韓国人コミュニティーがあるという魅力もあるが、東京を代表する

大きな町で、早稲田大学を始め、数多くの大学があるので勉強に励む若者たちが集まる良い場所もいっぱいある。だから、若者にとって、とても魅力のある町である。ショッピングセンターや映画館を始め、ニュースタイルの飲食店が立ち並んで、ところどころ違う魅力を発することから、R さんはとても気に入っている町であると新宿の魅力について語ってくれた。

◇　交友関係　◇

日本で人との付き合いや友だち関係をもつためには、つまり違う方法があることに気がついた。まず、迷惑をかけてはならないこと、用件がある時だけ連絡すること、電話口でつまらないことで長電話をすることよりは会って共有できる話を持って会話をしなければならないということだ。これがわかれば、交友関係の悩みは少なくなる。しかし、時にはどんな話題を切り出せばいいのか、悩む時があるという。

カルチャーショックとして経験したことのなかで、R さん一人が外国人として授業を聞いていることが多く、日本人のクラスメートからは先に近寄ってくれないことだ。R さんが先に寄っていかないと話しかけてくれないことをみて、日本人は外国人との付合いが下手だということを感じた。

◇　今後の計画　◇

日本で大学を終え、日本で外資系企業に就職し、海外勤務を通してより多くの経験を積みたい。いろいろな経験を積んだ後は韓国に帰国し、政府と経済がらみの役立つ仕事をしたい。もしまた韓国が経済危機に陥ったときに、どんな対処をしなければならないのか若いうちにいっぱい経験し、助言と対処法を打ち出せるほどの力を持ちたい。

R さんは韓国政府に失望し、一時海外移住も考えたぐらい韓国社会を嫌っていたが、外国での経験を通して愛国者になったという。外国での生活がいくら良いとしても心の寂しさを満たすことはできなかったので、外国で学んだことを母国で役立てる人として生きたいと語った。

日本についてのイメージは、生活面ではとても住みやすい国だ。何より人の目を意識しなくて済む。親戚の干渉も受けなくて済む。 社会の基盤となる良いインフラをもっている、交通が便利で、物価も安定的に維持されているなど、たくさんの魅力をもっている。

デメリットは、外国人として生きること。差別が目に見えるものではなく、個人的な問題である寂しさがある。今はむしろ韓流ブームのおかげで、学校でも韓国人であるためにたくさんの質問などをしてくるという。

◇　日本社会に対する期待感　◇

日本は変化に鈍く、国際社会の動きにも対応が遅かったが、何がきっかけとなったのかはわからないが最近はいろんなことで変わろうと努力しているように思える。

教育的な面でもオープンになっていると例を挙げた。外国人留学生向けに英語で面接を行う留学生向けの入試方法ができたことと外国人を対象とした様々なプログラムがある。また外国人を対象とした奨学金とや留学プログラム（他の外国ではそうでもない国が多いと付け加えながら）、外国人留学生のためのパーティーなど留学生への配慮が多いことをあげながら、留学生の立場を良く示してくれた。

また、日本社会の姿として、外国人に対する差別が少ないようだという。参政権がないことは当たり前だが、保険加入、銀行口座の開設など、外国人に対する差別が少ないと思う。アメリカでは留学生が銀行口座を開設することができなかったし、留学生がより高い学費を納めなければならなかったと付け加えた。日本はとても保守的に思えるが、日本人と同じように社会システムを利用できるし、保険などでは学生割引などもあり、より配慮されている点を例に挙げた。

アメリカでは生活の上での差別ではなく、制度的な面での差別が一般化されていると言いながら、日本では学生として留学生だから受けるべく制度的な面での差別はないことがすばらしいという。ビザ問題もよく改善されたことも魅力のひとつとして挙げた。

しかし、ひとつ改善してほしいことも付け加えた。韓国の早い処理能力のせいもあるだろうが、すべて仕事の処理において時間がかかりすぎだということ。従って、人件費もよりかかる。時間に対する感覚の違いはあると思うが、少し時間を節約できるだろうとほほ笑んだ。

一方、機械化されていく現代において、日本は人がたくさん関与するようだという。自動化・機械化のメリットとデメリットがあるようだと、人との関係が多くなることで人に対する信頼と孤独

感を解消できる部分ではメリットも多いと話す。

Rさんは異なる文化について経験があるため、その国と比較することで、より日本社会のメリットとデメリットについてよく把握しているように思えた。

＜インタビュー 8 1＞

R씨(20대・여성)「유학생에게 제도적인 차별이 없는 살기좋은 나라 일본, 좋은 인프라를 가진 나라 일본의 장점을 많이 배워고 싶다는 열의에 넘치는 유학생」

2011년10월13일、충청도 출신,대학생、일본 체재2년6개월째

인터뷰 담당：이호현

◇ 고등학교 시절 미국으로 교환유학의 기회 ◇

고등학교 때, 자신의 진로에 대해서 고민하게 된다. 왜냐하면, 주위의 한국대학생들의 모습을 보면, 고등학교 때 까지 그렇게 열심히 공부하다가, 대학합격을 한 순간부터는 노는 모습들을 보면서 한국의 대학을 진학하는 것에 대해 회의를 느끼게 된다. 마침 친척분이 유학원을 경영하고 계셨고, 미국에 유학을 갔다온 친척언니로부터 많은 상담을 받을수 있게 된다. 부모님과도 의논한 끝에, 정말로 하고 싶은 공부, 그리고 그 분야의 학문이 발달되어 있는 나라로 가서 공부하겠다는 마음에, 대학을 일본으로 가겠다고 결심하며, 준비하게 된다.

그러던중, 어려서 부터 영어공부를 좋아했고, 친척언니가 미국으로 국립 교환 학생으로 가면 홈스테이도 할수 있고, 경비부담도 적다는 정보를 주면서, 길잡이 역할을 해주었고, 고등학교 2학년때 미국으로의 유학길에 오른다.

미국중부지방의 작은 도시로의 유학은, 많은 것을 경험하는 기회가 된다. 어학공부 뿐만 아니라 많은 문화체험을 하게 된다. 한국인이 거의 없는 작은 도시로, 크리스챤 학교와 홈스테이를 했던 곳도 크리스챤 가정이여서, 좋은 환경에서 좋은 언어를 배우며 공부할수 있게 된다.

한국의 고등학교와는 달리 학생이 15명 전후의 클래스에서, 많은 토론이 이루어지는 참여학습으로, 선생님과도 상호 피이드백을 통해 생각하는 능력을 기르는데 많은 도움이 되었다고 한다.

어려서 부터 좋은 교육환경을 제공하려는 부모님의 교육열로 인해 이사를 거듭 했었는데, 소극적인 성격으로 늘상 새로운 환경과 친구들에게 적응해야하는 노력들이 힘들고 두렵고, 싫은 경험들이였다고 한다. 하지만, 미국으로의 교환유학과 일본으로의 유학을 선택하는 의지를 길러주는등, 은연중에 새환경에의 적응력을 길러준것 같다.

◇ 일본으로의 대학 진학 ◇

미국에서 고등학교를 다니면서, 회계공부에 대한 열의를 갖게된다. 부모님의 서포트를 받으며 하는 공부였기에, 환율에 민감했고, 경제신문과 뉴스를 자주 보게 된 것들이, 계기가 되었다고 한다.

일본으로의 대학진학의 꿈은 고등학교때 이미 정해두었던 것으로, 그동안 미국으로의 교환유학으로 어학공부가 가능했고, 꿈꾸던 일본유학길이였지만, 막상 도착한 동경은 많은 부분에 있어서 당황함을 안겨준다.

미국으로의 첫 외국길은, 원래 영어공부도 좋아했고, 친척언니로 부터 많은 환상을 품지말고, 현실을 직시하면서, 어학공부에 열중하라는 충고를 받았기에, 많은 마음의 각오를 하고 떠났던 길이였기에 적응하기가 쉬웠고, 실망하는 부분도 적었다고 한다.

하지만, 생김새도 비슷하고, 많은 역사를 함께 하고 왔기에 한국이랑 별반 다를것이 없다고 생각하고 도착한 일본은, 언어에 대한 준비도 많이 부족했으며, 품었던 이미지와 많이 다른 차이 또한 격어야 했다. 특히 남에게 피해를 주지 않으려 하면서 배려하는 행동들이, 오히려 본인에게는 인간에 대한 차가움으로 다가왔다고 한다.

전철에서의 조용한 문화, 학교에서도 친구사귐이나, 친구들과도 필요한 일 이외에는 연락하지 않는것, 학기초에 친구를 사귀기위해 자신을 표출하는 노력등도 적응하기에 힘든 점들이였다고 한다.

대학합격을 해둔 상태에서 대학 진학을 앞두고, 3월 11일 경험하게 되는 지진은 당혹함을 감추기 힘들었고, 한국의 부모님 또한 많은 걱정을 하셔서, 잠시 귀국을 해서 안정시켜 드려야만 했다. 모처럼 합격한 대학이지만, 어떻게 한국으로의 편입 방법이 없는지, 아니면 다시 다른 나라로의 유학을 해야할지 고민했지만, 일

본으로의 유학을 계속하고 싶다는 본인의 의지로 부모님을 설득할수 있었다고 한다.

혼자서 자립해야 겠다는 의지와, 앞으로 일본에서 생활하는 것이 자신의 몸에 피해가 가고, 심각하다면 고려해 보아야 할 문제이지만, 방사능에 대해 여러정보를 분석해 본 결과, 그 정도까지는 아닐거라는 지식을 얻게되고, 이성적인 판단과 대처가 가능했다고 한다.

◇ 신쥬쿠의 매력 ◇

신쥬쿠는 처음 일본에 와서 생활을 시작한 곳이다. 대부분의 뉴커머 들이 보이는 양상과 같이, 아는 분을 통한 소개였으며, 일본어가 서툴때였기에, 언어에서 힘든 점 또한 많이 없어서, 편안하게 시작된 외국생활이였다.

신쥬쿠구는 코리아 타운이라는 한국인 커뮤니티가 있다는 매력도 있지만, 동경을 대표하는 대도시이며, 와세다대학을 포함한 학교가 많아서 공부를 하는 젊은이가 모일수 있는 좋은 환경의 장소도 많이 있다. 따라서 젊은이에게 있어서 아주 매력적인 곳이라고 한다. 많은 쇼핑할 곳과 영화관을 비롯해서, 새로운 스타일의 음식점등이 공존해 있는 장소라는 점, 장소마다 다른 매력을 가진 점 등에서 R씨가 아주 좋아하는 곳이라며 신쥬쿠에 대한 이미지를 덧붙였다.

◇ 친우관계 ◇

일본에서의 인간관계, 친구관계를 갖는데에 있어서는, 즉, 다른방식이 있다는 것을 터득하게 되었다. 먼저 피해를 주면 안되는것, 용건이 있을 때만 연락 하는것, 전화상으로 사소한 일이나 많은 대화를 하기보다, 만나서 공유하는 화제 거리를 가지고 대화를 진행해야 하는 것 등을 안다면 친구관계에서 어려움이 적다고 한다. 하지만, 가끔 어떤 화제를 꺼내야 할지 고민할 때가 많다고 한다.

문화적 쇼크 중의 하나로 경험한 것중에, 혼자 외국인으로서 받는 수업이 많이 있는데, 친구들이 처음에 서로 쉽게 다가가지 못하는 것과, R씨가 먼저 다가가지 않으면 말을 잘 걸어주지 않는 점 등에서 일본친구들은 외국인과의 사귐에 서툴다는 것을 많이 느꼈다.

◇ 앞으로의 계획 ◇

일본에서 대학을 마치고나서, 일본의 외국기업에 취직을 한 후, 외국지사를 지원해서 더 많은 경험을 쌓고 싶다고 한다. 많은 경험들을 쌓은 후에 한국으로 돌아가서 한국정부와 경제에 도움이 되는 일을 하고 싶다고 한다. 즉, 나라의 경제위기에 어떤 대처를 해야 할지를 젊었을 때 많이 경험해 두고, 조언과 대처를 할 수 있는 실력을 기르고 싶다고 한다.

R씨는 한국정부에 대한 비난과 실망이 많아서, 한때 이민을 결심할 정도로 한국사회를 싫어 했지만, 외국에서의 삶을 경험하면서, 더 애국자가 되었다고 한다. 외국에서의 삶은 아무리 좋아도 마음의 외로움을 채우기에는 공허함이 많았기에, 외국에서 많은 것을 배워서 모국으로 돌아가서 도움이 되는 사람으로서 살고 싶다고 한다.

일본의 이미지는, 생활면에서 너무 살기 좋은 나라이다. 무엇보다 남의 눈을 의식하지 않아도 되는 점이 편하다고 한다. 친척들의 간섭 또한 받지 않아도 되는 점.

사회기반이 되는 좋은 인프라를 가지고 있다는 점. 교통도 너무 편하고, 물가도 어는 정도 안정되어 항상 유지되고 있는점등이 많은 매력이라고 한다.

단점을 들자면, 외국인으로서 사는점이다. 차별이 눈에 띄는 것이 아니라, 개인적인 문제인 외로움등이 있다. 오히려 지금은 학교에서도 한류붐이라서 한국인이라면 많은 관심과 질문들을 준다고 한다.

◇ 일본사회에 대한 기대감 ◇

일본은 변화를 잘 안하고, 국제사회의 움직임에 느렸는데, 무엇이 계기가 된것인지는 모르겠지만, 최근 많은 변화를 하려는 노력을 하는것 같다.

교육적인 면에 있어서도 많이 오픈된것 같다며, 예를 들어준다. 외국인 유학생을 위해 영어만으로 면접보는 등 외국인 유학전형이 생기는 점과, 외국인을 대상으로 한 프로그램이 많은것 같다고 한다. 외국인을 대상으로 한 장학금과 유학프로그램(다른 외국에서는 안그런 나라도 많다고 덧붙이면서), 외국인 학생을 위한 파티 라던지, 런치를 같이하는 모임등 사소한 것이 많다며, 대학가의 유학생에 대한 배려가 많은 점들을 예로 들면서 유학생의 입장을 잘 보여준다.

또 일본 사회의 모습으로는, 외국인에 대한

차별이 적은것 같다고 한다. 참정권이 없는 것은 당연하지만, 보험이라던지, 은행계좌 개설등, 외국인에 대한 차별이 적은것 같다. 미국에서는 유학생이 은행계좌를 개설할수 없었고, 유학생이 더 비싼 학비를 내야 했다고 덧붙인다. 굉장히 보수적인 것 같으면서도 일본인과 똑같이 할수 있는 점이나, 보험등에서도 학생할인등의 배려도 있는 점 등을 예로 들었다.

미국은 생활적인 차별이 아니라, 제도적인 차별이 일반화 되어있다고 하면서, 일본에서는 학생으로서 유학생이기에 받아야 하는 제도적인 면의 차별은 없다는 점이 좋다고 한다. 비자 문제도 많이 좋아졌다는 점등을 매력으로 들고 있다.

한가지 개선되었으면 하는점을 덧붙였다. 한국의 빠른 처리능력때문도 있겠지만, 모든 일처리에 있어서 시간이 많이 드는점, 따라서 인건비도 많이 드는 것 같다며, 시간 감각이 많이 다르겠지만, 조금은 시간절약을 할수 있을것 같다며 웃는다.

한편, 기계화 되어가는 현대에 있어서, 일본은 사람이 많이 관여를 하는 것 같다. 자동화/기계화의 장단점이 있는 것 같다며, 사람과의 관계가 많이 유지 될 수 있다는 점에서 사람에 대한 신뢰와 외로움을 덜수 있는 부분에서 좋은 장점도 많은 것 같다고 한다. R씨는 다른문화의 경험이 있었기에, 비교를 통해 더욱 일본사회의 장단점을 잘 파악하는 듯하다.

＜インタビュー　８２＞

BS さん(40 代・女性)「YICS の先生として、2 世代の子どもたちの教育にビジョンを抱えながら」

2011 年 10 月 14 日、大邱広域市出身
インターナショナル・スクールの先生
日本滞在暦 11 年目
インタビュー担当：李 坪鉉

◇　日本に来るきっかけ　◇

韓国の大邱市に生まれ、大学を卒業してからアメリカに留学する。アメリカで大学を卒業した後、1 年半くらい看護師として現地で働いていたが、IMF 金融危機による外国人に対するビザ更新が難しくなり、韓国への帰国を余儀なくされた。

帰国後しばらくしてから再度日本留学の道を選んで来日することとなった。日本では大半の留学生の道のりと同じく、研究生課程、修士課程、博士課程を修了した。学業の間に度重なる出産により学校を休むことで博士論文は途中で中断せざるを得なかったことが心残りとなったが、4 人の子どもを授かり、現在は育児とインターナショナル・スクールの先生として仕事も両立させている。

韓国の大学では化学を専攻したが、アメリカに留学してからは看護学に専攻を変えた。専攻を変えたきっかけは、クリスチャンとして他人のために働き、またその人たちにキリストの福音を伝えたいからであった。しかし、化学はあくまでも自己満足に止まる学問であったため、人と接する機会が多い看護学を選択するようになる。結果的に信仰が専攻を変えるきっかけになったと言える。

再度の留学として日本を選択した理由は、アメリカに留学していた頃に日本食に惹かれてよく日本食レストランに行ったことと日本語にも元々興味もあり好きだった。何より日本留学を決めたのは、アメリカで看護学を学ぶ中で、老人看護学について感心が高まり、この分野で進んでいた日本で博士課程を勉強したいという夢を抱いていた。これらのことが重なり日本留学に至り、日本で人生を歩むこととなった。

◇　異文化での適応力が試金石になった日本での生活　◇

日本語も好きで、人との付き合いも好きだった性格のおかげで、日本での生活に慣れることに関して一度も苦しいと感じたことがなかったという。

ただ、アメリカと日本での生活は、少し違いがあるという程度だ。アメリカでは両親からの仕送りがあったが、日本での学業は金銭的な自立が必要だったため、アルバイトをする必要があった。奨学金ももらっていたが、自らしなければならない課題が多かった。それぞれ違う目的を持って、その国に行くので、ある意味、適応する方法が異なるので、一概に日本とアメリカでの生活について比較することは難しい。

あえて言うのであれば、日本での生活は、既にアメリカで異文化と言語習得時のストレスを経験したので、そのような面に関しては免疫ができていたため、それほど厳しくはなかったという。しかし、人との付き合いの面においては、同じアジア文化圏である日本にもかかわらず、アメリカより少し難しかった。

アメリカは外部の人を心で受け入れてくれるところだというならば、日本は表面的に受け入れてくれるところだと感じたようだ。また、アメリカは自分の才能や考え方をもっと表出して、磨いていけるところだとすれば、日本は自分を抑えて、他人に配慮する必要があるため、自らを我慢させて委縮させるところではないかと感じる時が多いという。日本は経済的な先進国ではあるものの、思想面の先進国ではないようだと言いながらほほ笑む。でも、これらのことが不便であるかと言えば、そうでもない。なぜならば、違う国の違う文化を持つ人々であることを認めてしまえば、適応できるものであって、不便さとは違うことだという。

母国以外の他の国を経験することで得られた適応力が、このような考え方を形成したのではないかと思う。そして、外向的であって、積極的な BS さんの性格が多いに役立ったと思える。

◇　東日本大震災以後の人たちの行動パターンから学んだこと　◇

3 月 11 日に学校の授業中に起きた地震は、まず学生たちを守る立場であったので責任感に押され怖かったと振り返る。特に韓国人学校に通っている子どもと連絡がつかず、また主人も外出先から連絡が取れなく帰宅できてなかったのでとても心配だった。以前からここ日本で子どもを育てて生きることを決めていて、苦難があったとしても日本にとどまることに離れること。米と水不足による混乱は他の人と同じくあったが、キリスト教会という共同体によって心のケアや互いを助け合うことで支えになった。

逆に、今回の大震災を通して回りの人たちの行動パターンが見えたことでいろいろと考えさせるきっかけにもなった。直ちに帰国を決心した人たちの行動をみて、父母として逆境を乗り越えていく方法を教えるにあたって判断力の大切さを改めて感じることとなった。外国人として日本で生活しているのに日本のために何もせずに逆境がある度に日本を離れていくのであれば、どこに行っても住めるところはないのではないかと語った。

そして、もう一つのケースとして、最初は耐えながらも、結局は離れていかなければならない人たちは、なぜ日本を離れて行かざるをえないのかについて考えてみたが、それは多分、恐れが原因だという結論に至った。勿論、経済的な問題もあると思うが、中年になって韓国に行っても新しい職に就くことは容易い事ではない。会社を経営する人たちもアイテムにも因るが、危機とチャンスの分かれ道があると語った。

キリスト教会で放射線の問題について物理学の先生による講演が行われ、相談もしてみたが、それほど大きな影響はないと聞いたので日本に滞在することに恐れる理由はないと思った。それにもかかわらず、日本を離れていく人たちは、日本に残る理由と名目がなかったので帰国したのかもしれないと語った。

放射能問題に対する恐れは、BS さんの家庭でも同じであった。元々メディアから正確な情報が与えられているとは考えていなかった。メディアというものは瞬間的かつインパクトある性質から、極端な内容が先行するため、視聴者はより不安になるという。情報が多すぎても良くないと考え、あえてニュースを見ないようにして、代わりに教会で情報を得ようとしたと当時の行動を振り返った。

「幼い子どもがいるので心配してなかったというのは嘘です。地震の時はパニックにもなったが、でも、引き続き持続されるものではないので、恐れを振り切ることができた」と，化学を専攻した人として確かな根拠に基づいて判断しようと努力したことがうかがえた。

親としてまた先生として逆境を前にして、逃げることだけをみせるのであれば、何も教育をするという意味がないのではないかと反問しながら、今回の対処行動は確かな情報と知識、そして行動を通して生き方を教える機会として、子どもたちにとっても良い教育のチャンスであったという。もちろん、正しい知識をもって対話を通して、心の安定をとるという方法もあるだろうが、小さい幼児たちは親の安定的な心的状態に影響を受けて無難に過ごせたと自らの経験を語ってくれた。

◇　新宿に住みながら感じる魅力　◇

来日してから生活の場となったのは新宿だけなので、どこかと比較をして長所と短所を語る立場ではないが、「住宅街があって、一ブロック通るとダウンタウンであり、歓楽街もある。こんなに多様なものが全部集まっているところは珍しいのではないかと思う」と語りながら、住む場所としてはとても良いところではないかと付け加えた。教育都市ではないが、一ブロックを挟んで、住宅街

と繁華街が入り混じっているところであって、それなりの魅力をもっているという。

様々な文化が共存していることも容易なことではないのに、その環境のなかで自然に適応するのも簡単なものではないかもしれないが、「住んでいるうちにコリアタウンもでき、住んでいる内になれたことであって、こうしよう、あーしようと思って、慣れたことではない」という表現からもよく表れている。

外国人として 10 年前に初めて新宿に来たときには、新宿は犯罪の街のように思えたが、年を重ねながら街も綺麗になり、歓楽街と住宅街の境がきっちりと区分されてきた。住宅街、百貨店、韓国飲食店、子どもが遊べる公園など子どもを育てている親として必要不可欠な要素が満たされている。また、近所に建設中の家庭センターが完成されれば、より良い環境になるのではないかと期待を込めていた。

◇　人間関係を結ぶ中で　◇

今の年齢になってみると，自身も深い交友関係より、 表面的な関係だけに陥りやすいという。あえて、新たに来日する外国の方にアドバイスするなら、日本の方は、表現に‘本音と建前’があることを良く理解できるのであれば、難なく日本生活に慣れるのではないかと話した。

それこそ日本で生活してみたら、他人への配慮から用いた善意の嘘であったかも知れないと思えるようになったという。BS さんの寛容な生活を見せる一面だが、周りの人からノーマルな性格ではないとよく言われるようで、自分の解釈を標準的な価値だとは認識しないでと笑っていた。友達を作るときに何より自分から真意を持って相手と接することができるのであれば、多様な人のなかでも良い友だちを創ることができるという。人とは真心をもって接することと判断力を養うように子どもたちと学生たちにも教えている。

もう一つ、日本人と友達として付き合うためには、とても長い時間がかかることを忘れてはならない。日本人は用心深く、相手を信じるまで長くかかるし、たくさんテストするが、一度真心の友だちになれば、その関係は長く続く。これは日本文化がもたらした慎重な人生の歩みから見られる行動パターンのように見えると語ってくれた。

◇　日本の未来に期待しながら　◇

現在の勤め先である学校が開校 6 年目に差し掛かった。先生として感じたことだが、「韓国人として日本社会を生きる子どもたちは、韓国人でも日本人でもない」ということだ。日本語を完璧にこなすわけでもなく、韓国語もまた完璧ではない。彼ら特有のもう一つの文化を持っているように見える。彼らをどのように教育していくべきか、真っ先に考える課題である。外国人として韓国人でも日本人でもない子どもたちが、ここ日本で彼らならではの文化と考え方を持って生きていかなければならないので、どのように生きるべきかを、どう教えるか？

今の学校の生徒たちは、三カ国語（英語、韓国語、日本語）を習っているのでアイデンティティ・クライシス（identity crisis）問題を抱えている。これは国の問題でもなく、個人が突破しなければならない課題でもある。子どもたちがどのようにすれば自分なりの世界観と文化を持って生きていけるか、意識高く、自分の考えをしっかりともつ子として育っていくことを願う。

ただ、このような環境で生まれ育つという漠然さではなく、自分だけが持てる長所と短所をより磨き、問題を自ら解決していけることを願うと教師として、母親としての見解を話してくれた。

BS さんのような留学派 1 世代の人生と彼らの子どもである 2 世代は、在日 2 世とはまた異なる意識と環境パターンを見せている。2 世たちの未来、子どもたちの世界、言語問題も絡んで家では韓国語を多く使っているという。また兄弟同士でお互いに学ぶことも多いという。子どもたちとの会話時間が不足していたこと、今まであまり意識せずに見逃していた点などを反省しながら、韓国人としての誇りを自覚させるために努力しつつ、それは、言語（韓国語）が大いに役立つと語った。

子どもの教育について明確な方向性を持っている BS さん。なので無駄な迷いや葛藤は少ないように見える。そして、信仰深いクリスチャンとして教会のビジョンに自分のビジョンと教育の方向性を重ねたことで、より安定しているように見える。

残りの人生は、もう葛藤する時間ではなく、今まで学んできた知識と経験をもとに、実力を積んでいくことが BS さん本人の未来になるだろうとナラティブを終えた。

<인터뷰 8 2>

BS씨 (40대・여성)「인터내셔널 크리스챤 스쿨 선생님으로서 2세대들의 교육에 비젼을 품고」

2011년10월14일、대구광역시 출신
인터내셔널 스쿨 선생님、일본체재11년째
인터뷰 담당 : 이호현

◇ 일본으로의 유학길로 들어서는 계기들 ◇

한국 대구에서 태어나서 대학을 졸업하고, 미국으로 유학을 떠난다. 대학졸업 후, 일년 반 기간동안 간호사로 직작생활을 하지만, IMF로 인한 경제위기는 외국인에 대한 비자 문제가 어려워지고, 결국 더 이상의 비자 허가를 받지 못하면서, 한국으로 귀국을 하게 된다.

한국으로 돌아와서 또 다시 염원하던 일본으로의 유학길에 오른다. 일본으로의 다른 유학생들 처럼 연구생 과정을 거치고, 석사과정, 박사과정을 수료한다. 그동안 몇차례의 출산으로 학교를 쉬게 되면서 박사논문은 도중에 중단된 상태라고 하는 점이 조금 아쉽게 느껴진다. 하지만 4명의 자녀를 육아 중이며, 현재 3년째 인터내셔널 크리스챤 스쿨에서 교편을 잡고 있다.

한국의 대학에서는 화학을 전공했는데, 미국으로의 유학에서 간호학으로 전공을 바꾸게 된다. 그 계기는 크리스챤으로서 다른사람을 위해 일하며, 또한 사람들에게 복음을 전하는 일도 하고 싶은데, 화학은 어디까지나 자기 만족에 그치는 학문이였기에, 사람과 많이 접할수 있는 간호학을 선택하게 되었다. 결국 신앙이 전공을 바꾸는데 큰 영향을 미친것 같다.

일본에 오고 싶다는 염원은, 첫째가 미국 유학 생활 중 일본음식의 매력에 끌려, 일식 레스토랑에 자주 들렀던 것이 계기다. 둘째로는 원래 일본어에 대해 관심도 많고 좋아했다고 한다. 무엇보다, 미국에서 간호학을 공부하면서, 노인간호학에 대한 관심이 커졌고, 그 분야가 발달되어 있는 일본에서 박사과정은 공부하고 싶다는 꿈을 가지게 되었다고 한다. 이러한 여러 관심들이 다시금 일본으로의 유학을 결정 짓는데 많은 영향을 주며 일본으로의 인생길을 인도한 것 같다.

◇ 타문화에의 적응력이 바탕이 된 일본에서의 생활 ◇

일본어도 좋아했고, 사람들과의 대화를 좋아했던 성격때문에, 일본생활에 적응하면서 힘들다고 느낀적은 한번도 없었다고 한다. 단, 미국과 일본에서의 생활이 좀 다를 뿐이였다고 한다. 미국은 부모님의 지원이 있었지만, 일본에서의 학업은 금전적인 면의 자립이 필요했기에, 아르바이트를 해야만 했다. 물론 장학금도 받았지만, 스스로 해결해야 할 과제들이 많았던 것 같다. 각각의 다른 목적을 가지고 그 나라를 갔기에, 제각기 적응하는 점에서 다른 과제를 안고 있었기에 비교하기가 어렵다고 한다. 굳이 표현하자면, 일본에서의 생활은 미국에서 이미, 새로운 문화와 언어를 습득하는 데 있어서의 스트레스를 경험했기에, 일본은 그런 새로움에 대한 면역이 생겼기에 덜 힘들수도 있었던 것 같다고 한다. 한편, 사람에 대한 적응을 말하자면, 같은 아시아 문화권이지만, 일본사람에 대한 적응이 조금더 어려웠다고 표현한다. 미국이 외부인에 대해 마음으로 받아주는 곳이라면, 일본은 표면으로 받아주는 곳인 것 같다고 말한다. 미국은 자기의 재능이나 생각을 더 표출하고, 키워나갈 수 있느 곳이라면, 일본은 많은 자제와 상대에 대한 배려가 있어야 하기에, 자기를 억누르고 수축시키는 곳이 아닌가 하고 느낄때가 많았다고 한다. 문화는 비슷할지 모르지만, 또한 선진국이지만, 생각의 선진국은 아닌것 같다며 웃음짓는다. 하지만, 그것이 불편한것은 아니라고 덧붙인다. 왜냐하면, 다른나라의 다른문화의 사람들이라고 인정하고 적응하면 되는 것이기에 불편함은 아니라고 말한다.

모국 이외의 다른 나라를 경험함으로써 얻은 적응력이 그런 생각들의 원천이 되지않았나 싶다. 또한 외향적이고 적극적인 BS씨의 성격이 많은 도움이 되었으리라 느껴진다.

◇ 대지진 이후의 다른 사람들의 행동패턴을 통해 배우는 것들 ◇

3월 11일 학교 수업중에 느낀 지진은, 일단 학생들을 인솔해야 하는 입장이였기에 책임감에 많이 두려웠다고 한다. 특히 한국학교에 다니는 두 자녀중 한명이 귀가를 하지 못하고 연락도 두절 되었기에 당황했고, 남편 또한 소식없이 집에 돌아오지 못했던 상황들은 아무렇지도 않았다고는 말 할수 없는 상황이였다고 한다.

이미, 이곳에서 자녀들을 키우며 살아야 겠다는 결심을 했고, 어려움이 생겼다고 해서 일본을 떠나야 겠다는 마음은 애당초 없었기에 방황

은 없었다. 쌀과 물의 부족등 남들이 겪는 어려움은 똑같이 겪었지만, 교회에서의 공동체는 많은 마음의 위로를 찾는데 도움이 되었다고 말한다.

오히려, 이번의 지진으로 주변사람들의 행동패턴을 보면서 많은 것을 생각하는 계기가 되었다고 한다. 바로 귀국을 결심한 사람들의 성급함을 보면서, 부모로서 어려움을 이겨나가는 방법을 가르치는 것에 있어서의 판단력의 중요성을 새삼 느끼게 되었다고 한다.

또한 외국인으로서 일본에 살면서, 한국인이 일본을 위해 해준 것이 아무것도 없다는 것을 느끼며, 어려울때 신의도 없이 떠나간다면, 어려운일이 있을 때마다 떠나야 한다면, 어디든 가서 살곳이 없지 않느냐고 덧붙인다.

또 하나, 견디다 떠나야 하는 사람들에 대해서는 왜 떠났을까 생각해 봤는데, 결국은 두려움이 원인인 것 같다. 경제적인 부분도 있겠지만, 한국에 가서 중년의 나이에 새 직장을 얻기도 쉽지는 않을것 같다. 사업하시는 분들도 분야에 따라 위기와 찬스의 두 갈림길이 있다고 한다.

교회에서 물리학 박사 분들의 자세한 강연이 있었고, 상담도 해봤는데, 그다지 큰 피해가 없다고 들었기에, 두려워 할 이유가 없는 것 같은데, 아마도 결국 이곳 일본에 있어야 할 이유를 못 찾아서 떠나는 것이지 않나 싶다고 한다.

방사선에 대한 두려움은 BS씨 가정도 마찬가지였다고 한다. 미디어가 정확한 정보를 준다고는 생각지 않는다며, 미디어는 순간 포착이지, 보는 사람으로 하여금 임펙트가 있어야 하기에 가장 극적인 것을 알리기에 더 두렵게 한다. 디테일 하게 알아서 좋을것도 없다고 생각해서, 일부러 텔레비젼을 보지 않고, 대신, 교회에 와서 더 많은 정보를 얻으려 노력했다고 한다.

「어린 자녀가 있기에 걱정을 안했다면 거짓말이죠. 지진에 패닉은 있었지만, 그래도 계속 지속되는 것이 아닌 것이기에 두려움을 떨칠수 있었다」며, 화학을 전공한 사람으로서 더욱 지식에 근거한 판단을 하려고 노력한것 같다.

부모로서 선생님으로서 어려움을 앞두고, 도망가는 것만 보여준다면, 아무런 교육의 의미가 없지 않냐며, 이번의 대처행동은 정확한 정보와 지식, 몸으로 보여주는 삶의 태도 등을 보여주는 기회로서 어린이들에게 좋은 교육의 기회였다고 한다.

물론, 지식을 통해서 대화를 함으로써 마음의 안정을 취하는 부분도 있지만, 어린 자녀들은 부모의 두려워 하지 않는 심적인 상태에 영향을 받아 잘 적응할 수 있지 않았나 싶다.

◇ 신쥬쿠에 살면서 느끼는 매력 ◇

일본에 와서 생활한 곳이 신쥬쿠 뿐이기에, 비교해서 장단점을 말하진 못하지만, 「주택가가 있고, 한 블럭만 지나면 다운타운이고, 유흥가이고, 이렇게 다양한 것이 다 모여있는 곳은 드물지 않나 싶다.」며, 너무 살기는 좋은 곳인 것 같다고 말한다. 교육도시는 아니지만, 한 블럭 차이로 주택과 번화가가 물려있는 곳으로 그 나름의 매력이 있다고 한다.

이렇게 많은 문화가 잘 공존하고 있는 것 또한 쉽진 않은데, 그 속에서 자연스럽게 적응하기는 쉽지 않겠지만, 「살다 보니까 코리아 타운도 생기고, 살다보니 적응한 것이지, 이러이러해서 내가 적응한것은 아니였다.」고 말하는 표현이 잘 드러내준다.

외국인으로서도 10년전 처음온 신쥬쿠는 범죄의 도시처럼 느껴지게 했고, 더러운 거리도 많았는데, 해를 거듭 할수록 깨끗해지고, 유흥가와 주택가로 잘 구분 되어지고 발전 되어진것 같다고 한다. 주택가, 백화점, 한국음식점, 어린이가 놀수 있는 공원, 자녀를 키우는 부모로서 필요한 요소는 다 채워준다며, 얼마후 집 가까이에 가정센터가 완성되는데, 그러면 더욱 좋은 환경이 형성 되어지지 않을까 기대한다고 한다.

◇ 인간관계를 맺는데 있어서 ◇

지금의 나이가 되고 보니, 스스로도 깊이 있는 친우관계를 사귀지는 않고, 표면적인 관계가 되기 쉬운것 같다고 한다. 새로 오시는 외국분들께 꼭 얘기하자면, 일본은 표현에 있어서 혼네와 다테마에가 있다는 것을 잘 이해한다면 별 어려움 없이 적응하지 않나 싶다고 조언한다.

그것 또한 일본에 살다보니 남을 배려하는 점에서의 선의의 거짓말 이었을수도 있겠다 싶다며, 너그럽고 풍성한 성격을 보여준다. 자신은 특이한 성격이라는 소리를 잘 듣는다며, 스텐더드로는 인식하지 말라고 웃음을 보인다. 무엇보다 자신이 신의를 갖고 서로에게 다가가 준다면 여러 다양한 사람들 중에서 좋은 친구를 사귀게 되는 것 같다며, 자녀들이나 제자들에게도 그러

한 것들을 가르치고 있다고 한다. 사람을 사귐에 있어서 진심으로 대하 는 것과 판단력을 길러주는 것.

한가지 일본친구를 사귀는 데에는 시간이 오래 걸린다는 것을 꼭 기억해주길 바란다. 조심성이 많고, 상대방이 나를 믿기까지 오래 걸리고, 많이 테스트 하지만, 한번 진정한 친구가 되면 그 관계가 오래 간다는 점이 있다. 그것은 일본문화가 일본사람들이 그렇게 신중하게 인생을 살아왔기에 보여지는 행동 패턴인것 같다고 덧붙인다.

◇ 일본의 미래를 기대하면서 ◇

지금 근무중인 학교가 개교 6년째 접어드는데, 이곳에서 교편 생활을 하면서 더욱 느끼는 것중 하나가, 「한국인으로서 일본 사회에 사는 아이들은, 한국인도 일본인도 아니다.」라는 것이다. 일본어를 퍼펙트하게 하는 것도 아니고, 한국어 또한 퍼펙트 하지 않은, 그들만의 또 다른 문화를 가지는 것같다고 느낀다. 이런 어린이들에게 어떤 교육을 해야 할지가 가장 생각하고 풀어가야 할 과제인것 같다고 덧붙였다.

외국인으로서 한국인도 일본인도 아닌 아이들이, 일본땅에서 자기들 나름대로의 문화와 생각을 가지고 살아가야 함에있어, 어떻게 살아야 하는지를 가르칠지?

이곳 크리스챤 학교의 어린이들 또한 3개국어(영어, 한국어, 일어) 를 하니까, 아이덴티티 크라이시스 (identity crisis) 문제를 안고 있다며, 이것은 어떤 나라의 문제가 아닌, 개인이 부딪쳐야 할 과제인것 같다고 한다. 아이들이 어떻게 하면 자기나름의 세계관과 문화를 가지고 살아갈지, 의식이 있고, 생각이 있는 아이들로 자라길 바란다. 그냥 이런 환경에서 태어나서 자란다는 막연함이 아니라, 자신들만이 가지는 장단점을 잘 살릴수 있기를, 그것을 본인들이 풀어가길 바란다며 교사로서 엄마로서의 생각을 보여준다.

본인과 같은 유학파 일세대의 인생과, 자녀인 2세대는 교포2세와는 또 다른 의식과 환경에서 다른 패턴을 보여주는 것 같다. 2세들의 미래, 아이들의 세계, 언어문제도 많이 관여되는 것같아서 집에서는 한국어를 많이 쓰고 있다. 또한 자녀가 많다보니 서로간의 교류를 통해서 배우는 것이 많은 것 같다. 아이들과의 대화의 시간이 많이 부족했던 점, 지금껏 많이 의식하지 않았던 점을 반성하면서, 한국인이라는 긍지를 심어주려 노력하며, 언어가 그 부분을 많이 도와주는 것 같다고 말한다.

자녀의 교육적인 면에 있어서의 방향성은 정확히 잡고 있는 BS씨. 그러기에 더이상의 방황과 갈등은 적은것 같아 보인다. 또한 신앙심 깊은 크리스챤으로서 교회의 비젼에 본인의 비젼과 교육방향을 함께 잡아 가는 지혜로움으로 더 안정적으로 보이는 듯도 하다.

남은 인생은 더이상은 갈등의 시간이 아니라, 이제껏 배운것으로 경험과 실력을 쌓아가는 것이 본인에 대한 미래인것 같다며 내러티브를 끝맺는다.

＜インタビュー　８３＞

KO さん（20 代・男性）「たくさんのチャンスがある都市、日本で多くを学びたい」

2011 年 10 月 16 日、大邱広域市出身
専門大生、日本滞在 4 年目
インタビュー担当：李 坪鉉

◇ 日本に来るきっかけ ◇

高校時代、奉仕活動をするサークルに入ることをきっかけに、勉強よりは本格的な奉仕活動により関心をもつようになる。それで、リーダーとして積極的に活動に参加する。結局、勉強の方は疎かになり、親が望む大学には合格できず、本人も納得いかないまま、浪人生活が始まる。その後、ソウルの漢陽大学に合格するものの、軍隊に行ってきて、本人の専攻に対する懐疑と人生の進路に迷う時、日本で牧師として宣教中である伯父さんのアドバイスをうけ、東京に来るようになった。

現在、専門大生として国際ホテル関連の勉強をしている。

日本での友だち関係は、まず、専門大の同級生たちとは8～9歳という相当のとしての差がある。だから、世代のギャップはあるものの、自ら先に積極的に近付けば、あまり問題なく友だちとして付き合うことができると秘訣を教えてくれた。

一つ、エピソードとして、クリスピーというチェイン店でアルバイトをしているときに、店長さんが外国人である自分とは目を合わせず、挨拶も受けてくれないのが続き、KO さんは自然に挨拶を受けてくれるまで、トコトンついていて、挨拶しつづけた結果、結局は向こうが先に諦めていた

と言いながら微笑んだ。

もう一つ、KO さんの積極的な性格を明らかに見せてくれる一面として、日本語学校に通う時、歴史観に関連してたくさんの討論をしたという。先生ともたくさんの意見衝突があったし、言いたいことも全部言えたし、竹島問題を含め、ニュースに出る日韓の話題には積極的に討論の議題としていたという。「外国に出ると、皆、愛国者になるようです」と笑っていた。このような積極的な性格は、親譲り、特にユーモア感覚が豊富な母親の影響が大きいという。

◇　新宿の魅力　◇

本人が通う大学があり、アルバイトをすることにおいて、新宿は KO さんにとって、まさに生活と密接に関連されているようだ。日常の大半を新宿で過ごしながら、把握している新宿の特性について聞かせてくれた。

まず、新宿は面白いと表現する。なぜならば、様々な人々が集まっているので面白い、多様な文化がほどよく混ざっていて、韓国では経験できない多くのことができるので面白いと表現する。

次に、新宿の特性としては、多様な階層の差異を一目でみて感じることができるところだという。ホームレスの姿がいる傍ら、ヒルトンホテルのように高級ホテルで一回の食事に 5 万円を使う人々もいる。もちろん、中間所得層の多様な人々も共存する空間でもあって、本人もたくさんの未来への可能性について夢を見ることができる、人生の刺激が多いところだ語った。

なによりも、KO さんにとって新宿は学校とアルバイトをする所であって、本人の全ての必要を満たしてくれるところだという。勿論、友だちと遊ぶ時や、日本の友だちから韓国の食べ物文化を紹介してほしいと言われた際にも訪れるところ、常にかかわっているコミュニティである。

◇　日本の若者たち　◇

大学で会う若い友人たちと対話をしながら、気になった点の一つとして、彼らのやる気の無さが惜しいと思うところである。また、自分について否定的な意識を持っていること、すなわち、何故生きるか、外見についての不満、能力についての不満等、被害意識と妄想が多いことなどをあげてくれた。そんな一面を見ながら、引きこもりを少しは理解できるようになったが、KO さんの目にはとても豊かで、たくさんのことを揃えて生きているように見えるのに、その豊かさを実感できないのがもったいないという。

そんなメンタルの部分に関しては、何より家庭の役割が大事であると思うが、家庭内暴力、麻薬、無関心、愛情の欠如、また、過剰な愛情、過剰な干渉等が主な問題であるようだと語った。

日本での友だちづくりにおいて、KO さんは怖いと表現した。具体的に言うと、彼女をつくることへの怖さである。本音と建前があると聞いたので、もし、彼女ができて、別れた場合、本人のせいで、韓国の男性への偏見を与えるようになることはしたくないという。外国人として一人の外交官だと考えているＫＯさんはまだ彼女をつくる心の準備ができてないと語った。

◇　子どもの教育について　◇

現在 KO さんは言語の壁は感じないものの、言語というものを知れば知るほど難しいということを実感しているようだ。そんな彼の経験も含め、ここで子どもを産んで育てている人たちを見ながら、KO さんは母国で子育てをしたいという心をもつようになったという。親の立場からすると、外国で子どもを育てると、韓国語も習うし、日本語も英語も習えるので、長所が多いように見えるかもしれないが、子どもたちにとっては、アイデンティティの混乱を経験することである。たくさんの言語を習うことにおいての混乱と難しさは、髪の毛が抜けるというストレス症状を見せる子どもも見たことがあるという。

だから、これから自分の子どもに対する教育は、母国で子育てしながら、大きくなって価値観と考えが成立できた後に、外国語も教えるようにしたいという。

小さい時から多様な文化の中で育てることは多くの長所もあるが、一番心配なのは、いざ子どもたちが韓国人でも日本人でもないまま、アイデンティティの確立ができないまま、育つことである。短所の方が大きいと判断している。

このように、若い青年が未来の我が子の子育てについて考えているのも、現在の経験があるからこそできることであると思う。

◇　多様な選択の可能性をもつ日本　◇

日本は学生にとって、多くのチャンスをもつ国であるという。昔は、アメリカがチャンスの国で

あると言ったが、現在、学生という立場からみると、努力だけすれば、本人がバイトをしながら、学費を稼ぎながら、勉強ができるところがここ日本だと言う。それは、今の韓国では現実的に不可能だという。

また、韓国ではあまり学歴が良くない人も、日本に来て、また、良い大学に進学して学歴を積んで､良いところに就職するチャンスも多いという。そのような意味からすると、新しいスタート点に立つことができるのが、ここ日本だと語った。自分がしたいことを自分で選択できるから、より可能性とチャンスが多い国であると考えているようだ。

そして、学ぶことをたくさん持っている国が日本だという。しかし、学んだことを適用する、生かすには難しいところになってしまったのも日本だという。むしろ、中国の方が新しい企業を興すか、チャンスの国になるかもしれない。したがって、本人も日本で良いことをたくさん学び、第三国でそれを広めて生かしたいという覚悟を明かした。

まず、先進国として、先に人生を生きてきた日本の人々がもつ揃えられている良いシステム等が羨ましいと語った。それらをよく学び、これからの人生に適用したいという。また、日本が今抱えている問題点も、本人にとっては学ぶ点であるという。何故なら、これから韓国が抱えるかもしれない問題点になる可能性が高いからである。

多くのことを積極的に学ぼうとする意欲とスポンジのような吸収力をもつ一面を見せる青年の語りであった。

＜インタビュー　８３＞

KO씨 (20대・남성)「많은 기회가 있는 나라, 일본에서　많은 것을 배우고 싶다」

2011년10월16일、대구광역시 출신
대학생、일본체재2년째
인터뷰 담당：이호현

◇　일본으로 오게되는 계기　◇

1남 1녀중 막내로, 고등학교 때 봉사활동 서클에 가입하는 것을 계기로 공부보다는 본격적인 활동에 더 관심을 갖게되고, 리더로서 더욱 적극적으로 활동에 참여하게 된다. 결국, 공부가 소홀해 지면서, 부모님이 원하시는 대학에는 합격하지 못하고, 본인도 납득하지 못한 체, 재수를 하게된다. 그 후 서울의 한양대에 합격하지만, 군대를 다녀와서 본인의 전공에 대한 회의와 인생진로에 갈팡질팡 할 무렵, 일본에서 목사로서 선교 중이신 큰아버지의 조언을 받고 동경으로 오게된다.

현재 전문대학에서 국제호텔 관련 공부를 하고 있다.

일본에서의 친우관계는, 우선 전문대의 다른 동급생들과 나이차이가 8,9살정도 난다. 세대차이의 갭은 있지만, 내가 먼저 적극적으로 다가가면 별 문제없이 친구로 사귀게 되는것 같다고 비결을 알려준다.

한가지 에피소드로, 크리스피라는 체인점에서 아르바이트를 할때, 유독 점장이 외국인인 본인만 따돌리며, 인사를 잘 받아주지 않아서, 끝까지 오기로 자연스레 대해 줄때까지 인사하며 다가갔더니, 결국 포기하더라면서 웃음짓는다.

또하나, KO씨의 적극적인 성격을 여실히 보여주는 일면은, 일본어 학교를 다닐때 역사관에 관련해서 많은 토론을 했다고 한다. 선생님과도 많은 의견 충돌을 보이며, 하고 싶은 말들을 다 했으며, 독도문제등 뉴스에 나오는 화제거리를 더욱 적극적으로 토론의 의제로 삼았다고 한다. 「외국에 나오면 다 애국자가 되는것 같다」며 웃음짓는다. 이러한 적극적인 성격은 부모님의 특히 유머 감각이 많으신 어머니의 영향을 많이 받았다고 덧붙인다.

◇　신쥬쿠의 매력　◇

본인이 다니는 대학과 아르바이트를 하는 것에 있어서, 신쥬쿠는 KO씨의 생활과는 밀접히 연관되어 있는것 같다. 일상의 대부분을 신쥬쿠에서 지내면서 파악하는 신쥬쿠의 특성들을 들려주었다.

우선, 신쥬쿠는 재미있다고 표현한다. 왜냐하면, 다양한 사람들이 모여있어 재미있고, 다양한 문화가 적절히 섞여 있어, 한국에서는 경험하지 못했던 것들을 할수있어 재미있다고 표현한다.

두번째로 신쥬쿠의 특성으로는 다양한 계층의 차이를 한눈에 보며 겪는 곳이라고 말한다. 홈레스들의 모습이 있는 한편으로는 힐튼 호텔 같은 고급호텔에서 한끼 5만엔의 식사를 하는 사람들이 있으며, 물론 중간 소득층의 다양한 사람들이 공존하는 공간에서, 본인도 많은 미래의

가능성에 대한 꿈을 꿀수 있는 인생의 자극들이 많이 보이는 곳이라고 말한다.

무엇보다도, KO씨에게 있어서 신쥬쿠는 학교와 아르바이트를 하는 곳으로서, 본인의 모든 필요를 채워주는 곳이라고 표현한다. 물론, 친구들과 놀때도, 일본친구들이 한국음식문화를 소개시켜 달라고 할 때 등등, 항상 근접해 있는 커뮤니티 임에 틀림없다.

◇ 일본의 젊은 친구들을 사귀면서 ◇

대학에서 만나는 젊은 친구들과 대화를 하면서 한가지 아쉬운 점이 있다면, 의욕(やる気)을 상실했다는 것이다. 또한 자신에 대한 부정적 의식이 많이 있다는 것, 즉, 왜 사는지, 외모에 대한 불평과 능력에 대한 불평등, 피해의식과 망상이 많은 것 같다고 말한다. 그런면들을 보면서 방에서 갖혀 지내는 히키코모리를 조금은 이해하게 되었다며, 본인이 보기에는 더 없이 풍요롭고, 많은 것들을 갖추고 사는 것 같은데 그런 것들은 느끼지 못하는 것이 아쉽다고 한다.

그러한 멘탈 부분에 관해서는, 무엇보다도 가정의 역할이 중요하지 않나 싶다며, 가족내의 폭력과 마약, 무관심, 애정결핍, 또는 애정과잉, 과잉간섭 등이 주요한 문제인 것 같다고 들려준다.

일본에서 친구를 사귐에 있어, KO씨는 무서움이 있다고 표현한다. 구체적으로 말하면, 여자친구를 사귀는 두려움이다. 혼네와 다테마에가 있다는 것, 그리고 혹여 헤어졌을 경우, 본인으로 인한 한국남자에게의 편견은 주고 싶지 않다고 한다. 외국인으로서 한사람의 외교관이라 생각하는 본인이 아직 마음의 준비가 되어 있지 않기 때문이라며 덧 붙인다.

◇ 주위의 많은 뉴커머들을 보면서 자녀교육에 대해 생각하다 ◇

현재 KO씨는 언어 장벽을 느끼지는 않지만, 언어라는 것이 알면 알수록 더 어려운 것 같다고 말한다. 그런 본인의 경험들에 비추어, 이곳에서 자녀를 낳아 키우시는 분들을 보면서, KO씨는 모국에서 자녀를 키우고 싶은 마음을 가지게 되었다고 한다.

부모 입장에서 보면, 외국에서 키우게 되면 한국어도 배우고, 일본어도 배우고, 영어도 배울 수 있다는 것이 장점들로 보일지 모르지만, 어린이들은 정체성에 있어서 많은 혼란을 겪는 것 같다. 여러 언어를 배우는 데 있어서의 어려움은, 머리카락이 빠지는 등의 스트레스 증상을 보이는 아이들도 본적이 있다고 한다. 그래서, 본인의 자녀교육은, 모국에서 하면서, 나중에 생각과 가치가 정립된 후, 외국어도 가르치고 싶다고 한다.

어려서 부터 다양한 문화에서 자라는 것이 좋은 점도 많겠지만, 제일 걱정스러운것이 자칫, 한국인도 일본인도 아닌 정체성 없이 자라는 것이기에, 단점이 더 많은 것 같다고 판단한것 같다. 이렇게 싱글인 젊은 나이에 미래의 자녀들에 대한 계획을 키우게 된 것도, 현재의 경험들이 있었기에 가능한 것으로 보인다.

◇ 선택 할수 있는 다양한 미래의 가능성을 가진 나라 일본 ◇

일본은 학생에게 있어 많은 기회의 땅이라고 말한다. 옛날 사람들은 미국이 기회의 땅이라고 했지만, 현재 학생인 입장에서 보면, 노력만 하면 본인이 아르바이트로 학비를 벌어서 공부 할 수 있는 곳이 이곳 일본이라고 말한다. 그런 것이 한국에서는 현실적으로 불가능하다고 한다.

또한, 한국에서 학력이 별로 안좋은 친구들도, 일본에 와서 또다른 좋은 대학에서 학력을 쌓아서, 좋은 곳에 취직할 수 있는 기회도 많은 것 같다. 그런 의미에서 보면, 새로운 스타트 지점에 설수 있는 곳이 이곳 일본이라고 한다. 내가 하고 싶은 것을 내가 선택해서 할수 있기 때문에 더욱더 가능성과 기회가 많은 나라라고 보는 것 같다.

그리고, 기존의 배울점들이 많은 땅이 일본이라고 한다. 하지만, 배운것을 적용하기에는 힘든 땅이 되어버린 일본인 것 같다고도 말한다. 중국이 오히려 새 사업의 기회의 땅일수도 있다며. 따라서 본인은, 일본에서 좋은 것을 배워서, 제 3국의 세계에서 펼치고 싶다고 각오를 밝힌다.

먼저 선진국의 삶을 살아온 일본이기에, 앞서가 있는 사람들의 잘 갖추어진 시스템이 부럽다. 그런 것들은 잘 배워서, 앞으로도 좋은 것으로 적용하고 싶다고 한다. 또한 일본이 지금 안고 있는 문제점들도 배울점이라고 말한다. 앞으로 한국에서 안고 겪어야 할 문제점들이 될 수 있기 때문이라며, 많은 것을 적극적으로 배우며 흡수하는 스폰지 같은 일면을 보여주었다.

<인터뷰 8 4>

SG씨 (20대・여성)「UN에서의 활약을 꿈꾸며」

2011年10月17日, 구미출신
대학생, 일본체재 3년째
인터뷰어 : 오 세연

◇ 약력 ◇

SG씨는 한국의 구미 출신이고 현재 신주쿠쿠에 있는 대학교에 다니고 있다. 일본에 온 지는 올해로 3년째이며 현재 친언니와 함께 학교 근처 맨션에서 살고 있다. SG씨의 친 언니도 같은 대학교의 대학원에 다니고 있다.

◇ 일본에 오게 된 계기 ◇

SG씨는 초등학교 6학년때부터 일본어에 관심이 있어서 공부를 했으며, 중학교에 입학 한 후에도 일본어반이 있었기 때문에 계속 일본어 공부를 했다. 또한 외국어고등학교에 진학 해서 일본어반에 들어 갔다고 한다.

"계속 일본에 대해서 접할수 있는 기회가 많았고, 일본어를 배우다 보니까 일본 문화와 일본 학생들과의 교류도 많아 진 것 같아요... 그러던 중에 일본이라는 곳에서 공부를 해 보고 싶다는 생각이 들어서 고등학교 2학년때부터 준비를 했습니다..."

SG씨는 현재 국제학에 관해서 공부를 하고 있다. 국제학에 관심을 가지게 된 계기는

"제가 국제학부를 선택한 이유는 고등학교3학년 때 모의UN에 참가를 했었는데 거기서 다양한 나라의 주제를 다루고 또한 그 주제의 문제를 영어로 국제 회의를 진행하는 것을 보고 나도 한번 이런 환경에서도 살아 보고 싶다는 생각이 들었어요..."

그렇기 때문에 현재 국제학에 관한 공부를 하고 있으며, 여러 나라에서 온 학생들과 교류를 많이 할 수 있는 현재 환경에 만족을 하고 있다고 한다.

◇ 일본에 대한 이미지 ◇

일본에 오기 전의 일본에 대한 이미지는 일본 사람들은 매우 친절 할 거라고 생각 했다고 한다. "물론 도쿄라는 큰 도시이기 때문에 그럴거라고 생각하지만, 사람들이 차갑고 불친절한 사람들도 있는 것 같고... 한국과 비교하면 일본이 훨씬 친절 하다고 생각하지만요..."

또한 일본 대학교에 대한 이미지, 특히 일본 대학 생활에 대한 이미지도 많이 달랐다고 한다. "일본 학생들이 좀 공부 보다는 써클활동에 중점적으로 한다고 들었었는데 저희 학교적인 특징 때문에 그런 것 같기도 하고, 의외로 애들이 공부도 굉장히 열심히 하는 것 같아요...."

◇ 현재 하고 있는 공부 ◇

국제학에 관심이 있었기 때문에 유학을 오게 된SG씨는 현재, 국제관계의 세미나에 들어 가 있다. "그 중에서 특히 북한 핵에 대해서 관심이 많아서 그 쪽에 공부를 하게 되었고 또 동아시아 쪽 공부만 하다보니깐 다른 아프리카나 중동이라는 지역에 대한 지식이 없는 것 같아서, 포괄적인 지식을 습득 하고자, 이 지역의 정치에 대해서도 공부하고 있어요."

SG씨의 학부는 여러 분야를 배울 수 있는 특징을 가지고 있다. 그렇기 때문에 국제학에 관한 정치, 문화등 포괄적으로 관심을 가지고 공부를 하고 있다고 한다.

◇ 학교 생활과 교우관계 ◇

SG씨의 학부는 한국인 유학생이 많기 때문에 한국 커뮤니티가 잘 이루어 져 있다고 한다. "한국인 유학생이 정말 많지만, 또 졸업 시기가 얼마 안 남았기 때문에 한국인 친구들 뿐만 아니라 다른 외국인 친구들, 일본인 친구들과도 전보다 더 교류를 가질려고 노력 중이에요." 또한 대학교 1,2학년때는 소란부시(일본 전통 춤) 를 배우고 공연 하는 써클에 들어 갔다고 한다. " 여러 친구들하고 더 가깝게 어울릴 수 있는 좋은 기회가 된것 같고, 소란부시는 일본 학생들도 알기는 하지만, 직접 해 본 사람은 많지 않더라구요. 제가 외국인인데 그걸 배웠다는게 기뻤고 보람있었어요." 하지만 대학교 3학년이 된 후, 학업에 집중을 해야 했기 때문에 시간이 부족했고, 또한 주변 친구들도 휴학이나 다른 곳으로 유학을 간 친구들이 늘어났기 때문에 재미가 없어져서 그만 두었다고 한다.

한국인 친구들과 일본인, 다른 외국인 친구들하고 교류를 하면서 틀린 점에 대해서 물어 봤다. "한국 친구들과 있을 때는 편한 것 같아요. 아무래도 언어적,문화적인 면이 있기 때문에...." 처음 일본인, 외국인 친구들을 대할때 어떻게

해야 할지 몰랐다고 한다. 하지만, “이제는 일본에 와서 그런 환경이 익숙 해 지다 보니깐, 사람 사귀는 것은 다 똑같다는 생각이 들었어요... 있는 나를 보여 주고 같이 공통 관심사가 있으면 그것에 대한 이야기를 하고 연락 하면서 다 친구가 되는 것 같아요..”라고 말하면서 처음 일본에 왔을 때는 힘들었지만, 많은 경험을 통해서 배워 가고 있으며, 지금은 극복을 하고 자연스럽게 친구들을 대한다고 한다.

◇ 앞으로의 장래 ◇

SG씨의 앞으로의 장래에 대해서 질문을 했다. 먼저 거주지에 관한 이야기를 나누었다. “솔직히 일본이라는 나라가 저랑 굉장히 잘 맞는 것 같아서, 한국처럼 편하기도 하고 이제 익숙해져서 앞으로 여기서 일을 하든지 공부를 하든지 계속 있고 싶었는데, 아무래도 지진과 방사능 때문에 부모님이 걱정을 많이 하시고 계셔서...” 일본에서 계속 살고 싶었던SG씨는, 2011년3월11일에 일어 난 지진과 방사능 영향으로 진로에 대한 고민을 하고 있는 듯 했다. 하지만 장소 보다는 대학교를 졸업 한 후에 취직을 할지, 아니면 대학원에 진학을 할지에 대한 고민이 가장 크다고 한다.

“앞으로 만약에 취직을 한다면 한국 보다는 일본이나 미국에서 경험을 쌓고 싶다는 생각이 있습니다...”SG씨는 아마 취직을 한다고 해도, 언젠가는 다시 대학원에 진학을 해서 공부를 하고 싶다고 한다. SG씨는 UN에서 일을 하는게 가장 큰 목표이다. 그러기 위해서는 회사에 들어 가서 사회경력도 쌓아야 하며 대학원에서도 전문성을 길러야 한다고 한다.

“부모님은 한국에 왔으면 하는데 저는 개인적으로는 한국에 별로 안 가고 싶은...아직 젊기 때문에 다른 나라에서 살고 싶다는 마음이 커요...”

현재 일본 대학교에서 국제관계에 관한 공부를 하고 있지만, 대학원으로 진학을 하게 된다면 미국에서 공부를 하고 싶다고 한다.

지금 당장은 대학원에 진학을 할지, 취직을 할지 많이 고민하고 있는 상황이지만 먼 장래를 위해서는 현재 영어 공인성적을 더 올리는게 목표라고 한다.

“언어적인 능력을 높이고 싶어요. 하루에 조금 씩이라도 영어랑 일본어를 외울려고 노력하고 있어요.”라고 말하는SG씨에게 굳은 의지와 늘 노력 하고 있는 자세가 느껴졌다.

＜インタビュー　８４＞

SG さん（20 代/女性）「UN での活躍を目指して」

2011 年 10 月 17 日、亀尾出身
大学生、日本滞在 3 年目
インタビュアー：呉 世蓮

◇ 略歴 ◇

SG さんは韓国の亀尾出身で、現在の新宿区にある大学に通っている。来日して、今年で 3 年目となり、現在、お姉さんと一緒に学校近くのマンションに住んでいる。SG さんのお姉さんも同じ大学の大学院に通っている。

◇ 来日したきっかけ ◇

SG さんは小学校 6 年生の時から、日本語に興味をもっていたので、日本語の勉強をしており、中学校に入学した後も、学校に日本語のクラスがあったので､引き続き日本語の勉強をした｡また、外国語高校に進学してからも、日本語のクラスに入っていったという。

「ずっと日本について触れる機会が多く、日本語を学んでいたため、日本文化と日本の学生との交流も多くなったようです...そんな中、日本というところで勉強をしてみたいという気持ちが大きくなり、高校 2 年の時から準備をしていました」。

SG さんは現在、国際学について勉強をしている。国際学について関心をもてるようになったきっかけは、「私が国際学部を選んだ理由は、高校 3 年生の時、模擬 UN に参加をしましたが、そこでさまざまな国のテーマを扱って、またそのテーマの問題を英語で国際会議を進行しているのを見て、私も一度このような環境で暮らしてみたいと思いました...」。

そのため、現在、国際学について勉強をしている。様々な国から来た学生との交流が多いため、今の環境に満足しているという。

◇ 日本へのイメージ ◇

日本に来る前の日本に対するイメージは、日本の人々はとても親切であると思っていたという。「もちろん、東京という大都市だから、そうだと思いますが、人々が冷たくて不親切な人もいるよ

うで…韓国と比べると、日本の方がはるかに親切だと思うんですけどね…」。

また、日本の大学へのイメージ、特に日本の大学生活に対するイメージもたくさん違ったという。「日本の学生たちは、ちょっと勉強よりサークル活動に焦点を当てていると聞いたのですが、私の学校の特徴と関わっているかもしれませんが、そのような事でもあって、意外に友達のほとんどが、勉強もとても頑張っているようです…」。

◇　現在の勉強について　◇

国際学への関心があったので、留学を決めたSG さんは、現在、国際関係のゼミに入っている。「その中で特に、北朝鮮の核についての関心が高くて、その方の勉強をするようになり、また、東アジアの方の勉強ばかりしていたので、他のアフリカや中東といった地域についての知識がないようで、包括的な知識を習得しようと、この地域の政治についても勉強をしています」。

SG さんの学部は、様々な分野を学ぶことができる特徴をもっている。そのため、国際学に関する政治、文化など包括的に関心をもって勉強をしているという。

◇　学校生活や交友関係　◇

SG さんの学部は、韓国人留学生が多いので、韓国のコミュニティの活動が活発に行われているという。「韓国人留学生が本当に多いのですが、もう卒業の時期が近付いてきたので、韓国人の友達だけでなく、他の外国人の友達、日本人の友達とも前よりも、交流をもつように努力中です」。また、大学 1, 2 年生の時はソーラン節（日本の伝統的なダンス）を学び、公演するサークルに入っていったという。「色々な友達と仲良く、楽しく過ごせる良い機会になったようで、ソーラン節は、日本の学生たちも知っていますが、直接やってみた人は多くはないんですよ。私が外国人なのに、それを学んだのがうれしくて、やり甲斐もありました」。しかし、大学 3 年生になってからは、学業に集中しなければならなかったため、時間もあまりなく、また、周囲の友達も休学や留学へ行った友達が増えたので、楽しくなくなってやめたという。

韓国人の友達と日本人、他の外国人の友達と交流をしながら、感じた点、とくに違う点について聞いてみた。「韓国の友達といると、落ち着きます。どうしても言語的、文化的な面があるので…」。初めての日本人、外国人の友達と接するときに、どのように接すればいいのかわからなかったという。しかし、「今は日本に来てそのような環境に慣れてきたので、人と付き合うのはすべて同じだという気がしてきました…ありのままの私をみせて、共通の興味関心があれば、それについての話をして、連絡を取り合って友達になることだと思います」。と言いながら、日本に来たときの最初は、大変だったが、多くの経験を通じて学んでいき、今は克服できて、自然に友達と接しているという。

◇　これからの将来　◇

SG さんの将来について質問をした。まず、住まいに関する話をした。

「正直、日本という国は私ととても合うようで、韓国のように落ち着きますし、もう慣れてきて、今後ここで仕事にしろ、勉強にしろ、住み続けたかったのですが、どうしても地震と放射能のために両親が心配して…」。日本に住み続けたいと思っていた SG さんは、2011 年 3 月 11 日に起きた地震と放射能の影響で、進路について相当、悩んでいるようにみえた。しかし、場所というより、大学を卒業したら就職をするのか、それとも大学院に進学をするかどうかについての悩みが一番大きいという。

「今後、もし就職をするなら韓国よりは日本やアメリカで経験を積みたいという思いがあります…」。SG さんは、おそらく就職をしても、いつかはまた、大学院に進学をして勉強をしたいという。SG さんは、UN で仕事をするのが最大の目的である。そのためには、会社に入って、社会経験も積むべきだし、大学院で専門性を育てなければならないという。

「両親は韓国に帰って来て欲しいといいますが、私は個人的には韓国にあまり帰りたくない…まだ若いから、他の国で暮らしてみたいという気持ちが大きいです…」。

現在、日本の大学で国際関係に関する勉強をしているが、大学院に進学をするようになったら、アメリカで勉強をしたいという。

今は大学院に進学をするのか、就職をするのか、非常に悩んでいる状況だが、遠い将来のためには、現在英語の公認成績を上げることが目標だという。

「言語的な能力を高めたいです。毎日少しずつでも、英語と日本語を覚えようと努力しています」。と言う SG さんから固い意志と、常に努力してい

る姿勢が感じられた。

＜インタビュー　８５＞

HI さん（20 代・女性）「卒業後には…」

2011 年 10 月 20 日、光州出身
大学院生、日本在住 4 年
インタビュアー：渡辺幸倫

◇　来日以前のこと　◇

蔚山で生まれた HI さんは、生後間もなく光州に移り、そこで大学までを過ごした。大学では政治・外交学部で学び、卒業後は製菓メーカーで 2 年間務めた。

会社は就職難の中、安定と女性の働きやすさで選んだ。本社で初めは支店の管理業務、そして OEM 生産の発注などもした。とにかく「イベントがあるとき忙しいっていう職。クリスマス、バレンタイン、ホワイトデー、あと韓国でいうチュソクとか」。楽しそうではあるが、楽な仕事ではない。大手でもあり、女性の働きやすそうな職場ということで選んだが、せっかく大学で学んだ政治学を生かせないことは少し不満だった。ただ、日本との縁ができたのもこの会社での出来事だった。

日本の企業との共同事業の案件があった。それまで日本には全然興味はなかったそうだが、「何回かやりとりする間に日本っていう国はいいんじゃないかなっていう。そこからちょっと興味を持つことになって、日本のドラマとか映画とか見て『面白い国かも』っていう興味が出てきました」。きっかけはいろいろなところにあるものだ。

「韓国語しかしゃべれないので、他の国の言葉も習ってみたいってこともあるし、日本って結構近い国なので近い国だったら両親も心配なしに行かせてくれるかなっていう軽い気持ちで 6 ヶ月間だけちょっと遊びながら日本語勉強しようっていう気持ちで来ました」。親を心配させたくないと考えると、やはり距離的な近さというのは重要な要素だった。それまで学校、会社と「１回もボーっとして休んだことが全くなかった」ということもある。「お母さんとか年よりの人は『それが１番いいのよ』とか言ってるんですけど、26 くらいだとわかんないじゃないですか」と思い、「本当にゆっくり考えられる時間」を得たいと感じていた。結局、仕事を辞めて韓国で一カ月ほど勉強してから来日した。

◇　日本語学校から大学院へ　◇

新宿にある日本語学校での勉強は楽しかった。アルバイトも経験しながら 6 ヶ月たったころにはますます勉強が面白くなっていた。そこで延長。もうちょっと、もうちょっとと思っているうちに、二年が過ぎた。ずい分と日本語は上達したが、日本語だけでは物足りなくなり、大学時代から興味のあったメディア関係の大学院に進学する事になる。歴史のある大学だが新設の学科だったため第一期生だ。

現在の研究は市民ジャーナリズムの日韓比較。インターネット上での市民記者の発信をジャーナリズムの一環としてとらえ、それが日本と韓国でどのように異なった役割を担っているのかを考えているらしい。現在は 2 年目も半ばを過ぎ、修士論文の執筆に忙しい。

卒業後の進路については現在思案中。「一応日韓関係についての仕事をやりたいと思ってるんですけど。韓国で就職ができるんだったらしたいなって思ってて」というが、日本の友人と離れるのも寂しい。かといって、日本も就職難。なかなか思うような求人自体が少ない。とにかく迷いながらも論文執筆と平行して、就職活動もしているが、それだけでなく英語の勉強をしてスキルの幅を広めるも忘れないようにしている。

◇　地震のこと　◇

HI さんはちょうど韓国に帰国していた。「韓国のテレビで見てたんで、地震が起きたのが帰る２日前とかだったんですね。それで飛行機延長して、もっと韓国にいて落ち着いてから来ました」という。周りには休学をすすめる人もいたが、HI さんは大きな変更をすることはなかった。「戻る前に迷ったっていうくらいですね。原発大丈夫かなっていうのでちょっと…それが心配になって。まだ結婚してないので」という迷いはあったが、結局、学期の始まる 4 月上旬に来日した。

◇　勉強以外の生活　◇

HI さんの日本での生活は勉強が中心だが、勉強ばかりしているわけではない。各地を訪れたのも楽しい思い出だ。「温泉ですね。温泉大好きなので。後は旅行に結構いってるので…北海道とか良かったし。富良野とか…」、他にも伊豆、京都、大阪などこの 4 年間で訪れたところが次々とあがる。

京都で泊まった宿の女将さんはすばらしかったそうだ。「よくあるじゃないですか、ドラマとかで伝統的な方とか。嬉しかったというか印象的でした」と振り返る。他にも「北海道は本当に食べ物が美味しいと思います。何食べても美味しいんです。はずれが全くなしでした」。各地に良い思い出がある。ただ、大阪だけはいただけないそうだ。「大阪に行った時に感じたことなんですけど、偏見が付いちゃったかもしれないんですよ。大阪の人はちょっと図々しい所があるなってことを。4日くらいいたんですけど、街歩く時にぶつかってくるのが凄く多すぎて」。苦笑いしながら話してくれた。ただ、はじめ、大阪は韓国とびっくりするくらい似ている物が多いとも思ったそうだ。各地をまわった人だからこその感想だろう。

アルバイトの思い出も色々ある。はじめはファミリーレストラン。数ヶ月で高級有名しゃぶしゃぶ店に移った。ここでは今も週に 3 日顔を出す。既に3年になるので、アルバイトの中でも長い方だ。場所は歌舞伎町。特殊な場所と言って良いかもしれない。「ホストとか酔っ払いとかも結構多いのでちょっと悪いこと見たり…。酔っ払いを見ることが多いかもしれないですね。でも歌舞伎町はそういうところだから、自分が悪いですね～」と笑う。「最初は面白かったんですね、ホストの髪型とか韓国では見たことなかったので。でも今は普通になってきて。珍しくはないですね」。歌舞伎町にも慣れたものだ。

HI さんはクリスチャン。教会にも通う。来日後の2年間はほとんど行かなくなっていたが、地震の前後帰国していた際に再び通うようになり、日本に帰ってきてから良い教会をアルバイト先の友人のつてで探した。「日本にある教会って、結構しつこいっていう人が多くて。新大久保とかで知らない人から話しかけられて、うちの教会来て下さいって付いてきたり。ああいうのがちょっとしつこすぎて、日本にある教会は悪い印象があった」そうだが、現在の教会は満足しているそうだ。「心の安定感っていうのはありますね。支えてくれる存在がある、みたいな。一応祈りはしてますけど、教会の人たちとは付き合いがないので礼拝だけ一時間であとはまたバイトがあって、すぐ出ちゃうんで知り合いとかは居ないですね」とあくまで教会は祈りの場として通っているそうだ。

◇　日本で感じたことあれこれ　◇

4 年間日本で生活して感じたことのうち「一番良かったのは、他の人を気にしなくて良いって言うのが結構楽しかったです。韓国だと誰かに見られるかもしれないってことで、目立つ服とかも抑えたりすることがあったんですけど、日本では周りの目とか気にしなくなってるので、最初は自由感があった」という。留学生という立場もあるだろうが、自由を楽しむことができたことが一番良かったそうだ。

人付き合いの日韓の違いも印象に残っている。「日本人って誘っても、断るとまた誘うとかあんまりないじゃないですか。それが韓国人の文化とちょっと違うと思うんですね」。一度アルバイトで誘いを断ってから、全く連絡が来なくなった知り合いがいた。日本人の友人に相談すると、「『そうすると後から誘うことはないよ』って言われ」て、驚いたそうだ。「それで日本人の方に言いたいのは、韓国人って断るのが日本人みたいにまわしながら親切に断らないんですね。本当に言いたいことだけ」。むしろ「嫌がってるときは返事しないですね」のだそうだ。知っておくといつか役立ちそうな知識である。

＜インタビュー　８６＞

TO（30 代・女性）「仕事と信仰と私の関係」

2011 年 10 月 20 日、仁川出身
飲食店経営、日本在住 6 年
インタビュアー：渡辺幸倫

TO さんは H さんとして以前紹介した女性の親せきにあたる。日本に来る以前には知らなかったそうだが、2005 年に日本へ留学するにあたって、日本にいる親せきがいるということで紹介されたという。このインタビューは、この縁を逆にたどって紹介してもらったことになる。

◇　仁川での生活と日本行きへの道　◇

古くは上陸作戦、今は空港で有名な仁川で生まれ育った。母と妹は今も仁川に住んでいる。父は高校三年生の時に亡くなった。ちょうど大学受験のころでもあったため影響は大きかった。奨学金がとれるようにと自分の関心とは違った学科に不本意ながら進学することになる。産業安全衛生学科。「働く人が、そこの場所がどれくらいうるさいかとか基準を図ったりとか、インスタントラーメ

ンの中にどれくらい悪いものが入っているのか調べたり。工場で働いている人の安全のために勉強する学科」だったそうだ。

一生懸命勉した甲斐もあり卒業後は大きな会社の会計の仕事に就く。会社はソウル。仁川から往復3時間を毎日通った。忙しい時期には朝5時に起きて、家に帰るのが朝の1時。また出勤するまでにわずか4時間しかないという時もあった3年ほど働いたところで、効率化のために会計部門にも新型のコンピューターシステムが導入され、やっとこの忙しさから解放された。

急に時間をもてあまし始めた時に思い出したのが、語学の勉強。そういえば高校の時に第二外国語で少し日本語を勉強していたし、大学生の時にも日本のドラマを見たりしていた。会社に通いながら週に 1，2 回勉強していると、どんどんと面白くなった。土日も勉強会を開くほどになったころに考えたのが日本留学。ただ、本格的な留学には不安があったので、日本に旅行に行ってみた。そこで得たのが「ここで勉強しても大丈夫という安心感。「韓国語が書いてあるし、電車も大丈夫だと思って」。早速 5 年間働いた会社を辞めた。留学に必要書類を集めたり、ソウルの日本語学校に通ったりしながら準備をし、ついに2005年の10月に新宿にある日本語学校に入学することになる。

◇　日本語学校時代　◇

初めのテストの出来が実力以上に良かったのか、かなり良いクラスになった。周りの人はできるのに自分は…。急に日本語の勉強が面白くなくなってしまった。もちろんきちんと通ってはいたが、別のことにも夢中になる。アルバイトだ。「5年間働いたお金を日本で全部使うのが嫌だと思って、私は勉強より仕事を頑張ったと思います」と笑う。

日本語学校に通っていた二年間のうちはじめは新宿の高級しゃぶしゃぶ屋さん、2 年目には親戚の H さんが始めたお店で働いた。H さんのお店では店長を任された。しかし、自分は店長に向いていないという。特に H さんが始めた店では、「『実力がないのに親戚だから店長だろう』私が『何かしたらすぐに報告する』とか」思われるのも嫌だったし、その時私は別の店で1年しか働いたことがなかったので、店長としては足りないことが多かった」と素直に認めるところもある。アルバイトは男性が多くみな TO さんよりも年上だった。これもやりにくかったことの一因だ。このお店は結局あまりうまくいかずしばらくすると店をたたむことになる。

◇　今のお店と地震と私　◇

お店をたたんでからは、しばらく別の仕事をするが、H さんが店を再開するとまたそこで働くことになる。それが今の店だ。開店時には店長の話もあったが辞退した。店の一員として経営をみたり、必要な時に応じて様々なことをしている。ただ、地震後は急に人手が少なくなり、非常に苦しい時期もあった。店長としてのマネージメントもまたするようになった。ただ、「今社員があまりいないので、人間関係は問題ないです。店長としては、この店が繁盛するように私が頑張る」と笑えるようになった。

現在のお店で約2年と1カ月くらい働いていることになる。地震の際は正直迷った。ちょうどそのころには、そろそろ結婚も考えたいところだが、「日本にいればできない」のではと思っていたこともある。地震後には「お母さんから『早く韓国に帰って来てね』と言われて、心が痛みました」という。だが、まだ何かを成し遂げたというわけではない。このまま帰ってよいのかと悩んだ。

「その時は本当に帰るキッカケだと思って。今なら理由があるじゃないですか。これがあるから来たよって言う。その前はちょっと、何て言えばいいかなっていう…。私が何もできないのに帰ったら恥ずかしい。友達とか親戚に言われたら話しにくい…でも地震だったら、これはしょうがないってなるから、行くかと思って」難しいところだ。

結局 TO さんは残ることにした。親戚の H さんが一生懸命やっている姿を見て、「何か力になりたい」と思ったからだ。地震で大きな影響を受けたお店も努力の甲斐あってか最近は軌道を取り戻しつつある。

◇　お店以外の生活　◇

キリスト教の教会が大きな部分を占めている。日曜日には礼拝。聖歌隊に入っている。この教会は大きく韓国人を中心に信者は 5000 人余りを数える。この教会のほかに小規模なところの主宰しているボランティアとして、ホームレスの人のために週に一度食事の提供をしたりしている。「お店が上手くいったら、教会に寄付したり…夢です。私の給料があがったら寄付したり。これが2つの私の人生です。これが今、私が日本にいる力かな。

意味がある」。生活を支えるお店と心を支える信仰といったところだろうか。しかしこの二つはお互いに支えあう関係にあるようだ。

実はTOさんはもともと信仰心が強かったというわけではない。日本での生活や経験を通して変わってきたのだという。「韓国にいた時よりももっと信仰が強くなりました。誰も頼る人がいないので、苦しい時他の人を頼るより祈る時間が多くなって、1人で教会に行って1人で遅くまで祈ったり」。「韓国では、日曜日に行きますっていう格好だけだったんですけど日本ではもっと信仰が強くなりました」。ただ、「韓国に戻ったら戻るかもしれないです」とも思う。生活と信仰はやはり密接に関係しているようだ。

◇　これからのこと　◇

仕事をうまく行かせることが当面の目標だ。それをクリアしたら、「もっとボランティアをやりたいです」という。ちなみに結婚するならやはりクリスチャンが良いというが、その分、出会いが少なくなってしまう。特に、地震の後に男性が多かったIT関係の人がほとんど帰り、学生ばかりになってしまったという。「急に私くらいの年の人がいなくなったんです。それまでは結構いたんですが…。多分いつかは神様が…」。地震の影響はこんなところまで…。笑顔のTOさんを思わず応援したくなってしまった。

＜インタビュー　８７＞

AZさん（20代・女性）「人生を変えたベルサイユのばらとの出会い。9歳でした。」

2011年10月21日、釜山出身
日本語学校生、日本在住3年
インタビュアー：渡辺幸倫

アニメとの出会いは9歳の時だった。「小学2年生のときにベルサイユのバラを見て、本当に凄い感動を受けてその時からずっと私は晩画かアニメの監督になりたいって、そういう夢を抱いて…」。この夢を叶えるための日本行き。AZさんの旅は始まったばかり。AZさんの作品を見る日が楽しみだ。

◇　来日以前のこと　◇

一人娘のAZさんは釜山で育ち、大学では美術学部で学んだ。「韓国でアニメを専攻しても、日本に留学とかしないとダメっていうか…」と言う考えから、周辺領域で将来アニメをするために役立ちそうな事で選んだ。つまり美術を専攻したのもあくまで「アニメをするため」。

大学で美術を専攻したことは間接的にだがすぐに実際に役立った。日本行きを両親に相談したところ、「実は親に反対されて…ここ来るの親が結構嫌がってたらしいですよ。私一応女なので…」。韓国にいてくれるなら色々援助するけども、日本に行くなら援助はしない、と宣言されてしまう。アニメの勉強をするために留学をしたがる一人娘を心配する両親の気持ちもよく分かる。そこで、美術関係の学校でアルバイトをしてお金を貯めた。

◇　ワーキングホリデー、日本語学校　◇

2008年にワーキングホリデービザで来日した。当時日本のビザは人気があり、取得のために3，4回申し込む人もいたが、幸いにもAZさんは一度の申請で取得できた。韓国で日本語を勉強して日本語能力試験1級にも受かっていたので、既にそれなりの実力であった。

ワーキングホリデーの良いところは、いろいろな経験をしながら、仕事も出来ること。アニメのことを学びながらも進学のための資金をさらに貯めようと思っていた。日本社会を学ぶためにもいろいろな仕事をしてみた。「アルバイトはドトールでも働いてたし、東京の各地にあるホテルにレストランがあるじゃないですか、その時に宴会とか結婚式とかあったら、派遣されていくという仕事もやってました。そういう仕事しながら旅行とか行きました」。しかし、十分な「学費を稼ぐのは無理だった」。アニメの専門学校はあるものの、学費が特に高い。そこで、「日本語の学校通いながら他に道を探してみようって感じで、日本語の学校に通いました」。思いはアニメにあるがなかなか思うようにはいかない。結局2年間程、下落合にある日本語学校に通った。

◇　教会のこと　◇

AZさんは日本に来てからクリスチャンになった。新大久保で声をかけられ、「メッセージとか、賛美というか歌と話が上手だったんです。こういうものがあるんだなって」。ある教会に通うようになったが、「スピリットが凄く高すぎて私が耐えられなくなって今の教会にうつった」という。韓国

系の教会にも色々あって、今の教会は大手で安心感があるという。

ただ、韓国にいる両親はクリスチャンではく、教会に対しても余りよいイメージを持っていなかった。「私は外国で生活してるし、親も結構不安な気持ちは当たり前だと思うんですけど、教会はそんな危ないというイメージのところじゃないから、私が教会を行くのを気に入らないでも、あなたがそこで教会通いながら色々な人にであって少しでも慰められたりしたらそれはいいな、と。最初そんな考えを持ってたらしいんです。で、今は認めてくれる感じ」と変化してきたそうだ。

心の支えになる教会活動だが、周りが韓国人ばかりになり、日本語をしゃべる機会がほとんど無いのが悩み。親しい日本人の友達は 1，2 人しかおらず、ワーキングホリデーの時期よりも、「今の日本語がひどくなってる」と苦笑い。

◇　病院体験　◇

AZ さんの日本滞在中の大事件と言えば「尿道結石で救急搬送事件」だろう。日本滞在も一年が過ぎ、韓国に一時帰国して両親も少しずつ AZ さんの気持ちに理解を示してくれるように成り、若干の資金の援助もしてもらったクリスマスイブのこと。新宿のしゃぶしゃぶ屋さんで楽しくやっていたときに急に腹痛がきた。

「最初トイレに行ってくるって行ったんですけど、なんかこれはおかしいなと思って、どんどん痛くなって結局動けなかったんですよ、その時。で、そこで我慢しながら汗いっぱいかいててそのまま床に座り込んでたんですけど、その様子を見てそのお店のお客さんが『大丈夫ですか？』って感じで、店員さんを呼んでくれて。で、店員さんが私の様子を見て、これはダメだなと思って救急車を。日本にいながら結構色々ありましたね」。もちろん無事だったからこそ、今は笑って話せる。

しかし、これにかかった医療費は 10 万円。学生だったので保険には入っていたものの、「すごいお金がかかってしまって、親から貰ったお金を使ってしまったんですよ…」。大事には至らなかったもののやはり大事件だった。

ただ AZ さんはこの出来事もしっかりと正面から受け止めている。「これも、私たちは教会に通ってるし、神様を信じてるから。これもなんか理由があったのかなって」と考える。そしてこんな大病をしても韓国に戻らなかったのは、「１回こういう病気というか、こういうのになって戻ったらまた来るのは無理だなって思って」という。日本でアニメの勉強をする夢はまだかなっていないからだ。

◇　地震の時　◇

マンションの 7 階に住んでいる AZ さんの部屋は、台所の皿が全部割れ、戦争の時みたいだったという。当然親も帰国するように矢のような催促があった。周りの知り合いもどんどんと帰った。3 分の 2 は帰国したという。特に子供がいる人たちの行動は早かった。「放射能が危ないから。親たちが自分は大丈夫だけど、子供が心配だからって皆帰っちゃって。私結構子供好きだから、それも寂しい…」。

しかし、AZ さんは一時的にも帰国しなかった。一度帰ったらまた来られないかもしれないと思ったからだ。「仕事も何もやってないから経済的にもあれなので、１回韓国に戻るってなったら飛行機代も結構色々かかるから。そういうこともあってまた親も『地震で放射能で、あなたは居る場所はやっぱり韓国だよ』って言われるかもしれないから…」。こんな時にも頭にあったのは、アニメをやるために日本に残りたいとと言うことだった。

◇　今後のこと　◇

一旦ビザが切れるので韓国には帰る予定だ。だがまだアニメの勉強は出来ていない。「私の気持ちとしてはここに残って日本にいながら色々これからも勉強とかもしたいし、そういう気持ちがあるから私は日本に残りたいんですけども、神様が…。でもいつかはまた来る」と考えている。だから今の希望は、「私もここでアニメの勉強ちゃんとしたいから、多分１回韓国戻って親と相談してまた大学院とか来るかもしれない」ということだ。

◇　日本の人について思うこと　◇

嬉しいことに滞在中に接した日本人には良い印象を持ったようだ。「本当親切だから皆」という。来日前と日本人の印象が変わったところもあるそうだ。「日本人の性格って曖昧な感じがあって表裏があるって聞いてここ来たんですけど、でも心が何を思っても親切なのはいいなって思って、韓国人顔とか表情見たら怖いんですよ」。笑いながら話してくれるが、「建前」でもその場で優しくしてくれるのは嬉しいと言う言葉は新鮮な感じのする一

言だった。

＜インタビュー　８８＞

SG さん（40 代・男性）「韓国語教育で広げる友好の輪」

2011 年 10 月 24 日、ソウル出身
韓国語学校経営、日本在住 15 年
インタビュアー：渡辺幸倫

新大久保でも老舗の韓国語学校を経営する SG さん。韓国語教育への道は 2002 年、ボランティアとして生徒 10 人から始まったが､現在は東京､神奈川に 5 教室､総生徒数 1400 人へと成長した。ビジネスとしての言語教育は結果として日韓の友好にしっかりとつながっているという信念の下さらなる韓国語教育の普及に取り組んでいる。

◇　来日以前のこと　◇

SG さんは 1966 年木浦でうまれた。しかし、5 年ほどでソウルに移ったため木浦の思い出はほとんど無い。「ずっとソウルで育って。普通の家庭でしたよ」。両親に弟が 2 人、姉が 1 人いた。「父さんが自分で事業をやっていたので、良いときにはお金もあったし。ないときには厳しい時期もあったりして…。そういうことがあったんですけど、別に苦労もなく。私が育った 60 年代、70 年代の韓国というのは皆厳しいところでしたから。それが普通だと僕は思うんですね」。とにかく社会的な問題に興味があり新聞が好きで、弟とは配達を待って奪い合うように読んでいた。その弟は放送局の記者になった。

大学では政治・外交学を専攻した。デモ華やかしころだ。「友達とお酒を飲むときにはほとんど政治の話ですよね。色々議論や討論をして、あとそれを実践しなければならないと思ってまたデモに行って。ただ、そういうときには自分という利己主義よりは共同体を考える。国家とか社会とか民族とか、そういう個人主義ではなく共同体を考える時間が多かったですね。そういう根本的なところは大学の時期に、根性が心の中には、そういう流れが今でもあるかと思うんです」と当時を振り返る。

卒業後にも「普通の企業には入りたくない」「せっかく学んだ政治を行かしたい」とは思っていたが、チャンスがあった。ちょうど卒業の翌年から地方自治体の首長や議員の選挙が 30 年ぶりに復活することになっていたのだ。市長や議員に立候補する人たちも「今までそういう制度がなかったので、経験もないだろうと。で、そういう人々を手助けする広告会社を作れば」と思い先輩や後輩たち 5 人で起業した。具体的にはポスターやチラシを作ったり、選挙戦略を練ったりするわけだ。しかし、「我々もお客さんも経験がないので。サービスする側も経験ないし、だからお互いに試行錯誤しながら」という状況だ。もちろん厳しかった。まさに試行錯誤しながら、地方選挙だけでなく、国政レベルの選挙も手伝った。はじめの 2，3 年は文字通り寝る間もなかったが、5 年経った頃にはずいぶんと安定し、活動を本にまとめて出版もした。ただ、そのころには SG さんは、もう十分やったという気もするようになっていた。

◇　来日へ　◇

「仕事に疲れたっていうのが背景にありますよね。で、会社人間になりたくない」と次のステップを前に考えた。ちょうどその当時知り合いが 5，6 人日本留学から帰ってきた。「皆日本は物凄くいい国だと。住みやすいところだし、日本人は親切だし本当は帰りたくないんだけど、就職先がないから帰ったと。皆同じように言ってました。しかし僕は信じられなかったんです。それまで反日教育を受けてきましたから。日本に行ったこともないし…それでちょっとおかしいなと思ったんですよね」。

それまでは留学するなら当然英語圏と考えていたし、特に日本に興味を持つ理由もなかったが、これが日本との出会いとなった。さっそく日本の本を色々と読んでみた。その中にあったのが岩國哲人の著作だ。「物凄く彼のアイデアですとか姿勢とかが評価されることがあって、本当に日本に行けば政治に関して勉強することが多いなって思ったんですね。それで地方自治を勉強するために日本に勉強に来たっていうのが経緯ですね」。それまで学び実践してきた政治と日本がつながったわけだ。

「会社を辞めて本格的に日本語勉強したのが日本に来る４ヶ月前から。図書館に毎日行って勉強して。最後の２ヶ月は文法がある程度わかったという風になったので、会話を勉強しに日本語会話初級編の学校に通ったんですね。学校に通ったときに可愛い女の人が黒板に立ってて、あれ？と思

ったんですよ。その人が今の奥さんです」。日本行きを実行する過程で生涯の伴侶とも会うことができたというのだからなかなか良い決断だったのではないだろうか。

現在の奥様は大学で日本語を専攻して日本語の先生をしていたものの日本へ留学したことはなかった。「『行きたいんだけど勇気がない』っていう。そういうところで、僕は『じゃあ一緒に行きましょう』」と誘ったが、手続きの関係で SG が先に来日した。手紙や電話で連絡を取って関係を暖め、約一年後の 1997 年に結婚した。

◇　日本語学校、大学院、そして起業　◇

1 年半ほど日本語学校で勉強する間に奥さんは先に大学院に進学。SG さんも政治学に関しては韓国でも有名だったという新宿区内の大学院に進学する。5 年間の会社時代に貯めたお金があったので、金銭的にずいぶんと助かった。資金が少なくなって来た頃からアルバイトを始めた。日系の国際電話の代理店で韓国人経営の会社だった。奥さんの奨学金などと併せて生活費にした。住居はアパートや大学の家族寮など色々なところに住んだ。節約を心がけがんばって貯蓄もできた。

そして 2002 年が来る。「日韓共催のワールドカップがあって、それでちょっとした関心が皆さん韓国に沸くところだった」。そこで、SG さんが手伝いに行っていた韓国人連合会の会で、「『韓国語をボランティアで教えましょう』という提案をして人を募集して集めて教えたんですね。そしたら意外と韓国に関心を持って勉強したいという人が多くなって。10 人くらい募集したんですけど 20 人くらい集まってですね。結局先着順で勉強できない人がでてきたんですね。それを見て、『これはビジネスチャンスになる可能性があるかな』と思ったわけです」。SG さんの学校の始まりだ。うまくいくか悩んだが、「韓国人 4000 万人の中で 80 万人くらいが日本語を勉強していたんです。その割合でいくと、日本でも何百万人か勉強するはずになるわけですね、将来的には」という大胆な読みもあった。ただ、万事順調というわけでもなかった。

「マンションを借りて、2 つ部屋を作ってチラシとかを巻いて募集してやりました。で、2002 年 6 月には人が集まらなくて、チラシを 1 万部くらい作って新聞折込に入れたら 2 人くらい入ったり」。その後インターネットでの宣伝や地味な活動で、2003 年には 150 人くらいになっていた。

2004 年。ヨン様ブームが来る。「2004 年で初めは 200 人くらいだったのが、12 月の末くらいには 400 人くらいと倍にお客さんも増えて、2005 年 6 年も人が増えて。韓流ブームで間違いなく生徒さんが増え始めた」のだ。しかし、同業他社も増えて競争も激しくなった。「開業後 5 年くらいまでは自分の仕事に対する確信というものはなかったです。不安なところでも地道に一生懸命やらなきゃいけないかなというところでやって」の一心だった。その成果もあって 2006 年には別の地域に新教室を開く。その後次々と教室を増やしていき、現在は東京・神奈川で 5 教室を構えるまでになった。「幸い、大きな利益はないんですけどみんなうまくいってますね」と胸を張る。

◇　これからのこと　◇

二つの大きな目標がある。一つは個人として実現したい目標。そしてもう一つは自分のかかわるいくつかの組織を通して実現したい目標といっていいだろう。

一つめはもちろん SG さんの始めた学校についてだ。「名門といわれるまでいい先生を確保していい環境を作って。ちゃんとしたシステムを作る」ことでしっかりと社会的に認められたいという。既に地元では韓国語学校としての評価は高いが、まだ「3 割くらいしかいってないので、残りの 7 割をちゃんと確立する」するのが目標だ。

もう一つは、SG さんがかかわるいくつかの組織と関係している。韓国人連合会や新宿区のまちづくり関係の連絡会。これらの組織の活動が「自分たちの利益のために戦うってよりも、逆に日本社会に貢献したり役に立つことをすること」によって認められるようになりたい。ここには SG さんがみてきた様々な韓国人組織にあった悩みが反映されているようだ。つまり、「自己中心でやろうとすると相手とは戦う関係になってしまう」。これではダメだ。しかし、組織の活動が「日本のために、地域社会のためにやりたいということであれば協力的にならざるを得ないですよね。そういう関係を保って、『あの組織はちゃんと必要だ』っていうような組織にするためにいかに努力していくのか、いかに変化させていくのかっていうと難しいところでもあるんですけど、でもそれが正しい目標だと思います」。

仕事を通して、組織を通して、社会とどのよう

な関係を結んでいくのか、これが課題だ。

＜インタビュー　８９＞

MG さん（20 代・女性）「読むのも描くのも、とにかくマンガが好きなんです！」

2011 年 10 月 27 日、テグ出身
専門学校生、日本在住 3 年
インタビュアー：渡辺幸倫

マンガの専門学校に通う MG さんは筋金入りのマンガ好き。子供の頃からマンガが好きで、高校生の頃には友人たちと同人誌を作っていたほど。そんな MG さんが日本に来たのは必然のことと言っても良かった。現在はマンガの専門学校で腕を磨く毎日だ。

◇　来日まで　◇

1982 年テグで 3 人姉妹の末っ子として生まれた。姉たちの読んでいたマンガを借りて読むうちに漫画家になることを決意。「高校生から日本に行ってマンガの勉強したいなって思ってて…。でも、留学するとお金すごいじゃないですか。それで自分でちょっと働いて」ということで、進学せずに一旦仕事を始める。しかし、両親に説得され大学にも通うことにした。ただ、大学選びも「マンガはどうせ一生やることだから、マンガに役立つことと思って、哲学をやりました」と徹底している。哲学を専攻すれば漫画家に必要な様々な世界観を学べると考えたからだ。日本語は第二外国語として履修したが大学での勉強には身が入らず、独自にリスニング（アニメ）を中心に勉強していた。

◇　日本語学校とマンガの専門学校　◇

2008 年に来日まずは高田馬場にある日本語学校に入る。1 年半ほど日本語をしっかりと勉強した後、念願のマンガの専門学校へ進学した。

専門学校では、マンガ作成の一連の過程を課題を通して体験的に学んでいく。マンガを描いていて困るのは言葉。「留学生って習うのきれいな言葉じゃないですか？課題でやっていた登場人物が高校生だったんですけど、『今時の高校生はそんな風にしゃべらない。大学生みたい』とかよく先生に指摘されました…」。日本語の相当流ちょうな MG さんでさえ登場人物の会話にリアリティを出すのはそう簡単ではない。結局設定を大学生に変えたり、韓国人の留学生を登場させたりしたそうだ。

◇　これからのこと　◇

もちろん漫画家としてデビューし作品を発表していくことが目標だ。その前段階として当面は自分の作品を理解してくれ、相談ができる出版社の担当がつくようになることを目指している。そのためにはより多くの人に作品を読んでもらうことが欠かせない。まずは次のページからの MG さんのエッセーマンガを読んでいただきたい。文字だけでは伝わらないものが伝わってくるようなら、それがマンガの可能性と MG さんの才能ということだろう。

＜インタビュー　９０＞

0 さん（20 代/女性）「日本と韓国の不思議な関係」

2011 年 11 月 26 日　京畿道出身
大学生、日本滞在 4 年目
インタビュアー：呉　世蓮

◇　略歴　◇

Ｊさんは高校卒業後、韓国の大学に入学したものの、1 年で休学し、日本へ語学留学することになった。最初は語学留学が目的だったが、さらに日本の大学に進学して見聞を広げ、韓国では出会えなかった学問について深めていきたくなったという。今は、新宿区にある大学に通っている。

◇　来日したきっかけ　◇

韓国の大学では、日本語・日本文学が専攻だったが、実際に日本で生活をしながら、日本語や日本の生活を学びたいと思って、思い切って留学を決めたという。

「日本語のみならず、直接日本社会に入り、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、感じることが大事だと思いました」。日本語の勉強のためには現地での生活も大事であるものの、日本人との触れ合いが一番重要ではないかと思っていたという。そのため、語学留学から、日本の大学へ進学することに決めたのである。

◇　日本へのイメージ　◇

日本人はとても親切で、他人に対する接し方が優しくて、韓国では考えられない「気遣い」があるという。あと、「人に迷惑を掛けてはいけない」。という考え方が強くて、「小さい頃から教え込まれているような気がする」。と０さんはいう。度が過ぎると息苦しそうだが、緩やかな生活の中で、他人に迷惑を掛けないように気を付けている日本の国民性にはいつも感心している。

「3.11 の大震災の時も、世界中に見せてくれた日本人の落ち着いた態度は改めて、驚きました」。人に迷惑を掛けないことや落ち着いた行動から日本人ならではの強みを感じ取れたのである。

◇　現在の勉強について　◇

現在は教育学を中心に在日コリアンについて興味をもっている。韓国に住んでいた頃には、在日コリアンの存在について全く知らなかった。「日本の大学に入学して、あるサークルに入りましたが、ここで初めて在日コリアンの友達が出来ました…」。韓国語が出来ないけれども、自分のアイデンティティを探すために必死に韓国語の勉強をして、韓国へ留学に行った在日コリアンの友達から刺激を受けたという。

「不思議といいますか、日本と韓国の関係は昔から複雑でありながら、まだお互いに知らないところが多すぎて…」。「今は、韓流によって韓国に興味をもってくれる日本の方が多いですが、日本と韓国は昔から複雑で、繋がっていそうで、繋がっていないような気がして、もっと在日コリアンについて勉強したいと思い始めました」。彼女は在日コリアンのアイデンティティについて深く関わりたく、在日コリアンのコミュニティティにも参加したり、韓国語ボランティアにも参加したりしているという。

◇　新大久保について　◇

以前は、韓国人の友達のみで新大久保のレストランに行くことが多かったが、今は日本人の友達や中国、台湾出身などの友達ともよく訪れるという。「韓国人のコミュニティは当たり前のように新大久保でよく集まったりしましたが、今は他の国の友達から新大久保に行きたいと誘ってもらっています」。新大久保のイメージが明るく変わったことはとても嬉しいことであるが、アイドルや韓流スターが韓国の文化のすべてであるように思われるのは非常に心痛いという。

◇　これからの将来　◇

現在、進路について悩んでいる０さんは、「出来れば、日本で就職したいですが、正直にまだ迷っています。韓国に帰って来て欲しいという親の気持ちもわかりますが…」。3.11 大震災後、彼女のことを心配している親のためにも韓国に帰って就職するべきか、それとも本人の意思を貫いて日本で就職をするか、または、日本の大学院に進学するかについて悩んでいるそうだ。彼女は、もし就職をするなら、「制作会社やマスコミ系の仕事をしながら、何かを作り上げて、少しでも社会に影響を与えるようなものを作りたいです」。という。日本と韓国は地理的に近いものの、まだお互いに知らないところが多いため、今よりもっと分かち合えるような関係を作り上げたいという気持ちから、マスコミ系の仕事に就きたいようだ。

＜인터뷰　９１＞

KH씨（40세 ・남성）「격동하는 신오오쿠보 거리를 몸소 느끼면서 – 한국인 사회에서 일본인과의 교류가 심화되어가는 사회로-」

2011년11월28일, 부산광역시 출신
일본체제 8년째
인터뷰 담당 : 이 호현

◇　일본에 오게되는 계기　◇

부산에서 태어난 KH씨는 고등학교를 졸업한 후, 군대에 입대한다. 그곳에서 군대 선배로부터 일본에 관한 다양한 이야기를 듣게 되고, 일본에 갈 결심을 하게 되었다고 한다. 그래서 군대를 제대하고 나서, 6개월간 일본어를 공부하면서 일본에 갈 준비를 하게된다.

여비로는 달랑 4만엔을 가지고, 일본어 학교 학생으로 일본에 왔다고 웃으면서 이야기 했다. 하지만 이틀 후에는 일본업체에 옷을 납품하는 재일교포가 경영하는 회사에 아르바이트 생으로 일하기 시작했고, 동경 지리도 잘 모른체 혼자서 운전해서 백화점에 납품하는등, 처음부터 산업현장에서 뛰었다고 하니 놀라울 따름이다.

그 뒤, 염원하던 동방음악학교에 진학해서, 음향 공부를 시작하지만, 음향 공부쪽이 경제적으로도 비용이 많이 들고, 한 전문인으로 자리잡기까지 끝없이 먼 길을 걸어야 하는 등의 이유로, 결국 학업을 포기하고 한국으로 돌아갔다고 한다.

그리고 사업파트너와 함께 사업을 시작하게 된다. 하지만 아쉽게도 일년뒤에는 IMF금융위기로 인해 사업을 접어야만 했고, 다시금 일본으로 오게 된다.

두번째의 일본은 시모키타자와에서 정사원으로 취직해서, 한일간을 빈번히 출장을 오가며 하는 일이였다. 그리고, 동양대학의 국제학과에 진학해서, 다시금 학업을 하던 중에, 어머니께서 암 선고를 받으셨고, 아들로서 온 일본의 유명하다는 병원을 찾아 헤메며, 여러 치료법과 대체요법 등을 조사하러 다녔다고 한다. 그러면서, 학업을 그만두게 되었지만, 효성스런 아들의 모습을 읽어 낼수 있었다.

◇사업을 기획하며, 그 관련 업무상 신쥬쿠로◇

일본에 와서, 여러가지 경험을 했지만, ＩＴ 관련의 공부를 위해 새롭게 전문대학에 입학하게 된다. 학업을 마친 후에 전공을 살려서 샐러리맨으로 취직해서 2년간 일한 후 독립했다고 한다. 지금의 「한인 생활 정보지」라는 신문을 만드는 일을 시작하게 되었다. 재일본 대한민국 민단의 중앙 본부로 부터 수주 받는 일이 많았던 관계로, 처음의 닛뽀리에서 신쥬쿠로 거점을 옮기게 되었다. 그것을 계기로 뉴커머들의 생활거점이 되고 있는 신쥬쿠를 피부로 느끼며 살게 되었다고 들려주셨다.

KH씨는 이민의 역사에 대해서 다음과 같이 말했다. 대략적으로 재일교포의 역사와 뉴커머의 역사로 나뉠수 있다. 그리고, 재일 교포들은 야끼니꾸와 빠찡코 등과 관련된 일들을 주로 했던 것에 비해, 뉴커머는 카부끼쵸를 중심으로 유흥업, 비디오 대여점, 식당, 유학생들의 이사 등으로 파생되는 사업에 관련된 일을 하면서 생계를 이루고 있는 분들이 많다고 말한다. 정말로, 수요와 공급이 잘 매치되어 있는 곳이 신쥬쿠, 신오오쿠보라고 하면서.

2000년대에 들어서면서, 한일 월드컵 공동개최와 함께, 한류 붐이 더욱 박차를 가하게 된다. 신오오쿠보 거리는 일본인 손님이 7할 이상을 차지하는 현상을 보이게 되었다고 설명했다. 지금도 K-POP을 포함해서, 많은 한국 관련 상품들과 식품들이 인기를 얻고 있고, 이러한 사회현상은 침체되지 않고 당분간은 계속될 것으로 예상한다고 했다.

2000년대 부터 시작된 , 신오오쿠보의 이러한 변화들을 바로 옆에서 보며, 피부로 느끼며 생활했던 KH씨이다. 하지만, 본인의 사업에도 많은 영향을 받고 있는 듯 하다.

◇ 한인 생활 정보지를 만드는 일과, 뉴커머들의 교류의 장을 꿈꾸며 ◇

2004년부터 한국인을 위한 정보지를 만들게 되었다고 한다. 사업을 시작한 당시는, 거래처의 70%이상이 한국 회사 였다고 한다. 그 외, 일본 거래처로는 KDDI등 국제전화 회사, 행정서사, 이또우츄우(伊藤忠), 마루베니, 이사 관련 회사 였다.

하지만, 인터넷이 보급되면서, 광고시장은 크게 타격을 받게 된다.

말하자면, 한국인 뉴커머들에게 의존해 왔던 부분들이, 일본의 주류사회로 눈을 바꿔, 사업전환을 하지 않으면 안되게 된 것이다. 많은 유학생들도 일본회사를 대상으로 취직활동을 해야만 했다. 물론 한국인이 설립하는 회사도 많아져서, 워킹홀리데이 비자로 일본에 오는 학생들도, 비자 기간이 끝나면서 각자의 분야를 살려서 일본에서 취직을 하는 기회를 얻는 케이스도 많이 있다고 한다.

즉, 특정 소수자를 대상으로 해 왔던 시장이, 불특정 다수자를 대상으로 하는 시장으로 변화한 것이다. 정보의 다양성과 지식의 다양성, 일본인과의 관계에 있어서의 중요한 부분들을 몸소 체험했다고 말한다.

유학생에서 샐러리맨, 그리고 사업가로 변신해 온 KH씨 본인의 지금까지의 일본의 경험들을, 앞으로 일본에서 생활을 시작하는 후배들에게 조언해 줄수 있는 「교류의 장」이 필요함을 절실히 느낀다고 한다. 물론 지금의 하는 일과도 많은 관련이 있겠지만, 무엇보다, 새롭게 일본에 오는 후배들 누구나가, 자신이 걸어온 길(실패한 경험들을 포함해서)을 반복하는 것을 보면, 조금의 조언이 얼마만큼 큰 힘이 될지를 알기 때문이라고 한다. 그 만큼의 시간 절약이 가능하기 때문이다.

그리고, 인간관계를 형성해 나가는 것에 있어, 인내하는 것의 중요성을 조언해 줄수도 있고,

중재 또한 가능하기 때문이다.

물론 본인 또한 경험을 쌓은 한국인 선배로부터, 일본인 지인들로 부터, 한마디 조언을 얻음으로 인해 더욱 활약할수 있었다는 것을 알기 때문이라고 덧 붙였다.

◇ 자녀의 교육방침에 관해서◇

일본에서 태어난 KH씨의 자녀들은 일본의 보육원에 다녔다. 그리고 학교에 입학을 앞두고 여러가지 고민 후, 한국학교를 선택했다고 한다.

그 이유로 제일 먼저, 자신과의 정체성의 공유를 들었다. 일본어로 교육 받고, 일본적인 사고방식을 가지게 되면, KH씨 본인과는 다른 방법으로 사고하는 의식을 가지게 되는 것으로, 결국은 부자간의 거리가 점점 멀어져가는 것이 아닐까 하는 것을 염려한 까닭이라고 한다.

그리고 일본의 일관성 있는 행동양식에 비해, 역동적인 한국식 행동양식이 자신의 과거 모습과도 겹쳐져, 그 생각들을 공유하기 쉽다고 한다.

마지막으로, 일본의 소학교와 달리, 한국학교는 초등과정부터 이머젼(Immersion) 프로그램을 도입한 영어교육에 중점을 두고 있는 점이 매력적이라고 한다. 일본의 공립학교에 자녀를 보내면서, 따로 영어교육을 시켜야 하는 광경을 보았기 때문에, 한국학교에 보내면 학교에서 충분히 영어학습을 하기때문에 따로 학원에 보내야할지 말지에 대한 염려는 하지 않아도 된다고 했다.

한편, 자녀가 보육원의 친구들과 헤어져, 한국학교에 가는 것을 별로 달가워 하지 않았다. 그때, 「한국학교에 가면, 너랑 같은 성을 가진 친구들이 많이 있어」라고 하자, 그 즉시 한국학교에 가겠다는 결심을 해주었다는 에피소드도 들려주셨다. 자녀들이 성장하면서, 자신이 주위와 다른 점(지금까지 보육원에서는 자신만이 성이 특이하고, 한 문자로 된 성을 가진것)에 대해 조금씩 의문스러워하고, 고민하는 것이 많아진 것을 한번에 해결 할수 있게 된 것이다.

한국학교에서의 운동회 때의 광경에 대해서도, 옛날 자신의 운동회를 떠 올릴 정도로 즐거운 한때 라고 했다. 운동회 날에도 급식을 먹는 일본의 초등학교 모습이랑은 달리, 한편으로는 무질서해 보이기도 하지만, 그 속에서 즐겁게 부모자녀간의 애정 넘치는 광경이나 추억 들이 많이 만들어 지는 운동회 라고 하시는 말씀을 통해서도 한국학교에서의 교육에 만족하고 있다는 것을 느낄수 있었다.

물론, 일본의 노비노비 교육방침도 매력적이지만, 무엇보다 부모자녀간의 정서 공유가 우선이라는 말씀에서 자녀에 대한 애정과 기대를 엿볼수 있었다.

사업가로서 부모로서, 새로이 일본에 오는 뉴커머들에 대한 염려를 아끼지 않는 인생의 선배로서 많은 배움과 다양한 생각들을 나눌수 있는 귀중한 한 때 였다.

＜インタビュー　９１＞

KH さん（40 代 ・男性）「激動する新大久保の街並みを肌で感じながら生きる」

―韓国人コミュニティから日本人との交流が深まるコミュニティに―

2011 年 11 月 28 日　釜山広域市出身

日本滞在 8 年目

インタビュー担当：李 坪鉉

◇ 日本に来るきっかけ ◇

釜山生まれの KH さんは高校卒業後、軍隊に入る。そこで、軍の先輩から日本のことに関して色々な話を聞き、日本に行く決心をしたという。軍の義務を終えてから、6 ヶ月間日本語を勉強しながら、来日の準備をしたそうだ。

手持ちの 4 万円を持って日本語学校の学生として来日したと笑いながら言う。しかし、二日後には、日本の業者に服を納品する在日の経営者の会社にアルバイトとして働き始めたそうで、道(都内地理)もよくわからないまま、自ら運転して百貨店に納品するなど、最初からバリバリ現場で働いたというのは驚きだ。

その後、東邦音楽学校に進学し、念願の音響の勉強を始めるが、勉強のための長い道のりと経済的なことも重なり、勉学をあきらめ、韓国に戻った。そして、事業パートナとともに事業を始める。しかし、1 年半後には IMF 金融危機によって事業をたたむこととなり、2 度目の来日をする。

2 度目は下北沢で正社員として就職でき、日韓を頻繁に出張しながら仕事をこなす。そして、東洋大学の国際学科に進学し、勉強している最中、母親の癌の宣告を聞き、代替療法など、いろいろな治療法をめぐり、日本中の良い病院を訪ね回っ

たという。したがって、学業はあきらめることとなった。その話から親孝行である一面がうかがえた。

◇　事業を企て、その関連で新宿に移る　◇

来日して、いろいろな経験があったが、ＩＴ関連の勉強をするため、改めて専門大に入る。学業が終わった後、就職し、サラリーマンとして２年間働き、独立したそうだ。今の「韓人生活情報誌」という新聞を作る仕事を始めたという。在日本大韓民国民団の中央本部から多くの仕事を受注してくる仕事柄、日暮里から新宿に拠点を移ることとなる。そこで、ニューカマーの生活拠点となっている新宿を肌で感じるようになったと振り返っていた。

KH さんは、移民の歴史について、次のように語った。大まかに、在日コリアンの歴史とニューカマーの歴史に分けられる。そして、在日コリアンは、焼肉屋、パチンコ屋などに関わる仕事をしていたことに対して、ニューカマーは、歌舞伎町を中心に遊興業店、ビデオ屋、食堂、留学生の引越しなどから派生される事業に関わりながら、多くの方が生計を立てていた。

まさに、需要と供給がうまい具合にマッチしていたところが新宿、新大久保だという。そして、2000 年代に入り、日韓ワールドカップ共催もあり、韓流ブームは拍車をかけることになったと説明していた。　新大久保の街に日本のお客さんが７割以上を占めるという現象が起きたと話した。今も K-POP を初め、多くの韓国グッツと食品が人気を得ていて、この社会現象は治まる気配なく、当分は続くそうだ。

2000 年代から始まった、新大久保のこれらすべての変化をそばで見て、肌で感じてきた KH さんは、本人の事業にも多くの影響を受けているようだ。

◇　韓人生活情報誌を作る仕事から、ニューカマーの交流の場を夢見ながら　◇

2004 年から韓国人のための情報誌を作ることとなる。事業を始めた当時は、取引先の 70%が韓国の会社だったそうだ。　そのほか、日本の取引先は、KDDI など国際電話会社、行政書士、伊藤忠、マルベニ、引越し関連会社だったという。

しかし、インターネットが普及し、広告市場は大きく落ち込むこととなる。

言い換えれば、韓国人ニューカマーに依存してきた部分から、日本の主流社会に目をむけ、事業転換していかなければならなくなったのだ。多くの留学生も日本の会社を対象に就職活動をしなければならなくなる。もちろん、韓国人が設立する会社も多くなり、ワーキングホリデービザーで日本に来た学生さんたちが、期間終了後に日本で就職するケースもよく見当たる。

つまり、特定少数者を対象にしていた市場が、不特定多数者を対象にする市場へと変化していた。情報の多様性と知識の多様性と日本人との関係を築くことにおける重要な要素とその大事さを自ら体験したと語ってくれた。

留学生からサラリーマン、そして、事業家になった本人のこれまでの日本での経験などを、これから日本で生活し始める後輩にアドバイスしてあげる「交流の場」の必要性を感じているという。もちろん、今の仕事柄、自然にそのような考えを持ったのもあるが、なにより、新たに日本に来た後輩ら誰もが、自分が歩んできた道（失敗した経験を含め）を繰り返していることを見ると、少しのアドバイスがどれほど大きな助けになるかを知っているからこそ、より「交流の場」の大事さを感じている。その分の時間節約につながるからだという。そして、人間関係を作っていく上で忍耐することの大事さなどをアドバイスしてあげられるし、仲裁に入ることもできるからだという。

もちろん、本人もより経験を積んでいる韓国人の先輩から、そして、日本人の知人から、一言助言してもらえることから、より活躍できることを知っているからだと付け加えた。

◇　子どもの教育について　◇

日本で生まれた KH さんの子どもたちは、日本の保育園に通わせた。そして、就学の際には、いろいろと悩んだ後、韓国学校を選んだという。その理由として、真っ先に、親(自分)とのアイデンティティの共有をあげた。日本語で教育され、日本的な思考方式を持つこととなると KH さん本人とは異なる方法で、思考する意識を持つこととなり、親子間の距離が広がるのではないかとその点を心配したためだ。

そして、日本の一貫性のある行動様式に対して、躍動性ある韓国式の行動様式のほうが、自分の過去の姿と重なってその思いを共有しやすいと話す。

最後に、日本の小学校と異なって、韓国学校は小学校からイマージョンプログラムを導入した英

語教育に重点をおいていたことも魅力だったという。日本の公立小学校に子どもを通わせる親たちは、別に塾に通わせながら英語教育をさせていた光景を見ていたので、韓国学校に通わせることで、学校で十分な英語学習ができるので、塾通いの心配はないと付け加えていた。

一方、子どもが保育園の友だちと別れ、韓国学校に行くのをあまり好まなかった。そこで、「韓国学校に行けば、同じ苗字(今までの保育園では自分だけ一文字の異なる苗字を持っていたことから)を持つ友だちがたくさんいるよ。」と話したら、即座に韓国学校に行くと決心してくれたとエピソードも話してくれた。子どもが成長しながら、自分が周りと異なる点に少しずつ悩むことが増えていたことの解決になったという。

韓国学校での運動会の光景についても、昔の本人の運動会を思い出せる楽しいひと時だと言っていた。運動会の日にも給食を食べる日本の小学校の光景とは異なり、一見、無秩序にも見えるが、その中で楽しい親子の愛情あふれる光景と思い出いっぱいの運動会だと言う話から、韓国学校での教育に満足していることが伺えた。

もちろん、のびのびという日本の教育も魅力的だが、なにより、親子の共有する情緒が優先だという話から、子どもへの愛情と期待が伺えた。
事業家であり、親であり、新たに来日するニューカマーへの心配を惜しまない人生の先輩として、たくさんの学びと多くの考え方を分け合う貴重なひと時であった。

＜インタビュー　９２＞

PU さん（30 代・女性）「ハーフであることに誇りをもって育ってほしい」

2011 年 12 月 2 日、ソウル出身
主婦、日本在住 14 年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴 ◇

PU さんは、1973 年、5 人姉妹の末っ子としてソウルで生まれた。PU さんの友人には、5 人兄弟も珍しくない。ただ、たいてい 5 人目は男の子だ。「うちはママが失敗した」と笑う。PU さんの父親は、ソウルで日本食のレストランを経営していた。日本食はどちらかというと高級なイメージがあり、一般のお客さんよりも接待などで利用されることが多く、店も繁盛していた。ところが、PU さんが中学 1 年の時、バイクを運転していた父がバスと衝突し、亡くなってしまった。その過失責任を問う訴訟が 7 年も続き、結果は五分五分で結審した。母は裁判費用と父の入院費用を捻出するのに不動産を売却し、レストラン経営の責任を負うことになった。長女がまだ大学 2 年生で、末っ子の PU さんが中学に入ったばかりだった。

PU さんはソウルにある大学で社会体育を専攻し、卒業後、スポーツジムのインストラクターとして働いた後、1997 年に来日した。日本語学校を経て都内の大学を卒業し、知人の貿易会社で働き、32 歳の時、日本人の夫と結婚した。現在は、4 歳と 3 カ月の二人の子どもの育児に専念している。早いもので来日して 14 年になる。子どもが小さいこともあるが、韓国にはあまり帰らない。親友と呼べる友人はみな韓国にいるので、帰るとホームシックになるからだ。

◇　母への思い　◇

PU さんは父が亡くなった後の母親の苦労を見てきたので、強くたくましい母親を女性としても尊敬している。母親は1940年代の生れで、「文子」という日本名もあった。日本語は話せないが、単語はかなり知っている。母の夢は、学校の先生になることだった。しかし、祖父が女の子にはそこまでの教育はいらないという考えだったため果たせなかった。それでも、母の年代で高校を卒業した女性は少ないので、当時にすれば高学歴だ。PU さんの家では 5 人の娘たち全員が大学を卒業した。女の子にも教育が必要だという考え方には、母親のもっと勉強したかったという思いが反映されている。

英語の通訳もできた祖父は、戦前、日本の大学に留学した経験もある。そのためか、祖父はキムチより日本の漬物が好きで、家でも沢庵を漬けていた。小さい頃から日本食に馴染みのあった母も、おしんこの盛り合わせやぬか漬け、沢庵が好物だ。時々日本に来る母には、色々とこだわりがある。買い物は「京王デパートはおばさん臭いから、伊勢丹じゃないと嫌だ」とか、「羊羹はとらやのじゃなくて、高島屋の栗入りのがいい」など。今年、次男の出産見舞いに来てくれた時も、沢庵 15 本と高島屋の栗入り羊羹をお土産に持って帰った。最近はソウルでもデパートなどで沢庵が売っているが、日本のものとは歯ごたえが違うのだと言う。

出産後間もない PU さんの代わりに空港に見送りに行った夫は、機内持ち込み荷物の重量超過で 3 万円も支払うことになったと言って笑った。母親がそういうわがままを言ってくれるのは元気な証拠。それが嬉しい。

◇　日本へのあこがれ　◇

PU さんの中学時代の友人の中に、親戚が日本でパチンコ店を経営している人がいた。その友人は高校を卒業すると日本の大学に進学し、帰国する度に日本の話をしてくれた。もう一人、PU さんに影響を与えたのは、高校の友だちのお姉さんだ。日本に留学していたので、帰省のたびに日本から様々な録画ビデオを持ち帰り見せてくれた。PU さんには、アニメよりも「東京ラブストリー」や「高校教師」などドラマの方が面白かった。ドラマと一緒に録画されている CM もとても新鮮に感じたのを覚えている。PU さんは、高校では第二外国語に日本語を選択した。

とはいえ、日本に留学するとは思っていなかったし、できるとも思っていなかった。なぜなら、母親は、「留学するならアメリカでしょ」という意見だったし、周囲もアメリカンドリームへの憧れが強く、日本語より英語を勉強した方が良いと考える人が多かった。それに加えて、「日本は危険だ」という印象もあった。というのは、ドキュメンタリー番組で日本で水商売をする韓国人女性が取り上げられたりしていたため、「日本に行くと勉強しないで、違う方向に行ってしまうんじゃないか」と心配する人たちもいたからだ。

韓国で段階的な日本文化の開放が始まったのは 1998 年だが、実は、それ以前から留学生が個人的に持ち込んだものを見たり聞いたりする機会は結構あった。また、公式には禁止されていたものの、繁華街では違法コピーが売られていて、中高生でも買うことができた。心の中にあった日本への漠然とした憧れが、日本へ行きたいという強い思いに変わるのは、大学を卒業して働き始めてからだった。留学センターに通い、1 年かけて留学の準備をした。

◇　結婚への思いがけない展開　◇

PU さんが来日したのは 23 歳の時だったので、大学卒業時にはすでに 29 歳になっていた。卒業後、知人の台湾人が経営する貿易会社に就職した。しかし、暫くするとこのまま日本にいてどうなるだろうと、先の見えない不安感にとらわれるようになった。母親に相談すると、四女のいるアメリカへ行くことを勧められ、そのつもりでニューヨーク行きの航空券も購入した。渡米前は、世話になった人たちへの挨拶や送別会で忙しかった。その中に T さん（後に結婚）もいた。それまでのお礼を言うつもりで連絡したのだが、そこから、まったく予想外の展開が始まった。T さんから結婚を前提に付き合ってほしいと言われたのだ。

T さんとは、大学の同級生を通じて数年前に知り合った。T さんとの年齢差は 2 歳だったが、年下で、しかも一緒に飲み会をしてもほとんど話しをせず、いつも聞き役に回る T さんは PU さんにとって「対象外」の存在だった。だから気楽に「今度、アメリカに行くから最後に会おう」と言えたのだ。T さんには最初に会ったときにメールアドレスを聞かれて教えたが、実際にメールを受け取ったのは半年くらいたった頃だった。それはメールアドレスを聞いたらその日のうちにメールをしてくるのが「常識」の韓国ではありえないことだった。何度か会ったが、話すのはいつも PU さんで、T さんはほとんど自分のことを話さない。そのため、PU さんは T さんを専門学校の学生だと思っていた。この時初めて、「何の勉強をしているの？」と聞いた。今では笑い話だが、T さんは医学部の学生だったのだ。PU さんの常識からすると、信じられないくらい間延びしたペースの連絡は、国家試験の準備などで忙しかったためらしいが、「告白して断られたら会えなくなってしまうのが怖かったから」という友人情報の方が真相に近いかもしれない。思いがけない展開だった。でも、口数は少ないものの、どこか芯の通った T さんのことが、PU さんには次第に頼もしく見えてきた。

◇　結婚への障害　◇

二人の気持ちは結婚に向けてしっかりと結ばれたが、結婚までの道のりは険しかった。最大の障害は T さんの両親が二人の結婚に反対していたこと。「一番の理由は、私が外国人だったからでしょう」。T さんの父親は病院を経営し、母親はそこの薬剤師。長女も小児科の医師で次女は弁護士、T さんの双子の弟も医師という、スーパーエリート家族と言ってよい。それなりに期待する「長男の嫁」像があったのかもしれない。T さんが PU さんと付き合っていると伝えた後も、母親がお見合い写真を持って T さんの職場に来るという状況だ

った。どこかの時点で、T さんは家族の説得は諦めたらしい。しかし、その間のことは今も PU さんには詳しく話してくれない。話せば PU さんを傷つけることになるからだ。PU さんの母親も、相手の親に望まれない結婚をして娘に苦労をさせたくないという意見だった。

それでも二人の結婚の意思は変わらない。そこで PU さんと T さんは、まず、韓国で結婚式を挙げることにした。もちろん T さん家族の出席はなかった。すでに 32 歳になっていた娘のことを気遣った母親は、子どもは早く生んだ方がいいと助言した。そして間もなく長男が誕生。ところが、日本での結婚手続きが終わっていないため、生れた子どもを T さんの戸籍に入れることができず、ひとまず、PU さんの籍に入れることになった。「その時は悲しくてすごく泣きました」と PU さん。慌てた T さんは日本での婚姻手続きを終わらせ、子どもを T さんの戸籍に移したが、実は、そのことを両親には告げていなかった。ある日、必要があって戸籍を取り寄せた両親は、そこで初めて息子の結婚と孫の誕生を知ることになる。「ほんとに頭にきました」という T さんの両親の気持ちも分からないではない。

この騒動のおかげで、初めて PU さんは T さん家族と一緒に食事をすることになった。無口な T さんとは正反対に色々と話してくれる PU さんと、何より可愛い盛りの 1 歳半の孫に会ってしまえば、それまでのいきさつは氷解してしまう。今では、義理の母から「お父さんはお酒を良く飲むので、ボケちゃうかもしれないのでよろしくね」、と言われるまでになった。頼られていると思うと嬉しい。

◇　日本での親友　◇

PU さんの日本での親友の K さんは、4 年前に韓国に帰った。彼女は、不法滞在だった。色々な事情を抱えて日本に来る韓国人がいることは事実。でも在留身分だけで悪い人、と決めつけて欲しくない。K さんは裕福な家の生れだったが、父親が保証人をしていた人の多額の借金を背負うことになり一変した。K さんが来日したのはその借金を返済するためだった。お酒が飲めないこともあり、K さんは水商売には入らず、焼肉レストランなどで一生懸命働いて家族に送金していた。上品な雰囲気があり明るい K さんは、不法滞在者には見えないので、一度も職務質問を受けることなく長期間滞在することができた。二人でよく新宿のドンキホーテに買い物に行った。一緒にお茶をする時は、PU さんが支払ったが、PU さんに対して「貴方はいいよね」とか、「私の人生って何なんだろう」といった話をすることはなく、二人でいると話題が尽きなかった。

ある日、彼女は父親の借金を返したから韓国へ帰るといい、自分で入管に出頭して帰国した。彼女が帰国する時は、長男を妊娠中で十分なことをしてあげられなかったことが悔やまれる。彼女とは今も連絡を取り合っている。でも、離れていると心が離れる。だんだんと話が合わなくなっていくのが淋しい。今は心から、彼女にも幸せになって欲しいと願っている。

◇　子どもへの思い　◇

最初、子育ては大変なので子どもは一人だけでいいと思っていた。でも親は先に亡くなる。その時に助け合う兄弟がいた方が心強いだろうと二人目を生むことにした。長男には 2 歳になった頃から家では韓国語で話しかけるようにしている。幼稚園に迎えに行くと日本語で話しかけてくるので、「韓国語も上手でしょう」って誉めてやると、「うん」と言って韓国語に切り替える。親が韓国人であることを恥ずかしいと感じるようになる子もいるので、今から「ママは韓国人だから、ママとは韓国語で話そうね」と、子どもがそれを当たり前のこととして受入れるように心がけている。

夫は小さいときから医者になるために大きなプレッシャーをかけられて来たので、子どもはのびのび育てたいと言う。だから英語やスイミングはいいが、公文は小さい時にやらせても意味がないという考え方で、PU さんとは教育方針が食い違うところもある。これから二人で話し合っていきたいという。子どもたちにはハーフであることを恥ずかしがらずにのびのびと育ち、日本社会に貢献できる人間になってほしい。できれば一人は医者になってくれればいいと思っていると締めくくった。

＜インタビュー　９３＞

L さん（30 代、女性）「突然始まった日本生活」

2011 年 12 月 6 日　ソウル出身
主婦、日本暦 4 年目
インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇　ある日始まった日本生活　◇

L さんは 1972 年生まれの 30 代主婦で新宿の隣区に夫と娘二人と住んでいる。仕事関係で夫が先に日本に来て、後から娘を連れて合流した。夫は韓国で IT 関係の仕事をしていたが、日本の仕事も長くやっていて、時々日本に出張に行っていた。2008 年、L さんが日本に仕事で短期滞在していた夫を訪ねに来た時に、夫から日本のほうが仕事をやりやすいので、日本で仕事をしたいと言われた。全然そのつもりではなかったので戸惑ったが、家族はやはり一緒に住むのが良いと判断して、1 週間で韓国の生活を整理して来日することになった。

何も準備もなく突然始まった日本での生活で助けになったものは現在通っている教会だ。部屋探しから契約、幼稚園探しなどでは通訳をしてもらい、必要な家電製品も教会の人からもらったりして、本当に助かった。韓国でも教会に通っていたので、日本にくる前に探した。現在住んでいるアパートも教会から近いところで生活の多くが教会と関わっている。

◇　日本語で苦労　◇

日本に来る前から、海外に住みたいと思っていた。夫は海外就職のために、国際的に通用する IT 関連の資格を取得していた。アメリカに行こうかと思っていたが、日本に来るとは思わなかった。だから、日本語も全然勉強しないまま日本に来るようになった。日本語は現在住んでいる自治体でやっている日本語教室に通いながら勉強している。週一回行っているが、小さい子供がいるので毎週は行けない。最初は日本語の勉強をしたが、最近は勉強よりボランティアの方の話を聞いてあげる時間が長い。ボランティアの方々は普段の生活が寂しく話し相手がいないようで、日本語の勉強よりおしゃべりを楽しんでいるようだ。でも聞く練習にはなる。

日本語の生活に不便はないが、細かいことまで表現できずもどかしさを感じる時もある。もっとも苦労したのは幼稚園、保育園、小学校からもらうプリントの解読と返信だった。準備物リストの「箸」が何かを調べるのに苦労したのを覚えている。夫が手伝ってくれたりもするが仕事から夜遅く帰ってくる夫に頼むのも限界があるし、仕事用語と違って慣れない日常生活の日本語は難しく大変だ。最近は保育園の連絡帳は書かないで毎朝口頭で伝えている。最近はスマートフォンを使って即座に辞書で調べられるので少しは楽になった。

5 才、2 才だった娘は現在、小 3 と保育園の年長になった。韓国でハングルを覚え始めた頃に日本に来た長女は、突然の環境変化が原因だったと思うが、しばらく言葉を発しなかった。ところが、長女と一緒に新大久保に行ったある日、町のハングル看板や周りから聞こえる韓国語を聞いて「すっきりする！」と言ったのが印象的だった。しばらく言葉を発しなかったのは急に日本語環境に変わって戸惑っていたのが原因ではないかと思った。長女は来てすぐ幼稚園に通うようになったが、長い時間かけてできていた仲間集団に入れず、仲間はずれがひどかった。小学校に入学した時は、幸いにも初めて出会う子が多く幼稚園のような仲間はずれはなかった。

家では韓国語を使っていて、長女は問題ないが次女は少し難しいようだ。長女も日本に来る前はハングルを正確に書けたのが最近はよく間違える。週末に教会の民族教室で韓国語と韓国文化について学んでいる。

◇　合理的だが「ドライ」な日本社会　◇

日本は韓国より合理的だと思う。韓国のように声が大きい人が勝つみたいな不合理はあまりないと感じる。だが、細かいことまであまりにも長い時間をかけるところはどうかと思う。たとえば、幼稚園の卒園の時、子供たちにあげるプレゼントを決めるのに、韓国ならすぐ決められるようなことも何回も会議を繰り返した。また、状況の変化に柔軟に対応できない。予期せぬ状況の変化によって事前に決めたことに柔軟な対応が必要になった時に、どうすれば良いかわからず慌てるのをたびたび目撃した。

日本の人間関係は韓国より「ドライ」かもしれない。人との関わりを「面倒」と思って、小さい子供さえ口癖のように「関係ない」、「無理」と言うのをみて違和感を覚える。自分の子供には「あなたによって周りが良くなるようにして」と普段から教えている。

韓国人のほかに、日本語ボランティアの方と同じマンションの住民数人とは付き合いがある。周りの日本人は韓国のことについて好意をもっている印象を受けるが、日本生活が長い韓国人

の話によれば、韓流の影響で日本人と付き合いやすくなったとようだ。以前は電車の中や、町を歩いている時も「ニンニクくさい」と露骨にいやがることもあったそうだ。

◇　新大久保について　◇

新大久保は韓国の食材を買うためにたまに行く。また付き合いのある日本人と食事しに行ったりする。日本生活 4 年のなかでもこの 1 年がもっとも賑やかなのではないかと思う。そのせいか、あまりにも人が多くて狭く感じる。また、たまに韓国人の悪いマナーが気になることもある。ところが、新大久保にくる日本人が、歩きながらガムをかんでそこらへんに捨てるような、韓国人と同じようになることも見受けられて、反省しなければと思う一方でおもしろいと思ったりもする。一つ、新大久保が留学生やワーキング・ホリデイで来ている韓国人の若者が節制なく夜遅くまで遊ぶ場所になっているのが気になる。

◇　将来も日本で　◇

これからも日本に住みたい。夫は現場で実務をやるのが好きで日本がいいという。韓国では 40 代になるとマネージャーをやらないとならないが、日本は実務が好きならば歳をとっても働けるので、夫にあうようだ。また、韓国のように、子供が小さい時から勉強に追われないのも良い。いま通っている教会には小学 5 年から高校までのインタナショナル・スクールもあって、子供の教育についても心配していない。子供たちが将来どこで生活するかはそれぞれが決めることで特にこだわらない。日本と韓国は、それぞれ良い点もあれば、良くない点もある。絶対的にどこが良いとはいえない。今は日本生活に慣れているし、ここで何とかやっていきたい。

＜インタビュー　９４＞

Ｉさん（30 代・女性）「日本で子育て、異文化を生きる」

2011 年 12 月 10 日、釜山出身
学校教師、日本在住 7 年目
インタビュアー：藤田ラウンド幸世

◇　略歴　◇

I さんは 1974 年生まれ。釜山に生まれ、小学校から大学までの学校教育を地元の釜山で受け、大学卒業後はソウルで就職する。大学では数学を専攻。日本語は、高校の時から第二外国語として選択し、大学でも、第二外国語の中で日本語を選択して、勉強を続けてきた。結婚後、夫の仕事で来日をし、7 年が過ぎた。日本では、家族 4 人で新宿区に住む。

◇　出身地での大学生活　◇

日本という国を意識したのは、小学校のときにさかのぼる。

高校に入学した時、第二外国語として日本語を選択することにした。その後、大学に入学したときも、第二外国語の選択肢として他にドイツ語やフランス語がある中で、I さんは迷わず日本語を選んだ。大学時代、I さんは日本のアニメが特に好きになり、宮崎駿の「となりのトトロ」などを見ていた。

大学での専攻は数学だったが、その頃は、将来、数学の教師になるのがいいかもしれないと考えたこともある。大学在学中に、アルバイトとして塾で数学を教えていて、その時に教えることが楽しいと思ったと今では振り返ることができる。これが、現在、教師として再び教えていることと関わりがあるのかもしれない。

I さんが大学を卒業した当時は、韓国内でベンチャー企業が一気に増えた頃だった。I さんも大学卒業前にベンチャー企業に就職が決まり、ウェブデザイナーとして、ソウルの会社で働くことになった。

◇　結婚、出産後、日本に家族で住む　◇

大学では日本語は第二外国語の科目として勉強をし、大学 4 年生になった時もまだ、専攻の数学とは別に、独学で日本語の勉強を続けた。その頃は、日本で出版されている、日本語を勉強するための雑誌を使って勉強をしていた。この雑誌を通じて、現在の夫と出会う事になる。夫は韓国人だったが、日本で教育を受けていたので日本語でやりとりをするようになった。後に、この男性と韓国で結婚式を挙げる。

結婚後、夫の就職が日本で決まり、家族で日本に住むことになった。そのときには、子どもがいたので、I さんとお子さんの二人は、先に日本に

住んでいた夫が準備をしたアパートに引っ越し、日本での生活を始めることになった。この来日以前に、I さんは大学生の頃、旅行で約一カ月間、日本に来たことがある。その時は、日本は韓国と変わらないという印象を持ったことを覚えている。

しかし、二度目の来日は、旅行ではなく、家族で住むためだったので、生活という点からみて、一番困ったのは日本のアパートが寒くて困ったことである。韓国の方が、オンドル(床暖房)のような設備があり、その点では韓国の方がいいと感じた。また、子どもの幼稚園を通じて、知り合った日本人の母親たちとの交流から、日本人の人たちの輪に入りにくく、表面だけの付き合いをしているように感じられて戸惑うこともあった。このころに、夫がテレビを買ってくれたので、当時、放映されていたドラマの「世界の中心で愛をさけぶ」を見て、日本語を勉強した。それまではあまり日本のドラマを見たことがなかったが、このドラマはいいと思った。

その後、I さんと夫は子どもを新宿区にある韓国学校に入れるため、来日直後に住んだ場所から新宿区の学校の近くに引っ越しをした。そして子どもはＩさんたちの希望通りに、韓国学校の小学部に通うことになった。しかし、二年ほどしてから、今度は同じ新宿区でも違う地域に再び引っ越しをすることになった。その時、子どもはまだ低学年だったこともあり、新たな引っ越し先から一人でバス通学をさせるのは心配だったため､結局、子どもを引っ越し先近くの日本の公立小学校に転入させることにした。

◇　都会である新宿区　◇

来日直後に住んだ東京郊外と比べて、引っ越しをした先の新宿区は、人間関係がなんだか冷たいと感じる。前に住んでいた所は、周りの日本人の母親たちは東京都出身者ではなく、地方出身者の人が多かったこともあってそのように感じるのかもしれない。また、その時期はちょうど韓流ブームが起きたことが幸いしたのか、周りの人たちは韓国から来た自分にやさしく接し、よくしてくれたと思う。

新宿区で二番目の居住地域に住み始めたときには、上の子どもが公立小学校、下の子どもが公立保育園に通い始めたが、学校や保育園という場でいろいろな面でカルチャーショックを感じることが多かった。例えば、子どもが何か間違いをしたときに、それを叱るのは韓国では「先生」であると思うが、日本では周りの「子どもたち」なので、いくらそれが注意だとしても大多数の日本の子どもが注意をしているとこれはいじめのように見えてしまう。先生にそうした自分の意見を率直に行っても、自分が思っているようには相手の先生に通じているとは思えないことが何度かあった。そうなると、自分と先生方とのコミュニケーションもうまくいかないように思えて、冷たい人間関係だと感じてしまう。これは、日本と韓国の違いだと自分に言い聞かせているが、それでも、お互いわかりあえないことを、ときどき残念に思う。

日本に来て一番よかったと思うことは、キリスト教の信仰を持つことができたことだと思う。I さんは、自分には信仰があるので、3 月 11 日の東北大震災のときも、日本に住むことが怖いとは思わなかった。地震があったときに、自分が習慣的に行ったことは、聖書の言葉を繰り返すことだったと言う。

◇　家族の将来　◇

夫の仕事もあり、今後も家族で日本に住むことになると思うが、日本に住むことに特に不安は感じていない。一つには、日本と日本人の人たちが好きであることと、また、もう一つは、現在は、教会を通じて多くの仲間と出会い、そのコミュニティの中で暮らしているので安心感もある。

子どもの言語については、上の子どもが韓国学校に行っていたときは、子どもは家の中でも韓国語で話していた。しかし、日本の公立小学校に移ってからは、母親が話す韓国語に対して日本語で答えたり、韓国語と日本語の両方を使ったりするようになった。子どもたちは、これからも、環境に応じて、言語を覚えていくのだと思う。

そうした中で、親としてできることは、まず、自分自身が韓国語を忘れないように勉強をし続けることだと考えている。

＜인터뷰　９５＞

SJ씨 (30대/남성) 「인터넷 정통 언론사로서의 의무와 역할」

2011年12月19日　서울출신

신문사 일본지사대표, 일본체재 4년째

인터뷰어 : 오 세연

◇ 약력 ◇

신주쿠 타카다노바바 근처에 거주 하고 있으며 현재는 스포츠서울미디어 일본지사장을 맡고 있다. 원래는 가업인 인쇄출판업계에 있었으며, 해외 진출을 위해서 미국, 유럽등 전 세계 여러 나라를 다니면서 한국의 중소기업이 해외에 진출 할 수 있는 루트를 모색 했다고 한다. 2007년도에 일본에 와서 어학연수와 제팬프린팅 아카데미를 다녔다. 또한 인쇄출판과 일본의 출판 미디어 관계에 종사하며 현재에 이르게 되었다.

◇ 일본에오게 된 계기 ◇

인쇄출판업인 가업을 계승하기 위하여 출판에 관한 공부를 해 왔다. 그리고 해외 진출을 위한 노력도 10년동안 끊임없이 해 왔다.

'제품이 미국에서 얼마일까 유럽에서 얼마일까 일본에서 얼마일까 이런 형태로서 현지조사를 했죠. 미국은 거리상 멀고 또 인프라가 발달이 덜 되어 있어서 온라인 인쇄나 미디어에 관한 사업은 그 당시(1995년도)에는 적합하지 않았고...' '마찬가지로 유럽도 97,8년도 2000년도일 때인데 이때도 조금 실질적인 사업을 투자하는 여건이 조성되지 않았으며, 일본은 월드컵(2002년)이후로 한일 일도 많아서 저희가 계속 주시를 하다가 2007년에 직접 이쪽으로 넘어오게 되었죠.'

최종적으로 일본에 오게 된 계기는 한국의 인쇄에 관한 인프라가 일본과 동일한 부분이 많았으며, 특히 한국과 일본의 인쇄출판의 기술, 노하우의 접목이 잘 이루어진 부분이라고 한다. 또한 그는 이렇게 말한다. '일본에는 혼이 있는…일에 대한 일본에 힘이라 할까요…일본의 정신이 있기 때문에 이거를 보고 기술적인 노하우와 한일간의 근접성을 고려해서 일본에서 하면 적합 하겠다고 생각했고, 지금도 그때랑 변한게 하나도 없습니다.'

그는 한국의 대학원을 마치고 2007년 9월에 일본에 왔으며, 일본에서 랭귀지 스쿨과 제팬프린팅 아카데미에서 1년동안 연수를 받았다. '제가 1년동안 연수를 받으면서 일본 출판기업들이 해야하는 어떤 기술적인 연수, 그리고 이론적인 연수, 현지 일본의 독판이나 단기 연수등 주로 트레이닝을 하는 과정을 1년동안 했습니다.' 연수를 마친후, 일본에서 일본의 법인과 창업을 하였다. 이런 과정을 거치고 현재는 가업이 아닌 다른 분야에 종사를 하고있다. '출판 미디어라고 보면, 인쇄, 디자인 이런 것들은 가업을 잇기 위해서 준비했었고… 인쇄출판을 한국에서 하면서 또한 그런 과정을 일본에서도 겪고, 창업을 했으며, 최근까지 운영을 해 왔습니다.' 그는 한국의 DTP라는 회사의 현지 일본법인을 만들었다.

'이번에 스포츠서울미디어 일본대표로 발령을 받은 계기로 기존의 일과 겸직 할 수 없어기에... '라고 말하며, 지금 분야인 새로운 일로 전환하게 되었다고 한다.

◇ 인터넷전문 스포츠신문의 매력 ◇

스포츠서울미디어는 역사가 특이하다고 볼 수 있는 언론사라고 한다.

'기존의 지면인 신문에서 인터넷으로 온 가장 큰 획을 그은 매체인데요, 대한민국 내에서도 가지고 있는 역할들을 일본에서도 똑같이 할 수 있는 여건이 조성 되어 있습니다. 단지, 한류사업 쪽이 아닌, 일본에서의 정식적인 언론사로서 제 자리를 임 할 수 있도록 여행상품, 라이센스 상품, 모바일 서비스 등 전부 가능 한 업체이기 때문에...' 그가 지금까지 가업을 위해서 쌓아온 지식과 경험을 살려서 인쇄 출판에 관한 노하우를 정리하면 일본 내에서도 인터넷 정통언론사로서 자리를 매김 할 수 있다는 희망을 가지고 있다고 한다. 지금 현재는 일본에서 주목 받고 사회를 기여하는 언론사를 만들기 위한 준비 작업 중 이라고 한다.

'합작법인 형태로 해서 정식으로 해외투자를 통한 언론사이며, 일본에 내년 4월쯤*(2012년4월)에 정식 지사 오픈식을 엽니다. 단순히 한국계 기업이 와서 취재하고 보도하는 게 아니라 일본의 본지 회사랑 제휴를 해서 상호 기사 성공 및 웹서비스…월간지, 주간 신문, 그 다음에 교민들을 위한 서비스를 저희가 시행 예정 중입니다. '

◇ 일본사회에서의 신오오쿠보 ◇

처음에 일본에 왔을때는 주변에 일본 사람밖에 없었다고 한다. '저랑 관계있는 분은 2세 자녀들, 업계 관련된 선배 밖에 없었어요. 제가 일본어도 약하고 기타 일본 경험이 없어서…부족한 점이 있더라구요. '

현재 신오오쿠보가 그의 활동 영역이며 지금 살고 있는 곳도 신오오쿠보와 가까운 곳에서 살고 있다. '신오오쿠보에 와서 여기 한인회, 민단,

청년상공회의소, 기타 여러 상가조직들의 한국 사람들과 어울리며, 서로 모임도 가입하고 활동도 하면서 많은 조언을 받았습니다. 비지니스 조언 플러스 또 거래도 많이 해 주셨고 일본에서 어떻게 주로 사업을 해야하는지 멘토를 많이 해 주셨습니다.'

그리고 신오오쿠보를 중심으로 활동을 하면서 느낀 점과 신오오쿠보에 대한 이미지, 생각에 대하여 이야기를 나누었다.

'신오오쿠보를 단순히 한류형성으로 하는 시각은 잘못 된 것 같구요, 저희가 저희 편집장님과 함께 "뉴오오쿠보"라고 말도 하지만 저희가 신오오쿠보를 단순히 한인사회, 한류를 편승한 음식업의 발전, 그런 쪽으로는….신주쿠에 위치한 오오쿠보는 한인들이 거주 하면서 일본에 속한 하나의 커뮤니티입니다. 그렇게 생각해야하고 신오오쿠보가 전 보다는 범죄나 이런게 없어지고 쾌적해졌지만 아직도 가야할 산들이 많습니다. 그래서 저희는 오오쿠보가 신주쿠구에 속한 구민으로서 저희가 외국인이라는 별도의 집단이 아니라, 일본에 거주하며 정식 동등하게 세금을 내고 권리와 의무를 해 나가는 그런 형태로서 여기를 승화시키고 업그레이드를 시켜야 한다고….'라고 말하며, 이 지역을 활성화하고 지역경제에 이바지를 하는 형태로서, 여러 한인단체와 주변의 일본인 주민들과 융합하여 같이 앞으로 나아가는 것을 더욱더 큰 목표로 삼아야 할 것 같다고 한다.

◇ 앞으로의 장래 ◇

마지막으로 일본사회에서 한국의 인터넷언론사로서 어떻게 나아 갈지에 대하여 포부를 들려주었다.

'저희는 정통 인터넷 언론사로서 스포츠서울이 일본의 언론사로서 거듭나기 위해서 노력을 할 것입니다. 일본에 있는 소식을 한국에 정확히 전하고 한국에 있는 소식을 일본에 전하면서 상호 의사전달을 할 수있는 역할을 해 나아 갈 것입니다.'

인터넷 언론사로서의 책임과 의무 또한 한류뿐 만아니라, 교민사회를 대변 해 나갈 것이라는 SJ씨의 큰 포부를 들으며, 일본사회에 살고 있는 교민으로서 인터뷰를 하는 내내 마음이 너무나도 든든했다. 언론사에 대한 이미지는 각 나라에 따라서 많이 틀리겠지만 인터넷으로 통한 정보교환은 지금 이 국제사회에서는 필수조건이라고 해도 과언이 아닐 거라는 생각을 하면서 인터뷰를 마쳤다.

＜インタビュー　９５＞

SJ さん（30 代・男性）「インターネットの正統派マスコミとしての義務と役割」

2011 年 12 月 19 日　ソウル出身
新聞社日本支社代表、日本滞在 4 年目
インタビュアー：呉　世蓮

◇ 略歴 ◇

住まいは新宿の高田馬場の近くであり、現在は「スポーツソウルメディア」日本支社の代表として勤めている。元々、家業である印刷出版業界におり、海外進出のために欧米など、世界中の国々を回った。韓国の中小企業が海外に進出できるようなルートを模索していたという。2007 年度に来日し、語学研修やジャパンプリンティングスクールに通った。その後、印刷出版と日本の出版メディアに関わりながら現在に至る。

◇ 来日した切っ掛け ◇

印刷出版業である家業を受け継ぐために、出版に関する勉強をしてきた。そして海外進出へのためにも 10 年余り絶え間なく、努力をしてきた。

「製品がアメリカでいくらなのか、ヨーロッパではいくらなのか、日本ではいくらなのか、という形で現地調査を行いました」。「アメリカは距離上、遠くてまた、インフラがあまり発展していなくて、オンライン印刷やメディア事業をするにはその当時（1995 年度）にはあわなくて…」。「同じくヨーロッパも 97 年、98 年度、2000 年の時も、実際に実質的な事業に投資する与件が整っていなく、日本はワールドカップ（2002 年）以降、日韓における仕事も増えて、私たちはずっと日本のことを念頭におきながら、しばらく様子をみて、2007 年度にこちらの方（日本）に来ることになりました」。

最終的に来日した切っ掛けは、韓国の印刷に関するインフラが日本と同じところが多くて、特に韓国と日本の印刷出版の技術、ノウハウとのつながりがうまく成り立っているという。また、彼はこのように話す。「日本には魂が存在し

ている…仕事に対する日本の力と言いますか…。日本の精神があるからこそ、これをみて技術的なノウハウと日韓間の近接性を考慮して日本で仕事を展開した方がいいかと思って…今もその当時と同じく、ひとつも変わっていません」。

彼は韓国の大学院を修了して、2007年9月に来日し、日本で語学研修と Japan Printing Academic で1年間研修をうけた。「僕が1年間の間に研修をうけながら、日本の出版企業における技術的な研修、そして理論的な研修、現地日本の独版や短期研修など、主にトレーニングを行う課程を1年間受けました」。研修を終えて、日本で日本の法人を創業した。このような過程を経験した上に、現在は家業ではない他の分野に従事している。「出版メディアをみると、印刷、デザインなどこのようなことは、家業を受け継ぐために準備してきたのであって、印刷出版を韓国でもやってきてさらに、このような過程を日本で経験し、創業にまで至りました」。彼は韓国の DTP という会社の現地日本法人を作り上げた。

「今回、『スポーツソウルメディア』日本支社の代表になったことによって、既存の仕事と兼職することが出来なくて…」。と話しながら、今の新しい仕事に転換したという。

◇インターネット専門のスポーツ新聞の魅力◇

「スポーツソウルメディア」は独特な歴史をもっているメディア社であるという。

「既存の紙面である新聞からインターネットへ移ったメディアの中で、最も貢献したともいえます。韓国の国内で果たしてきた役割を日本でも同じく出来るようなシステムや条件などが整っています。但し、韓流事業の方ではなく、日本での正式なメディア社として位置づけていくためにも、旅行商品、ライセンス商品、モバイルサービスなど、全てが可能な会社です…」。彼が今まで、家業のために積み重ねてきた知識や経験を活かして、印刷出版に関するノウハウをまとめると、日本の国内でもインターネットの正統メディア社として、場を占めていけるような希望をもっているという。今、現在は日本で注目を浴びて、社会に貢献できるメディア社を作り上げていくための準備作業中であるという。

「合作法人の形態として正式に海外投資を通したメディア社で、来年4月（2012年4月）に日本支社のオープン式が開かれます。ただ単に、韓国系の企業が来日して、取材をし、報道するのではなく、日本の現地会社と提携を結び、相互記事の成功及びウェブサービス…」。「月刊誌、週刊新聞、そして日本に住んでいるコリアンのためのサービスを目指して、施行予定中であります」。

◇　日本社会での新大久保　◇

初めて日本に来た時には、周りに日本人しかいなかったという。「私の知り合いは、2 世の方々、業界の先輩しかいませんでした。私の日本語も上手ではなく、あと、日本での経験もあまりなくて…足りないところが多かったです」。

現在新大久保が彼の活動領域であって、今住んでいるところも新大久保から近い。「新大久保に来て、ここの韓人会、民団、青年会議所など様々な商店街組織の韓国人たちと出会い、交流をしながら、多くのアドバイスを受けました。ビジネス助言、また、取引もたくさんして頂きまして…。日本でどのように事業をしていくべきかについて、多くの方からたくさん、相談に乗って頂きました」。

引き続き、新大久保を中心に活動をしながら、感じたことや、新大久保に対するイメージ、考えなどについて話を交わした。

「新大久保を単なる韓流形成としてみる見方は、間違っていると思います。会社の編集長と一緒に、新大久保ではなく、『ニュー大久保』とも言いますが、新大久保を単純に韓人会、韓流に便乗した飲食業の発展、そのような方向には…。新宿に位置している大久保はコリアンが居住しながら、日本に属している一つのコミュニティです。このように考えるべきだし、新大久保が前よりは、犯罪などが減り、快適な環境になりましたが、まだ越えていくべき山は、多いと思います。そのため私たちは、大久保が新宿区に属した区民として、私たちが外国人という別途の集団ではなく、日本に居住して、正式に、同等に税金を払って、権利と義務を果たしていくような形態として、ここを昇華し、アップグレードをしなければならないですが…」。と話しながら、この地域を活性化し、地域経済に貢献できる形として様々な韓人団体と周りの日本人の住民たちと融合し、ともに進めていくことを最も大きな目標として立てていくべきではな

いかと彼の考えを話してくれた。

◇　これからの将来　◇

最後に日本社会で、韓国のインターネットメディア社としてどのように展開していくかについて抱負をきかせてくれた。

「私たちは、正統インターネットメディア社として、『スポーツソウル』が日本のメディア社として成長していけるように、努力していきます。日本のニュースを韓国へ正確に伝えて、同じく韓国のニュースを日本に伝えながら、相互の意思伝達をすることが出来る役割を果たしていきます」。

インターネットメディア社として責任と義務、さらに韓流のみならず、日本に居住しているコリアンコミュニティを代弁していくという SJ さんの大きな抱負を聞きながら、私も日本社会に住んでいるコリアンとして、インタビューをしている始終、とても心強かった。メディアに対するイメージは国によって異なるだろうけど、インターネットを通じた情報交換は、まさに今の国際社会においては必須条件であると言っても過言ではないだろうと思いつつ、インタビューを終えた。

＜インタビュー　９６＞

M さん（30 代、男性）「青春がもったいなくて来た日本に骨を埋めるつもり」

2011 年　12 月 27 日、ソウル出身、会社員
日本暦年 15 目
インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇　青春がもったいなくて外国に行ってみたかった　◇

1972 年生まれ、ソウル育ち、7 人兄弟の末子の L さんは、韓国で機械関係の専門学校を卒業して軍隊に行ってきてから、就職する道もあったが、外国に行ってみたかった。特別な目的があった訳ではないが、そのまま就職するには「青春がもったいなく」外国に行くことを決心した。そして 1 年間お金を貯めて日本行きを決めた。欧米に行くにはお金が足りなかったし、自分で稼ぎながら勉強もできる日本を選択した。

◇　日本語学校から大学に進学　◇

1996 年来日し、岡山の日本語学校を 1 年半通った。岡山の生活は、生活費が安く周りの人も優しく「とても良かった」。最初は金がなく生きるために必死だった。でも、そのおかげで日本語も一生懸命に勉強したし、アルバイト先の人にも助けられ生きのびられた。

日本語学校を終えてから、1998 年に大阪にある大学に進学した。入学の際には岡山で知り合った在日の方々に経済的に助けてもらった。大学在学中はアルバイトをしながらなんとか卒業することができた。

◇大手企業に就職、そして韓国系企業に転職◇

2002 年、大学の先生の紹介で東京に本社がある大手日本企業に就職した。入るときは韓国とのビジネスに携わる予定で、少なくとも 3 年はやめないで勤めることを約束させられた。ところが、初めて任された仕事は畑違いの IT 部門で、いきなり韓国企業が納品したシステムを運用している現場の仕事を命じられた。それから身振り手振りで仕事をおぼえ、後には会社からも高く評価されとても良い処遇も受けた。しかしその仕事は肉体的にとてもきつく、約束の 3 年目に帰国を口実に仕事を辞めようとしたが、会社側が韓国連絡事務所を作ってくれて、引き留められた。2004 年から約 2 年半、韓国でその会社の仕事を続けたあと、管理職になって日本に帰った。

それからしばらく勤めてから、2009 年に 8 年間勤務した会社を辞めて、韓国会社の日本支社に転職した。ところが、2011 年にその会社が日本から撤退することになったが、会社を説得して、自分の持ち分を入れた別法人を作って社長として仕事を引き継いだ。転職してからの仕事は以前日本の会社に勤務した時に得たノウハウやネットワークが大いに役に立った。いま考えると日本の会社に就職して良かったと思う。

◇　日本に骨を埋める　◇

2009 年、日本人女性と結婚し、去年子供が生まれた。結婚してから千葉県の北部に住んでいた。3・11 の時には、小さい子供もいて不安だったので妻と子供を関西の妻の実家に送って、5 月連休の時に連れてきた。しかし住んでいた地域が放射能のホットスポットと騒がれ、悩んだ末神奈川県に引っ越した。

これからも日本で生活し「骨を埋める」つもり

だ。自分のキャリアを活かすためにも、また妻も日本人なので、日本が最適ではないかと思う。すでに日本の会社に勤務している時に永住権も取得している。だが、日本に住むといって韓国と縁が切れるとは思わない。韓国は仕事の関係もあるし距離も近く国内移動と同じように行けるので一つの国に住んでいる感覚だ。

日本はサービスが良いと言われるが、以前良いと思ったことがいまは逆にサービスが良くないと感じている。銀行を例に挙げると、待っている間に「何の御用ですか」を聞くなど一見親切に見えるが、本当のサービスは窓口の業務時間をもっと長くするとか、手数料を下げることだと思う。またマニュアルから外れると融通が利かないのも不便だ。良いと思ってもなかなか取り込めない、変化できないことが、日本社会がもっと発展できない足かせになっていると思う。

＜インタビュー　９７＞

CY さん（30 代・男性）「IT 技術者からの転身と新たな挑戦」

2011 年 12 月 28 日、釜山出身、会社経営
日本在住 11 年
インタビュアー：渡辺幸倫

1973 年生まれの CY さんは大学卒業後に IT 技術者として来日した。様々な会社でキャリアを積んでいたが、一念発起。2 年程前に独立して貿易会社経営へと転身した。現在は新たな挑戦がまさに進行中で、業務に忙殺されながらも充実した日々を送っている。

◇　外国語を勉強するのが好き　◇

釜山で生まれた CY さんは両親の都合で生後まもなくチェジュ島へと引っ越した。家族は両親に妹が一人。両親は今もチェジュに、妹はソウルに住むという。

CY さんは子供の頃から外国語に興味があり、はじめは英語に没頭した。中学生の頃には、アメリカ POP ヒットチャートの曲を全部覚えるほど熱中した。高校に入ると正解不正解を問う勉強に疑問を感じ徐々に関心を失っていくが、同時に第二外国語としてフランス語も勉強した。

釜山にある大学に進学し、コンピューターを専攻しプログラミングなどを学んだ。途中軍隊へ行ったが除隊後自分が英語をずい分と忘れていることに気がつく。「『この単語の意味はこれだよ』って自分では理解していて。でも辞書を引いたら全然違ってて。まあ、忘れたんだったら勉強し直せばいいんでしょうけど、何を間違えてるかもわかんなくなっちゃったんです。で、いったん英語はおいといて…」と思ったが、外国語への興味はある。そこではじめたのが日本語の勉強だった。

「友達に『何で日本語を勉強してるの？日本に行くの？』とか聞かれても、『趣味だから、面白いから』って。文化とか全然知らなかったんですよ。J－Pop とか。映画とか。一切興味なかったんですよ。言葉だけに興味があったんです」。ただ、ただ、外国語を勉強するのが好きだったのだそうだ。周りには日本語を話す人もいなかったため、友達にテキストを渡してセリフを読んでもらい、それに合わせて会話の練習をしたという。CY さんの語学学習への熱意には頭が下がるばかりだ。

◇　日系企業に就職　◇

ちょうど就職活動をする頃にアメリカのプログラミングの資格を取得した。当時その資格を韓国で持っている人は大変珍しく、会社に選ばれるのではなく、会社を選ぶ方になる事が出来た。選んだ会社は日系の IT 系会社。数年後に仁川に作られる予定だった工業団地の大プロジェクトに関連して、数年ほど日本で経験を積んだ上で韓国に戻る予定だった。実はこれが初来日。しかし、その大プロジェクトが来日後半年で頓挫。転職を余儀なくされることになる。

幸い IT 技術者は引く手あまた。転職先はすぐに見つかった。その後数社を経て最後には大手の総合メーカーに籍をおくことになる。「日本で大手で頑張っているって。親も自慢みたいな。誇りだったんですよね。里帰りしても、けっこう胸を張っていました。」。しかし、30 代も半ばにさしかかり、「このままで良いのか？」と思うようになってしまった。「大企業で守られていて、5 年後、10 年後が全部見えるんですよ。『ああなるんだなぁ』って、見えちゃったんですよね。それがイヤだったんです」。外国人の昇進への不安もあった。新鮮な気持ちで仕事に取り組めなくなり色々と思い悩むようになった。そんな時に縁あって参加したのが、韓国人経営者の

会が主催する若手向け勉強会だった。先輩経営者の人たちの話を聞き議論する3日間のプログラムだったが、金土日と参加して月曜日には辞表を出したという。実に思い切った行動力だ。

◇　新しい挑戦　◇

現在の貿易会社を起業して最近3年目に入った。立ち上げるのは「めっちゃ大変でしたよ」と笑うが、チェジュ出身の奥さんと子どももいる。「給料も出なくなるんで、やっぱりちょっと怖かった」面もあった。先輩経営者の方たちに色々とアドバイスをもらいながら準備をした。ちなみに、現在の在留資格は永住。この在留資格はそれまでの技術者と違い、自由に商売が出来るのが魅力だ。

会社を経営することになったことで、時間もお金も自由になるのがとても良いという。しかし、決して無軌道になっているわけではない。会社員時代にルールや規則などがしっかりした環境で仕事をすることも学んでいるので、ちょうど良いバランスがとれていると思う、と現状を分析してくれた。

「前、会社にいた時と、今の情報は量と質が全然違うんですよね。見える範囲と高さが違ってくる」と明るく語るが、「それが悲しく嬉しいと言うところもある」という。以前の会社で仲の良かった友人と、会う度に考え方の違いが広がっていくのを感じ、少し寂しさもあるというのだ。

会社の経営はもちろん一筋縄ではいかない。健康食品や雑貨など様々な物を扱っているが、まだ「これ」と言った柱となる主力商品がないのが今の課題だ。ただでさえ年末で忙しく、しかも、ちょうど柱となる見込みのある商品への対応に忙殺されていたCYさんだが、実に充実している日々を送っているように見えた。

＜インタビュー　９８＞

ＩＳさん（30 代・男性）「日本と韓国の一体化に希望を託して」

2012年1月18日、ソウル出身、会社員
日本在住通算5年
インタビュアー：武田里子

◇　略歴　◇

ISさんは、1973年、4人きょうだいの末っ子としてソウルで生れ育った。実は「日本は嫌いだった」。だから日本のマンガを読むこともなく、日本に来るとも、日本語を学ぶことになるとも考えていなかった。そんなISさんに転機が訪れたのは、IMF危機の時だ。当時ISさんは大学3年生。最悪の就職状況に、「日本語でも勉強してみよう」と思い立つ。1998年に休学して来日した。日本語学校でゼロから日本語を学ぶ傍ら、高田馬場で開かれていたYMCAの日本語交流の会にも参加していた。そして、そこで2年後に結婚することになる日本人女性に出会った。彼女はカナダから一時帰国し、たまたま友人に誘われてその会に参加していたのだ。運命とはこういうものかもしれない。二人には交際を継続するかどうかの選択を迫られる出来事が2回あった。一度目はISさんが1年間の留学期間を終えて韓国へ帰る時。この時は、彼女が韓国に語学留学することで乗り越えた。二度目は彼女の韓国留学が終わり、留学ビザが切れる時。この時、ISさんは彼女にプロポーズした。

二人の結婚には何の障害もなかった。彼女の韓国語が「僕の日本語より上手」になり、ソウルで暮らすことにしたので、ISさんの両親は反対どころか喜んでくれた。彼女の両親も、前年に彼女の弟が韓国人女性と結婚していたので、ごく自然に二人の思いを受け止めてくれたように思う。ただ、2007年3月、長女の小学校入学にあわせて再来日する時は、ISさんの両親に大反対された。ISさんは韓国人IT技術者の日本企業への派遣などを行う会社を経て、今はネットビジネスの実質的オーナーとして活躍している。韓国に里帰りできるのは年に1回程度だが、週に1回は両親に電話で近況を伝えるようにしている。

◇　歴史問題　◇

もともとISさんが「日本嫌い」になったのは、反日教育の影響が大きい。しかし、受身の教育のせいだけではない。ISさん自身が戦後のドイツと日本の戦争犯罪に対する対応を比較したうえで、日本の戦後処理のあり方について問題意識を深めたからだ。その「嫌いだった」日本に留学し、日本人と結婚し、日本に住んでいる現在の状況について、ISさんは次のように自分の中で折り合いをつけている。

歴史教育はそれぞれの国の立場があるので違いがあるのはやむを得ない。韓国併合から数えれば、

100 年も前のことになるので、今の人たちに責任を問うことはできない。とはいえ、日本人の歴史認識や、日韓の歴史問題への関心のなさには、正直がっかりさせられることがある。長女は 5 年生になるので授業で歴史の勉強も始まる。子どもから日韓の歴史問題について質問されることがあるかもしれない。その時は、「私は韓国の見方を、妻は日本の見方を教えたい」と言う。

韓流ブームのおかげで、これまでに比べて日本人と韓国人が出会う機会が格段に多くなった。それ自体はとても良いことだが、日本の人たちに伝えておきたいことがある。韓国には、日本の植民地時代に使われた刑務所など歴史的建造物が残り、今も韓国の子どもたちは社会見学でそうした施設を訪問して歴史を学んでいるということだ。韓国の若者が日常会話の中で日本の人たちと歴史問題について話すことは少ないと思うが、韓国の若者たちはそういう教育を受けていることも知っておいて欲しい。

一方で、韓国にも歴史教育の問題がある。たとえば、韓国の歴史教科書には「在日」についての記載がない。関心をもって調べようとしなければ、知らないままになる。韓国側には、日韓条約を締結した後、経済発展を最優先することで、戦後のさまざまな問題を切り捨ててきたという、後ろめたさのようなものもある。北朝鮮についても、北朝鮮に住んでいる人は、人間じゃなくてオオカミだと教えられた。朝鮮戦争が始まった 6 月 25 日に学校でポスターを描く授業があり、オオカミの絵を描き、「悪い北朝鮮」と書いたりした。同じ民族だという教育に変わってから、まだ 5 年ほどしかたっていない。

最近では、金正日総書記の死去をめぐり、北朝鮮の人々が泣いているのはおかしいというような報道があった。国を代表する人が亡くなったら、国民が泣くのは当然のことだ。せっかくの和解の機会になったかもしれないのに、断絶を深めてしまったかもしれない。歴史問題を解決する上で大切なのは、それぞれが被害者意識を乗り越えることだと思う。

◇　変化への対応の違い　◇

韓国の変化はとても早い。日本ではなかなか話が進まないが、韓国では 2005 年にアジアで初めて永住外国人に選挙権を与えた。変化を好むのは韓国の国民性かもしれない。韓国人はまず変えてみる。変えてみて間違っていたら元に戻せばいいと考える。一方、日本人は変化を好まないように感じる。日本の会社では何かを提案しても、「今までこうしてきたのに、なぜ変えなきゃいけないの？」という反応になる。会議でも日本人は意見を出さない。伝達会議なら上の人が決定事項を伝えるだけでいいのに、一応意見を求める。韓国の会社では、下の人も自由に自分の意見を主張する。もちろん年配者の考え方が固くて、受入れてもらえないこともあるが、言いたいことは言える。意思決定の仕方が違うために、日本の会社で働いていた時は、よくぶつかった。日本と韓国の双方の良いところをミックスして新しいやり方を見出していければいいと思う。

◇　日本と韓国の一体化　◇

IS さんは 2011 年に永住資格を取得し、妻も 2006 年に韓国の永住権を取得しているので、法制度上はどちらの国でも暮らすことができる。韓国生れの長女には、できるだけ韓国語で話しかけるようにしているが、返事は日本語で返ってくることが多くなった。いつかまた、子ども自身が関心を持って韓国語の勉強をしようと思えば思い出すのは早いだろう。子育てが一段落するまでは、日本を拠点にすることになるが、将来は日本と韓国の双方に家をもち、行ったり来たりするような生活になるかもしれない。これから日本と韓国の一体化はもっと進んでいくだろう。ひょっとしたら一緒になるかもしれない。そんな日もくるような気がする。

＜インタビュー　９９＞

L0 さん（40 代・男性）「要するに知恵しかないんですね。資金もない。人脈もない。そうすると、あるのは自分の知恵しかないんですよ。頼るものが」

2012 年 1 月 19 日、全羅南道出身
会社経営、日本在住 23 年
インタビュアー：渡辺幸倫

日本人の奥様とスカイツリーの見える所に暮らしている L0 さん。20 年ほど前に読売奨学生として来日した。これまで色々な仕事を経験してきたが、現在は衛生管理のための暗所イオン触媒を主に扱う。新宿の韓国料理店は一大お得意

先だ。

◇　来日以前のこと　◇

現在 43 歳の L0 さんは三男一女の長男として全羅南道で生まれた。両親の離婚をきっかけに生活費を稼いだり弟妹たちの面倒をみる必要から高校を中退してしまう。しかし、L0 さんの話はここからだ。まず弟たちの世話にめどをつけ、日本でいうところの大検に合格する。日本以上の学歴社会である韓国。もちろん大学への進学を考えた。しかし、資金面の困難さだけでなく「高校で 3 年間勉強した人と大検受かった人と短期間で勉強してきた人とは何か違うんです」と感じていた。そんなときに新聞を読んでいたときに見かけたのが読売新聞奨学生。「これはチャンスだと。自分が働きをしながら、授業料、食べ物から全部提供してくれる。また、奨学金も出してくれるというので、それを見て日本に足を運ぶキッカケになったんです」。LO さんにとっては願ってもない条件だった。さっそく来日し、新宿にある外語専門学校へと進む。23 歳の時のことだった。

◇　寮の運営　◇

専門学校では日本文化学科で学んだ。日本語を直接勉強するよりも、まずは日本人の心を学ぶことが大事だと思ったからだ。もちろん言葉も熱心に学んだ。専門学校が終わり一端韓国に帰ったが、その後まもなく再来日し，今後は大学に進学する。まじめに勉強しながらも、「自分の将来に対してのビジョンに不安を感じ」、学生生活の傍らビジネスを始める。

「当時、私は部屋を借りるときに外国人だから、しかも韓国人だから保証人がいる。保証人を立てても外国人、特にアジア人はなかなか貸してくれなかったんですよ」。これが切っ掛けとなった。当時はちょうどバブル崩壊後。「不良債権のような余った建物がたくさんあった」時期。たまたま知り合った在日の方が不動産業を営んでいたが、その人と組んで外国の学生のための寮を作っていった。

空きオフィスなどを譲り受けリフォームする。粗大ゴミから拾ってきたテレビなどをきれいに磨いて部屋に入れる。保証金は一ヶ月もらったが、出る際に次の人を紹介すればそのまま返金した。「知恵も必要なんですね。そうなると、利用するお客さんが埋まるわけですね」。いつの間にか東京都内外で 8 カ所も運営するようになった。

「自分の痛みを生かして、それをビジネスにするという。そうすると、疎外感を感じて苦しんでいる人たちに、色んないいサービスができるからいいし、それに基づいて私は稼げる」。これは今に続く L0 さんの仕事の原点のようだ。

次に始めたのは洋服。韓国で仕入れてきて駅ビルなどにアウトレットの店を出した。
ずいぶんと実入りも良かったが、「欲望がなかったんですね、金に対して。学生の時から。なので儲かった分奨学金出したり、色んな活動にお金を出したり…貪欲ではなかったんですね。つい最近なったんですけど」と笑いながら当時を振り返る。

◇　靴の加工販売　◇

しかし、仕事が大きくなると摩擦も大きくなり、仕事を大きく転換する。次に目を付けたのは靴だ。たまたま寮を貸した人が韓国出身の靴職人が、道具屋材料を残して急に帰国することになったという。「『お前だったらやれるよ』と言われて、『そうか』と軽い気持ちで」靴業界に入ることになる。しばらくは職人とお客さんの通訳をやったりしたが、これでは将来性はないと海外生産を中心とする物流システムへと動いていく。日本でも働いたことのある韓国人靴職人の中国進出を後押しした上で、委託加工の流れを作った。委託先の育成や航空会社との折衝など一筋縄ではなかったが、月間 22 万足。かなりの成功をみることができた。

しかし、一年ほどで靴の大手引先が倒産。そのあおりで 3 千 8 百万円の借金を背負ってしまう。自殺まで考えたが、開き直ることにした。「人間追い込まれるとどっちかですね。追いこまれて追い込まれて自殺するか、開き直るかどっちかなんですよ」。倒産する会社があるのなら売れ残りの在庫もあるはず。これに目を付けた。メイドインジャパンの靴を安く買ってきて、韓国、中国、東南アジアに持って行った。瞬く間に 2 千数百万円を返済することができた。「通関業者に、これが信用となったわけですよ」。この逆境を跳ね返したことで、運賃をこれまでの半額以下へと下げることができたのだ。

順調に仕事は大きくなっていったが、ある時、

委託加工と関税に関連して問題となる。監査法人に任せていたが関税法違反を指摘される。内容は専門的なことでいわゆる「見解の違い」と言うことではあるが、L0 さんは「私の間違いは何かというと、出る杭は打たれるということ。出る杭だったらもうとことん出た方がいいと思うんですよ。危なくて背が届かなくて高さが届かなくて、打てないくらい出ちゃえばいいんですけど、中途半端に私は出てしまったんです。だから打たれやすい、または出ないかどちらかだったんですね。それが私のその時の失敗」と考えた。まだ当時二十代後半だった。なぜこれほどのリスクをとることができたのか不思議だが、「若さというものには、チャレンジと挑戦というのがかかせないと思いますね」という。

◇　「衛生と安全」業　◇

「そういうことがあって、一気にまた方向転換をしたんです」。ここまで来て、やっと現在につながる仕事へと話は移る。これからは衛生関連と安全が重要と考え、業種を化学系へと大きく転換した。

第一次産業だけでなく第二次産業も国外からの輸入に頼る日本では、「海外からはいるものに関しては、安全性と衛生、気にしなくちゃならない」そのため、今扱っている「暗所イオン触媒というウイルスとか匂いとか、抗菌、消臭、そういう管理に関しては今後、伸びるだろうと。今日本でもそれはかなり伸びてますし。中国や東南アジアあたりはこれからの産業なんですよ」という読みだ。

既に流れができてきており、取引先にも大手企業が並ぶようになった。大手との取引を広げる際に気にとめていることがある。そもそも「大手が私と取引するとしたらそれは至難の技で、だったら『言いたいことはいいましょう』ということです、私の主義」ということだ。もちろんその背景には、自分の扱っていることに対する自信がある。「人がやっていないもの。日本で日本人に認められるためには、彼らがやれないもの。彼らができないものは何かっていうのを考えるんですね」。

L0 さんがもう一つ大事にしていることがある。福沢諭吉の「天は人の上に人をつくらず、人の下に下を作らず」をもじってこう言ってくれた。「『銭を儲けるためには、国と国の間に壁を作らず、人と人の間に敵を作らず』。まんべんなくやるんですね、それが商売の基本であると。要するに、銭を儲ける人こそ平和主義だと思うんですね。なぜかというと、平和にならないと経済は伸びないんですよ。特殊な商売以外に。それは商売じゃないですから。だから本当に銭を儲けるためには、敵を作らず壁を作らず。それが大事かなと思うんですね。だから今の日本の社会のために私は、何の貢献、どういう貢献ができるか。それは韓国人としてニューカマーとして、そういう考えを常に持つことによって、「あ、こいつだったら、この韓国人だったらお付き合いしてもいい」と、悪口を言ってもいいですよ、人間付き合いがあれば悪口が出たり涙も出たり…それは人間が付き合うために出たんだから。そうならないと可愛がってくれないんですよ」。ビジネス上の話の中ではあったが、懐の広い考えが伺えた。

＜インタビュー　１００＞

ST さん（20 代・女性）「韓国と日本、無理に選ばなくても良いんですよね？」

2012 年 2 月 5 日、釜山出身
会社員、日本在住 9 年
インタビュアー：渡辺幸倫

高校卒業と同時に日本に留学した ST さん。大学、大学院と日本で学び、インタビューの数日前に韓国系の企業に転職したところだ。日本との貿易の仕事をしていた父の影響で小学校の頃から日本に強く関心を持ち来日したが、今は韓国人でもなく、日本人でもない生活をしている。

◇　初来日の頃のこと　◇

初めての来日は 10 歳の時。夏休みの間、京都の家庭に滞在して、人の温かさを感じたのを覚えている。その家は日韓貿易の仕事をしていた父の取引先で、家族ぐるみでのつきあいだった。「ひらがなも書けなかったし、日本語も全くわからなかったです。おばさんも韓国語全くわからないって状態で一緒に住んでたので、最初は無茶苦茶だったんです。文化も違うし言葉も違

うから、怒られたりとかもしたし。私が理解できなかったから怒ったりとかもしてたんですけど、本当に温かくて…そのおばさん＝日本っていうイメージで。温かく楽しく『ああ、日本ってこんな国なんだな』って思って。だから住んでみたい」と思ったと言う。

ある時、その取引先の方が事故死。子どもがいなかったこともあり、少々唐突な感じもするが、当時 18 才以下は日本に留学することが出来なかったこともあり、養女にならないかという話が出た。迷いはしたが、話をしながら日本に住むのも良いなと思い一度は決心する。しかし、手続をしに韓国に帰ったとたんに「いざとなってしまうと怖くなっちゃって…」と、話を断ってしまった。その家とは、それ以来、気まずくなってしまい疎遠になったのだが、実は、怖くなったきっかけを良く覚えている。

「すっごく下らないことだったんですけど、自分の記憶に残って覚えていることは、弟と一緒に日本に来てて、弟が私より先に韓国に帰ったことがあったんですよ。京都駅に見送りに行くときに、何か私が悲しそうな顔をしてたみたいなんです。で、おばさんが私に、『あなたも一緒に帰っていいよ』と。私に対する配慮だったと思うんですけど、私は『あ、私はいなくていいんだ』と思ってしまって。だから、後から帰っていいよって言われると傷つくんじゃないかなって思って。何かさびしかったんです」。これが気持ちに引っかかっていたのだ。

数年たってから何度もこの時のことを謝るために手紙を書いたが、結局返事が来ることはなかった。しかし、日本に留学に来てから連絡が取れ、今では日本のお母さんとなった。

◇　日本留学へ　◇

高校卒業間際にカナダに留学するが、家庭の事情で一年足らずで帰国。高校を卒業後、今度は幼い頃からの夢だった日本に留学する事にした。家族のこともあり一年程韓国で日本語を勉強し、関東の国立大学に合格した。2003 年、19 才の時のことで、経済学を勉強した。

ST さんの世代のころから高校を卒業してから、韓国の大学を経ずに来日する人が増えてきたという。理由としては、日本留学試験が韓国内でも受けられるようになったからだという。また、大学生の就職難も留学を増やしたと考えられるそうだ。「私は大学生の就職難について日本と比べて卒論を書いたんですけど、当時、韓国は 3 人中 1 人が公務員試験を受けていたのです。また、大手企業じゃないと就職しない、とか訳わからないことが起きてた」そうだ。この問題はその後も気になり修士課程では続きを研究した。「日韓企業 20 社くらいインタビューして周っていた時に、企業文化の違いや、仕事のスタイルの違いが目に見えたんです。韓国からくる人って、私と同じくらいの年だと個人の自由を求めて日本に来る人が多いと思います。なぜならば、韓国社会は上下関係が厳しく、組織の中で個人的なことまで関わることが多いようです。それを逃げたがる人が多く、国を出る人たちが増えていると思います。そして、将来に対して色んな不安を抱えている人が増えてます」。この不安の広がりと日本文化の開放の時期が重なり、日本のイメージが向上、韓国での大学進学に変わる選択肢として、日本が認識されるようになったというのだ。

◇　日韓の人付き合いの仕方について思うこと　◇

大学生活では、日本文化をはじめ、人付き合いなど色々と学んだ。若くして留学したことで悩みも深かったという。「何が一番苦しかったかというと、建前になれてなくて、外では仲がいいのに授業に入ったら彼女は彼女のグループに入ったりとかして、見えない壁を感じてたりしていたことです。外国人が少ない地域っていう

のもあると思うんですけど、辛かったです」。友達づきあいの仕方の違いは大問題だった。「自分は、自分が慣れてきた文化っていうのを出して頑張ってたんだけど、かみ合わなくて相手に違和感を感じさせたりとか、迷惑かけたこともいっぱいあったと思うんです」。と振り返る。「最初、日本人が冷たく見えて本当にパニックになったこともあるんです。『韓国じゃそうじゃなかったのに何でだろう？』とか。わーってなってうつ病みたいにもなってたし…。帰りたいって思ったこともあった」そうだ。特に、はじめから自分をどんどんと出していく韓国式とあまり出さない日本式の違いに戸惑ったという。

しかし、時間が経つにつれて問題は形を変えていく。「自分も知らないうちに性格が変わっていったようなんです。なので、3 年生になった時はほとんど日本人としか付き合っていなかったです。韓国人と向き合ったとたんに傷ついたり戸惑ったりとかしてたので…。逆の立場になったというか、押しが強すぎてちょっと重たいと思ったり。『何で韓国人ってこうなんだろう』という疑問もたくさんあったんですよ。私、大学院は日本ではなく、韓国の学校に進もうかなと思ってたんですけど、韓国社会に、合わせられる自信がなかったです」。「日本で慣れちゃうと逆のパターンはもっと大変で」と苦笑いを見せてくれた。大学に入った頃に自分が感じた戸惑いを逆の立場から眺めるようになったのだ。

だからといって、もちろん韓国を忘れるわけではなく、むしろどのようにバランスをとっていくのかが ST さんの課題であると言う。

あくまで ST さんの印象だが、韓国から「来て 1, 2 年位しか経ってない人は何を言うかというと、『日本は先進国なのにこれしかわからないの？』とか、『これよりは全然韓国の方がいいと思う』とか、自分が知っているのが全て」と言った評価をする傾向があるという。相手の言うことに下手に「ああそうなの」などと答えると、「『え、それもわからないの？』って言うしゃべり方をする」そうなのだ。つまり、一つ失敗すれば、その人、集団の「全てがダメ」というように考えがちなのだという。それが就職難にもかかわらず「就職失敗」の烙印を押されることを恐れ、大企業への就職に強く拘ることに繋がっていると分析する。

「軍隊式」と ST さんが呼ぶ上下意識も重要な影響があるという。「韓国から来たばかりの人と話したりすると、最初は親しくなって心を開けて友達になりやすいかもしれないですけど、知らない間にそういう態度が出てくるんですよ。控えめな態度を取っちゃうと強く押してくるから。うん。いつの間にか上下みたいな感じにして。実際に、韓国に行ってた時も一緒でした。だから強く言わないと同じに見てくれないし、ちゃんと言わないと無視されちゃうっていうのがあって。何も言わないで後から『いわゆる有名大学で勉強してました』とかなると、『裏切った！』とか言われたり…。簡単に想像して決めつけちゃうので、付き合いにくいところもあったりするんですけど」と笑いながら体験を話してくれた。これは、そのまま日本人へのアドバイスにもなるだろう。

さらには、日本に留学する若い韓国人たちのために「こんな本があればいいな」と考えているという。「私、実際に検索したことがあるんです。日本の文化や韓国の文化を比較してまとめた本がどれくらいあるのかっていうのを。2 冊か 1 冊とかそれくらいしかなかったです。しかも、韓国人からみても日本人から見ても、違いがお互いわかるようなものがあったら韓国人にもいいんじゃないかと思ったという。日本人向けに韓国人こうだよっていうのはあるんですけど、韓国にはない。だから翻訳して出すといいんじゃないかと」。意外なことだが、韓国では語学の教材は多いが、留学生が日本で住むために必要な日韓の文化比較は意外と少ないそうだ。

ちなみに、やや唐突だが ST さんの理想の異性は「少しくらい日本をわかってて、その感覚で分かり合える人」だという。ST さんの日韓の間で悩みながらも成長した感覚を共有できる人と言うことなのだろうか。

◇　これからについて　◇

新宿区内の大学院で修士課程を終えた後、地震やそれに伴っての一時帰国、日本に戻って日本企業と財団や大学の研究室でのお手伝いなど、紆余曲折もあった。そして、「今回就職したのは日本にある韓国系の企業なんです。何故韓国系の企業を選んだかというと、このままだと本当に帰れなくなるから。完全に日本の社会の中に入っていくことができたとしても、私はそのために日本に来たのではないです。韓国を忘れていきたくないので、韓国企業を選びました。今すぐ、帰って住むのは嫌なんだけど、いつでも帰られるように、日本の中で住みながら、韓国を忘れないようにと、韓国と関わった仕事をしたくて」という気持ちで韓国企業の日本支社に転職した。

まだ 3 日。「もうバタバタで大変だったんです。初日終わって家に帰るときに『私、何やってるんだろう』って思いました。でも、韓国文化も勉強できるし、大学以降、韓国人との付き合いも、ほとんどなかったため、ある程度韓国を忘れたくないと思うと、いい機会だと思って頑張ろうとしています。今までやってきた自由な雰囲気とは違って、今の所は日本にいるんだけども駐在さんとかちょっとプライドが高い人とか多い所に入ってるので、大変です。日本の中に居て、全く違う韓国人を見ているわけなんです」。ST さんの目を通した会社の様子がうかがえそうだ。

まだまだ何も分からないが気がついたのは、韓国語で書くことの難しさだ。「19 歳から今まで日本語でしかレポートや論文を書いたことなくて、突然報告書韓国語で書けって言われて、え？」。確かにビジネス文書には独特の様式があり、慣れるまではさぞ難しいことだろう。きっといまも悪戦苦闘中なのだろうか。